

井上 四了

自分の運命は
自分で拓け



チャレンジャー



東洋大学

チャレンジャー井上円了

自分の運命は自分で拓け

目次

プロローグ……………7

I……………長岡時代……………9

「明治青年の第二世代」／寺の長男に生まれる／漢学を学ぶ（一）／漢学を学ぶ（二）／洋学を学ぶ（一）／洋学を学ぶ（二）／和同会を創る

II……………東京大学時代……………33

「至急上洛せよ」／京都の教師教校英学科で学ぶ／東京大学予備門に入る／文学部哲学科に学ぶ／卒業で岐路に立つ／「人間一生で、どのくらいのことができるのか」／ベストセラー『仏教活論序論』／難治症にかかる

III……………哲学館時代 1……………71

高等教育の始まり／「哲学館開設の旨趣」／哲学館の開館式／若い教員たち／哲学館の創立資金／「円了の哲学」／一年間の世界旅行／「日本主義」と「宇宙主義」の大学／新校舎の建設と「風災」

／哲学館の教育理念／存亡の危機と全国巡講／巡講の日々

IV……………**哲学館時代 2**……………

123

「妖怪博士」／「妖怪学」とは何か／「火災」と新校地への移転

V……………**哲学館時代 3**……………

145

徴兵猶予と教員無試験検定／「哲学館大学部開設予告」／哲学館事件の
前史／卒業試験の解答／なぜ問題になったのか／哲学館事件起こる

VI……………**東洋大学設立時代**……………

167

第二回の世界旅行／「独立自活の精神」／「再出願をめぐる」／「神
経衰弱症」／東洋大学の設立と学校からの引退

VII……………**全国巡講・哲学堂時代**……………

191

生涯学習としての「修身教会」運動／全国巡講の鉄道などの基盤／「田
学」／「南船北馬」／民衆との出会い／哲学堂の創立／地球一周旅
行の完成／全国巡講の足跡／最後の巡講

エピソード……………233

資料

井上円了略年譜……………236

井上円了主要著作……………242

刊行の経過……………250

あとがき……………252

プロローグ

あんパンは、明治の文明開化で生まれた。西洋のパン生地で、日本の餡あんを包んだものである。発売当初から評判で、当時は丸形、菱形、三角形などもあったが、みな一度は食べてみたいと思ったといわれる。

北条時敬ときゆきは東京大学の第一期生であったが、ある日、裏神保町うらじんぼうへ行つて、店のガラス戸に陳列されたあんパンを買つて、庭の腰かけで食べていた。そのころの学生は誰もが珍味として味わたつたものであるが、ふとみると、同級生の井上円了も食べていた。北条は五個ほど食べて十分であったが、「井上君は確かそれを二〇個以上も食べて素知らぬ顔であった。」と書いている。北条はひそかに、円了が食べたあんパンを数えていたが、その多さにビックリしたのである。円了の知られざる一面であった。

このように、円了は世間のモノサシからはみ出てしまうような人間であった。

長岡時代

I

「明治青年の第二世代」

明治という時代は、現代日本の原点である。いろいろな文物が西洋から移入され、それを学んだ日本人が、あらゆる分野で、在来技術や伝統文化などと融合させ、現代へとつながる新しいものを創りだしていった時代である。

明治精神史を研究した歴史家の色川大吉は、『近代』の名にあたいする宗教・文学・演劇・美術・思想・哲学・学問などが、ほとんどおもに一八六〇年代前後の生まれという同世代の人々によって創始されているという事実」を発見した。そして、この世代を「明治青年の第二世代」と名づけた。

色川のリストには、宗教が五人、文学・演劇が一人、美術が五人、思想・哲学が八人、学問・その他が一九人、合わせて四八人が挙げられている。今でもよく知られているのは、夏目漱石、森鷗外などの文学者であろう。おもしろいところでは、トヨタ自動車の創業者である豊田佐吉も同じ世代である。この「第二世代」こそ、文明開化で激変する時代に、各分野で新次元を切り開くためにチャレンジした人々であり、円了は宗教の分野で仏教近

代化のチャレンジヤーとして評価されている。

寺の長男に生まれる

円了は、一八五八（安政五）年に、現在の新潟県長岡市浦の慈光寺に生まれた。父の円悟は二八歳、母のイクは二三歳での初子であった。慈光寺は真宗大谷派（東本願寺）の末寺であったから、長男は寺の跡継ぎになるという運命を背負っていた。

円了が生まれた時期は、アメリカのペリーが軍艦四隻を引き連れて江戸湾に現れてから四年が過ぎていて、歴史は「鎖国から開国へ」「江戸から明治へ」と、新しい方向に流れ出していた。幼いころの円了は、住職の父からお経を習い、朝晩の本堂での仏事に加わっていた。話を聴くことや、一人で考えることも好きであったが、長男が自動的につぎの住職になることに、心ひそかに違和感をもっていたと書いている。

漢学を学ぶ(一)

一〇歳の春から、隣村の石黒忠^{ただのり}恵の塾に通い始めた。一時間ほど歩いて通い、漢学と算

数を習うためであった。漢学とは中国の学問を指し、当時の教育の基礎であり、まず素読（文字だけ音読する）から始まった。石黒は二三歳の西洋医で、江戸の医学所の助手をつとめていたが、明治新政府の樹立とともに江戸幕府が消滅すると、江戸での戦乱を予想して、一八六八（明治元）年に帰村して塾を開いていた。

この年、新政府軍と旧幕府軍による戊辰戦争ぼしんが勃発した。北越での戦闘は、最大の激戦の一つであったといわれる。円了の生まれた長岡藩は、五月から八月まで新政府軍と激しく戦ったが、結局、長岡の城下町は燃え尽きて敗戦となった。慈光寺があった浦村は、信濃川を挟んで長岡へ向かう川港であり、新政府軍の陣地でもあった。このようにして、円了は明治維新を体験した。

石黒はもと武士であったが、それを捨てて蘭方医（オランダ医学）に転換した人であった。そのきっかけは、日本一の蘭学者・佐久間象山しやうざんとの出会いであり、やがて新しい時代がくると言われたからである。長岡の戦争について、石黒は塾の子どもたちに、戦争の意味を教え、新しい時代について積極的に語ったという。円了はそれだけではなく、多くの面で石黒から影響をうけた。要約するとこう書いている。

「先生は洋風を好み、机をもって椅子とテーブルに代用し、試験のときには、成績優秀者に賞与として、当時、輸入品であった西洋紙一枚を授けられたが、その西洋紙の恩典は、^{おんし}恩賜の銀時計よりもうれしかった。」

恩賜の銀時計とは、東京帝国大学などの成績優秀者に天皇より授けられるものであったが、それよりも当時めずらしかった「西洋紙一枚」がうれしかったというから、一〇歳の円了にとって、石黒の塾が大切なものであったことがわかる。石黒も円了の印象について、こう書いている。

「ある朝大雪で、通学して来る者もなかったのですが、戸外にトントンと履物の雪を落とす音がしました。妻は、あれは、きっと襲常^{ともつね}〔円了〕です、と言って戸を開けると、果たして井上襲常でした。また、襲常が鼻緒の切れた下駄を手に提げて来たことがありましたので、妻が、なぜ鼻緒を立て直して履^はいて来なかったか、と問いますと、そんなことをしている、時間が遅くなって、先生の講義を聞きはずすといけないから急いで裸足ですべて来ました、と言いました。実に井上は子どもの時から学問に熱心で、心がけが他と異なっております。」

円了は得度後の名前であり、幼名を岸丸、つぎに襲常と名のついていた。二人の文章を合わせて考えると、二三歳の石黒という若き教師と一〇歳の円了との間には、個人的な出会いがあったといえる。石黒は江戸の戦火がおさまった一年後の春に、東京へと帰って行った。憧れの先生との急な別れは、一〇歳の少年にとってショックであった。そのことを、円了は「私は良師よきしを失う不幸にあった」と書いている。それだけ石黒との出会いが大事であったことを物語っている。

教育は一人ひとりに「刺激」を与えることだといわれるが、石黒の塾で円了は、「知りたいという気持ち」、つまり一般にいう「好奇心」を心の底にもつことができた。また、大雪の朝に独り通学した行動などをみると、円了は「夢中になれる」性格であり、自分の意思を尊重し貫き通すという点で、いまでいう「自己中」の一面がみられる。それらが、円了の人生の出発点になるものであった。

漢学を学ぶ(二)

後に円了が記した「履歴」によれば、一八六九(明治二年八月から一八七二(明治五)年

一二月までの四年余りにわたり、「長岡旧藩木村鈍翁どんおうに就いて」漢学を学んだという。木村は鈍叟どんそうといい、長岡藩時代に江戸に留学生として派遣された経歴をもち、長岡に帰ってから藩校「崇徳館すとくかん」の校長をしていた。藩校では武士の子弟のみに教えていた。その木村が、どういう経過かわからないが、慈光寺の前の家に住むようになっていた。戦争で長岡の街はすべて焼けてしまったからであろう（困っている鈍叟に対して、親交のあった慈光寺の檀家総代で地主の高橋九郎が援助の手を差し伸べたのであろうと考えられる）。

慈光寺では塾が開かれ、近隣の子どもたち二五人ほどが学びにやってきました。円了はこれを「慈光覺ごうかく」と呼んでいたが、木村を先生とする漢学塾であった。漢詩ではこう詠んでいる。

「浦村に学校ができ、子どもたちが学びにやってきました。一日中読書に勉め励んでいる。午前中は漢文を学び、午後には英語の勉強だ。……先駆けて日本と世界のことを学び、明治という新しい時代の礎いしずえとなりたいものだ。」

木村の漢学教育は、当時の長岡では最高レベルのものであった。偶然にも、円了たちはこのような先生に漢学を習うことになった。みんなよりも先駆けて学ぼうというのである

から、円了は意気盛んであった。「履歴」によれば、四年間の教育は、「読書」、「聞講」、「會議」、「質問」、「独誦」と、段階を踏んで行われていたようである。長岡の歴史研究者である土田隆夫はつぎのように述べている。

「読書」とは、漢学の初歩として、文字と文章の読み方を学ぶために行う素読のことであろう。この課程では、書物について内容の理解や解釈はせず、音読のみを繰り返して行う。これに対し、「聞講」は先生が書物に書かれた文章の内容について講義を行ない、「會議」は生徒たちが読書とともに討論などを行うものと考えられる。

「會議」には、会読、輪読、輪講といった方法がある。会読では、一つの書物を複数の者が共同で読み、輪読では、各自の担当箇所を決めて順番に読みながら解釈と討論を進める。輪講は、書物の内容について生徒同士が講義と議論を行なうもので、戊辰戦争後、長岡藩によって設立された国漢学校が、「各人教育」（個別教育）を目指し取り入れた授業方法でもあった。「質問」というのは、崇徳館で「質問生」と呼ばれた上級門生の教育課程に相当する段階で行われた、より深い学習と考えられる。そして「独誦」は、いわば総合的な仕上げの学習である。

「輪講」について、「国漢学校の生徒」は、「学習意欲のはなはだしい者には輪講を奨励した。生徒間の意見の交換、解釈の比較研究等をさかんにやったものだ。なかなか活発であった。さいごの判断は先生がやるので、ひじょうに力がつく」ものであったと語っている（現代の大学のゼミでも輪講や輪読が行われている）。円了は大学時代の会合で一人独創的な意見を述べていたというが、こうした長岡藩固有の「各人教育」が影響していたのであろう。

「午後には英語の勉強だ」というが、どのていどのものであったのか。ともかくも明治維新の直後から英語に関心をもっていたのは確かである。石黒と木村からの五年間の漢学教育で、一つの「ものの見方、考え方」の元を学び、自分の意見を発言することになった。これがその後の「学問を学ぶ」基礎となった。木村先生の漢学教育について、円了は「私の漢学の素養はこれのみ」と言い切っているから、心から感謝していたことがうかがえる。なお、この間の一八七一（明治四）年に、円了は、東本願寺で僧侶になるための得度とくどの試験に合格して、一三歳で僧侶になっている。

洋学を学ぶ(一)

一五歳で漢学を終えた円了は、一つの分かれ目に立っていた。この年（一八七二・明治五）から漢詩集を作るようになったが、同じ正月を詠む漢詩に明らかな違いがある。明治五年みずのえさる「壬申元旦」と題する詩ではこう詠んでいる。

「夜明けの光が昇り季節は新春に変わり、すでに今朝みる様々なものが新鮮にみえる。家々はみな盛んに宴をひらいて、世界が良い年であることを祝っている。」

つぎに翌々年（一八七四・明治七）の、一七歳の「一月元旦作」と題する漢詩を取り上げてみよう。

「隣の鶏が夜明けを告げて、新しい年がやってきた、明治七年きのえいぬ甲戌の年の新春だ。私は未だに旧弊にとらわれたままなのに、時代は日々新しさを増す文明開化の真つ最中の元旦だ。」

明治五年の詩の内容は、正月の風景を詠んだ平均的なものであるが、明治七年の詩は、同じ正月に「時代と自分」の関係が主題になっている。「旧弊」、つまり伝統的な風習や思

想にとらわれていることと、文明開化の時代の中にあることが対比的に詠み込まれている。このような変化が、円了の心のなかに起きていた。

「履歴」を見ると、一八七二（明治五）年の「独誦」、つまり自分で読んだ本ということであるが、円了は、アメリカ人宣教師であるエリテツが書き、中国語に翻訳された『地球説略』で初めて世界地図を見ている。その後、アメリカとヨーロッパを視察した福沢諭吉の『西洋事情』を一〇冊すべて読んで、西洋の政治経済と文化の現況を知った。初めて日本と西洋を比較する情報を得たことをきっかけに、円了の関心は急激に世界や西洋をテーマにする本を「独見」、つまり一人で読むことに集中していった。「読書履歴」を見ると、二七冊に達している。当時の出版事情から考えて、夢中になって情報収集をしている円了の姿が浮かんでくる。

その一方で、青年期に入った円了には、寺の跡継ぎのことが問題になった。一三歳の得度について、「父は私に相談しないで得度願いを出した」と晩年語っている。ということとは、進路について住職の父と話し合ったことがあったのである。得度、つまり僧侶になれば、「候補衆徒」（寺の後継予定者）になり、次の住職への道を歩むことになる。父が、漢学を終え

れば、仏教の教えを学ばなければならぬと考えたのは伝統的なコースであるから、世界や西洋のことに夢中になっている長男との間に、食い違いがあったのだろう。寺の檀家総代であった高橋九郎は、「円了は強情だった」、つまり頑固な一面があったというから、このころからそうだったのだろうか。子どもの教育は親の悩みの種といわれるが、明治初期の時代が変わりゆくなかで、とくに慈光寺の父母が悩んだことが想像される。

円了が漢学を四年間学び終えた一八七二（明治五）年一二月に、長岡には「長岡洋学校」が創立されたばかりであった（ちょうど、新政府がフランスの学区制度にならない「学制」を公布し、全国に小学・中学・大学を設立し、身分に関係なく全国民が学べる学校を創設し始めた時期である）。長岡の復興を願う人々によって、新たな人材養成は洋学以外にないという考えから、旧藩士で慶応義塾の塾頭をしていた藤野善蔵を高給で呼び戻して、洋学教育を始めた。武士の子どものほかに、平民も入学できる画期的な学校であった。しかし、円了はすぐには長岡洋学校に入学していない。

結局、一八七三（明治六）年五月二九日から、信濃川の対岸の高山という所にある英語塾に通うことになった。八月上旬まで「高山楽群社」で、栗原という教師から二か月あまり

学んだ。そのときのことをこう漢詩で詠んでいる。

「菅笠すげがさと蓑みの、粗末な着物を身にまとい、書物を背負って朝夕通う私を見て、人々は問う、一日中一体何をしているのかと、私は応じる、講堂に立って恵微を唱えているのだと。」

ちようど梅雨の時期から塾へ行ったので、笠と蓑が必要だった。村人たちに、「慈光寺の若さんは一日中どこへ行っているのか」と見られていた。講堂は教室である。「恵微」は「AB」の当て字で、アルファベットを指す。つまり、わたしは英語を習っているのだと詠んでいる。

「履歴」によれば、スペリング、リーダー、コロネルの『小地理書』、サーゼントの『第一読本』『第二読本』が挙げられている。英語を習う者の初歩は、現代もあまり変わらない。この後、一月から「単語帳」を作っている。「few 僅」「only 唯」などと書かれている。どのようにして、この「単語帳」を作ったのかわからないが、興味深く感じる。

時間があれば読書をしていたようである。有名な福沢諭吉の『学問のすゝめ』の読後感が詠まれている。

「書齋に座っていると春の日が長く感じられる。今読んでいるのは『学問のすゝめ』で

ある。人間は皆同等の存在であり、貴賤賢愚きせんけんぐの差は学問に励むか怠けるかにあると説いている。」

福沢のベストセラーの一つである『学問のすゝめ』を円了も読み、「人間は差別なくみな同等だ」という新しい人間観を、時代の基本として学んでいた。

洋学を学ぶ(二)

翌一八七四(明治七)年四月三〇日、父にともなわれて長岡の洋学校へ行き、父が入学の申し込みを行ったと、学校の「日誌」に書かれている。この学校は、現在の新潟県立長岡高等学校として続いている。当時は、校名は「新潟学校第一分校」といった。なぜこうなったのか、それは一八七一(明治四)年に三〇〇以上の藩を解体し、新たに府県をおく「藩置県」により、長岡は新潟県の一地方になって、その後、新潟県は県下の洋学校の統一を強行したからである(慶応義塾から来ていた藤野善蔵は、これに反対して辞職した)。円了たちは、改名に従わずに長岡洋学校と呼んでいたという。

長岡で学ぶには、授業料や寄宿舎の費用がかかった。慈光寺の当時の経済力はどうかっ

たのか。東本願寺は「一万か寺、一〇〇万門徒」と呼ばれる日本を代表する教団であったが、その中には、大坊、中坊、小坊があり、慈光寺は中坊で平均的な寺院であった。自立して寺院活動を行える程度で、余力はあまりなかったと考えられる。ただし、寺の総代の中に、新潟県を代表する地主の高橋家があった。円悟は住職であり、寺の経営の責任者であったから、高橋家との間で、円了の将来について話し合ったのであろう。こうして、寺を離れて長岡で学ぶことができるようになった。

五月五日午後、円了は英語で学べる、あこがれの洋学校に入学した。そのときの思いをこう詠んでいる（当時は、学校の創設期であり、学校史の関係者によれば、「今の学校という概念とは大きく異なっており、学塾とか藩校に近かった」という）。

「独りで長岡の町にやってきた、始めて長岡洋学校の門をくぐった。講堂に一日中座つて、しきりに恵微声えいせいを誦そとよみしていた。」

「恵微声えいせい」はアルファベットの「ABC」の当て字で、教室で一日中、誦する（声を出して読んでいた）という表現に、円了の喜びの大きさが表れている。ところで、洋学とは当時の教育方法であるが、外国語を学びながら、英語やフランス語などの原書で、世界の地理

や歴史、数学を学ぶ、いわば一石二鳥の教育のことであり、文明開化を象徴する学習法であった。円了は洋学と数学を学んでいる。

学校「日誌」によれば、二日後に、「等外より第四の組へ繰り上げ」になった。前年に英語の基礎を習ったので、英語ができると見られたのであろう。繰り上げになったクラスでは、パーレーの『History of The World (万国史)』を教科書にしていた。途中から入ったので戸惑ったようである。こう漢詩で詠んでいる。

「長岡に遊学して三か月あまりが過ぎた、その三か月あまり、洋書を学んできた。しかし、わが身の愚かさに恥じ入るばかりだ、三か月たつてもちつとも進歩しないんだから。」しかし、こうも詠んでいる。

「七時に朝食を食べ、八時から授業が始まる。九時にパーレーの万国史の講義があり、十時には洋算だ。いつも机に向かつていても、怠惰な気持ちじゃ身が腐る。若いうちに学問を積み、全国へわが名を馳せたいものである。」

二つの漢詩をみると、英語の能力が「ちつとも」進歩していないと嘆いている。実は円了よりできる友人がいた。円了は人一倍負けず嫌いであった。この前の漢詩に比べて、後

のものはまず学校生活を詠み、パーレーの万国史は九時から、洋算Ⅱ数学は一〇時から、それぞれ授業時間は一時間で終わっている。予習と復習が重んじられたカリキュラムであった。そのあとの句で、「全国へわが名を馳せたい」という一六歳の青年期に、天下に活躍しようとする野心を抱いていたことがわかる。『詩冊』という漢詩集に、この二つの漢詩が続いて詠まれているがおもしろい。

当時の長岡を詠んだ漢詩がある。

「越後長岡は文明開化の地だ、文明は日々盛んに起こり、月々に繁華になっている。蔵王港は汽船が出入りして、渡里町の渡し場は市街地に行き交う人力車で栄えている。」

信濃川には川汽船（蒸気船）が運航されるようになり、その港へ人々が人力車で来ている様子がわかる。当時の写真を見ると、川汽船にたくさんの人々が乗り合わせていて、新たな文明の利器を体験しようとしていたことがわかる。貨物も汽船で運ばれるようになったから、円了が長岡は文明開化の地だと実感していたのも分かる。

洋学校は二年間で卒業であった。「履歴」をみると、数学は平算、分数、比例、少数、諸算、代数学まで学んでいるが、洋学については、つぎのように述べている。

「そのころ、一般に、始めに文典、『スペルリング』、最後に『リードル』という風であったが、私はそうでなく、直ぐ『パーレー』の万国史からやり出した。もっともその後一年程、東京からある西洋人が、漫遊に來たのを先生に頼んで、二三个月『リードル』を学んだ、『パーレー』の万国史がすむと『ミユート』の大地理書、『ウキルソン』の万国史、『ギゾウ』の文明史、など盛んに読んで、これが読めれば英語はまず卒業というありさまであった。」

これは晩年の回想であり、「履歴」に書かれている教科書は、パーレーのあとに、ミツチェルの『大地理書』、クイケンブスの『小米国史』、同『大米国史』など、洋学校の一年目では九冊、二年目ではチャンブルの『経済書』、ウエーランドの『大経済書』、ウエルスの『究理書（理科の本）』など六冊、合わせて一五冊の原書を学んでいる。そのためか、自分で学ぶことも多かつたのではないか。こういう漢詩もある。

「満点の夜空に月光が輝き渡っている。地上には霜が降り渡り、秋の気配に満ちている。灯火のもとで英仏の史書を読んでいて、読み終わるともうすっかり夜も更けていた。」

こうして授業についていけるようになったのである。時間があれば自分で『元明史略』

『東京新繁盛記』『国法汎論』など一〇冊を読んでいる。洋学の知識と独学での情報収集により、新たな考えも生まれてきた。こう詠んでいる。

「勤め励む者と怠けている者と両方同じ人間だ。万民は同等であり、等しく権利を持っている。昔は偉人が多かったなどと言うのはやめな、彼ら偉人も人間、私もまた同じ人間なんだから。」

このように一八歳のとき、円了は自由民権や文明開化の思想に関心を深めている。「履歴」に書かれていないことがある。それは、耶蘇教やそ（キリスト教を当時はこう呼んだ）の『バイブル（聖書）』を原書と漢訳で日夜熟読していたことである。仏教の寺院に生まれた者が他の宗教の本を読むことはタブーであった。しかし、好奇心の強い円了は、ひそかに独力でキリスト教とはなにかを求め、その原典を読まずには語らない人でもあった。すでに漢学を通して、儒教などの中国の思想・信仰にも触れていたから、これで三つの宗教を比べることが可能になったが、そのことを円了はどう思っていたのだろうか。

寄宿舎に住んでいた円了は、慈光寺で大きな法要があるときなど、外泊届を学校に出して「宿下がり」（帰省）していた。洋学を学んだことと、次の住職になることは、円了の心

の中でどうなっていたのだろうか。二年間の洋学校での学習は終わっていた。

和同会を創る

一八七六（明治九）年七月一二日、新県令により新潟学校は廃止になり、分校も独立することになった。その後、「仮学校」という奇妙な校名となった。資本金が整うまでの措置であった。九月一日、学校は夏休みを終えて再開された。円了はこの日から「句読師」に雇われた。学校史の関係者によれば、「句読師は後に授業生といい、授業もする生徒のことで、初級の生徒の授業を受け持った。」（履歴によれば、英書を中野悌四郎、漢学を田中春回から学んでいる）という。教師が急病の場合には、代替え授業もした。円了の場合、授業生として数学、漢学、英語を担当した。

同年一二月一日、学校は「長岡学校」として再出発した。このとき、中学校並みにするために、従来の洋学、数学に「漢学」が加えられた。当時の組織は、校長（非常勤）、事務係が二名、英語・漢学・数学の助教（教師）が各一名ずつ、授業生が三名、合わせて九人であった。こうしてみると、円了ら授業生の役割も、単なる補助ではなかったように考え

られる。

この再開校の一月前に、円了が中心となって「和同会」の設立が申し込まれた。この会は、「相互の懇親を厚くし、演説の稽古けいこなさん」とすることが目的と書かれている。会員は、円了のほか授業生が三名、生徒が四名で始まった。演説は自分の意見を発表するのだから、自由を重んじたのであろう。この和同会は、時代の変遷を経ながら、現在も長岡高等学校の生徒会の名前として残っている。

この会は、円了が初めてリーダーとなって組織したものであり、命名したのは円了である。「和同」とは、『論語』より「和してかつ同ずる」の意味で名づけたと言っている。普通「和同」といえば、「和而不同、和して同ぜず」（徳のある人は他人と調和するが、むやみに同調はしない）を意味する。しかし、円了はそう読まず、「和してかつ同ずる（みんな仲良く等しくつきあおう）」を意味とした。それには明治初期の事情があったといわれる。同じく学校で学んでいる生徒であっても、士族と平民、長岡の街の子と郡部の子という差別があり、士族の子弟は「身分意識」が強く、排他的であったから、これを解消して親しく仲良くしようということから、円了が命名したのであった。

「万人は同等だ」という考えをもった円了は、のちに私立学校を創立するが、やさしくあたたか味のある教育理念を基にしている。その理念の芽は、このころに作られたものといえるだろう。

洋学校の時代は、一六歳の五月から一九歳の六月までの三年間であった。多感な青年時代にあたるが、現在、長岡高等学校同窓会が入っている「和同会館」には、円了ゆかりの資料が展示されている。そのなかに、二枚の写真があり、一枚は円了個人、もう一枚は和同会の仲間との集合写真である。わざわざ写真館で撮影した貴重なものである。洋学校の草創期の紆余曲折はあっても、自由で活発な学校生活であったことがうかがわれる。当時の漢詩集『詩冊』の最後で、円了はこう詠んでいる。

「試しに今日の文明の世の中を見てみると、進歩の一途を遂げつつある。汽船が運航し、車輪が走り回っている。世界中の人々は兄弟のように親しく行き交い、天涯の地もまるで隣に行くように近く感じられる。昔は無縁なよそ者であった人も、今では同郷の者のように親しくつき合っている。」

この詩を読むと、円了の想像力のたくましさを感じる。現代のグローバル化では当然の

内容であるが、一五〇年ほど前の明治の初期に「世界は一つ」ととらえているのであるから、洋学校で新しい世界の見方を得ることができた。この見方が、地球一周の旅にチャレンジする円了の原点であった。長岡時代の円了は、文明開化を見ながら、教育熱心な両親のもとに育った普通の青年であった。そこへ大きな転換期がやってくる。

東京大学時代 II

「至急上洛せよ」

一八七七（明治一〇）年六月、京都の東本願寺から慈光寺の円了に対して、「至急上洛せよ」との命令があった。上洛とは京都へ行くことであるが、この場合は本山へ来るようにとの意味である。長岡の学校にいたので、それを辞めて従うことになるのであるが、この命令の背景には、明治の国家的規模の問題があった。

「歴史が人を創るのか、人が歴史を創るのか」という言葉があるが、円了が歴史の舞台に上がるきっかけがこの命令であった。時代をさかのぼって簡潔に、その国家的規模の問題をあきらかにしよう。

一八六八（明治元）年一月、新政府は「王政復古」、つまり天皇を支配者とする体制を宣言した。それに続いて、神祇官と太政官を設置し、祭政一致の制度を設けた。神祇官は宮中祭祀（宗教的儀式）を、太政官は行政を担当した。現在、官僚とか、官報という政府に関する用語は、ここに源があるといわれている。

神祇官は国学者や神社神道の関係者が就任した。江戸時代には仏教寺院が戸籍を扱うな

ど「檀家制度」の元で、仏教は国教的地位をもっていたが、新政府は神道中心の宗教政策へと大転換を目指した。その根底には、天皇の権威を国家的に創るといふ大きな課題があった。

江戸時代の天皇は、「雲上人」と呼ばれ、雲の上の人であって、多くの民衆は天皇という言葉やその存在すらまったく知らなかった。この問題は、新政府の根幹にかかわること
で神祇官が担当したが、西郷隆盛が「昼寝の官」と呼んだように、まったく役に立たなかった。そのため、神祇官は廃止され、神祇省に降格され、官僚が主導する教部省へと再編されるようになる。

一方で、神道国教化も進められ、最終的に天皇を神とし、これを国家神道が支える体制が創られる。他方で、江戸時代に幕府の統治体制に組み込まれて安泰であった仏教の地位は、つぎつぎに剥奪されていった。神社の中には、中世以来の「神仏混交」で、仏号や仏像があつたので、新政府は「神仏分離令」を公布して、仏教関係を取り除かせたり、僧侶の還俗を強制したりしたが、この政令が拡大解釈されて「廃仏棄釈」運動（釈迦の教えをすてる）が起こり、これに仏教側が反撃して、宗教一揆まで起こつた。

政府の仏教界に対する政策は、研究者によれば、「明治五、六年にかけて、仏教の権威が大衆の前に光を失うための積極策がとられた」と言う。仏教界の勢力は衰退化する一方であった。

こうした時代の流れのなかで、神道による国民教化を進め、天皇と民衆をむすびつけるため、教部省によって「大教宣布たいきょうせんぷ」運動がとりくまれる。一八七二（明治五）年、教部省は、上は府県の知事から、下は俳諧師はいかいし（俳句の師匠）まで一四級にわたり「教導職きょうどうしやく」を任命した。中心となったのは全国の神官・僧侶で、無給ではあるものの、一種の公務員のような扱いとした。全国の神社や寺院という既存の組織を活用して、大教院、中教院、小教院を設置した。

この運動では、民衆を神社や寺院に集めて、「皇上を奉戴ほうたいし、朝旨を遵守しゅんしゆせしむべきこと」、簡単にいえば、天皇を君主としていただき、政府の政策に従うことを教化した。教化活動を担う教導職は、これ以外のことは一切ふれてはならないということ、現代風にいえば、天皇と政府の宣伝活動だけしなさいということであった。これによって、民衆は天皇の存在を知ることになったから、その点において運動は成功した。

神道側は国家に組織化されているので困ることはなかったが、仏教側は、大教院での神道儀式に、宗派の代表者（真宗では法主）などが参加を強要されるという奇妙なことがあり、また寺院では、一切の布教活動が禁止された。真宗では「御講」という組織があり、月一回ほど全門徒を集めて説教を行うことが、基本的な宗教活動であったから、そこで真宗の教えを説教せずに、天皇や政府の宣伝のみを行うだけであったから、宗教としての存在意義がなくなるほど問題は大きかった。

ついに、東西本願寺を中心とする「真宗十派」による、大教院からの分離運動が始まった。最終的には、三年後に脱退に成功した。そして東本願寺は、一八七五（明治八）年から、新時代に合った教化・布教体制を作るといふ基本方針のもとで動きだした。その中に、大・中・小の教校を全国に作り、僧侶の教育を行うということがあった。そのために、「全国一万か寺、百万門徒」の中から、優秀な子弟を本山に選抜して英才教育を施し、これを教員とすることにした。本山に教師教校と育英教校を設立して、数十名の僧侶を集めた。

作家の司馬遼太郎は、「明治という時代は日本史のなかでも特異な時代だ」と言ったが、従来、本山に集められる人々は、「寺格」などの階級に従っていたが、この教校の場合は

旧習にとらわれずに、優秀な人材であれば末端の寺からも召集された。このような歴史のうねりのなかから、円了は英語のできる僧侶の、五人のうちの一人として選抜された。

京都の教師・教員英学科で学ぶ

「ご本山」の学校に円了が選ばれたことは、慈光寺の家族や門徒にとって大変名誉なことであり、どれほどの喜びをもって受け止められたことであろう。長岡学校に勤めていた円了は、六月三〇日に学校を辞して、家に帰っている。それから一週間後の七月八日に、円了は故郷の浦村を出発し、村境で家族や門徒と「水杯」（別れの杯）を交わして、京都へと向かった。当時は、どのような経路で京都まで行ったのであろうか。円了は旅の日記を残している。

それによると、内陸の浦村から、日本海の柏崎へ出て、それから海路で上越の直江津に至り、その後は内陸を下がり、長野の善光寺に到着している。善光寺からは中仙道を通り、木曾から野尻、中津川、岐阜・大垣の間を通り、関ヶ原に至り、米原から琵琶湖を渡って大津へ出た。大津から京都へ到着したのは、七月二〇日であるから、一三日間の一人旅で

あった。宿舎を六条の停車場（現在の京都駅）の近くにとった円了は、京都の第一印象をこう書いている。

「人や物を運ぶ音が耳にさわがしく、人の行き来は喧しく、目がくらむほどで、実に都会の都会である。夕方に市街を散歩したが、街の縦横は砥石といじのように、矢のように見えた。その風俗を想像するに、言葉と応接は巧みにして美しく、動作はしとやかでみやびである。じつに皇都の遺風があり、数百年の都であったことを知った。」

円了は初めての京都にカルチャー・ショックを受けていた。京都の滞在もある程度に達したころ、つぎの詩を詠んでいる。

「みやこに旅住まいしてすでに三〇日がすぎ、憂いて流す涙はさめざめと流れて、容易にハンカチを濡らす。すばらしい風景はむやみに目を楽しませてむしろ哀愁を誘い、壮麗な市街の様子はかえって私の心を傷つける。宿の他の部屋はみな他国（国内他所）から来た旅人でうまり、同じ宿も同郷のものはいない。一日中独りでいて、誰も慰めに訪れてはくれず、竹のひさしのうちで書物に親しむだけである。」

このように、円了はホームシックにかかっている。七月二七日、京都から長岡の学校の

友人二八名に宛てた書簡がある。細かい字で書かれた長文で、最後の文章はこの詩と同じ内容で、「遠く諸賢（友人）と郵便で交談することを楽しみとす。」と、手紙を寄こしてほしいと哀願している。

京都市時代の漢詩には、長岡時代のような、文明開化の礎いしずえになろうという内容の詩はまったくない。円了の心のなかに空洞のようなものができてくる。

教師教校での授業は九月から始まったが、科目は真宗の教理、洋学、数学であった。洋学は円了がすでに長岡で授業を受けたものであった。当時の円了の漢詩を読むと、本山の生活に違和感を覚えながらも、淡々と日々が過ぎていったようである。こう詠んでいる。

「独り夕べに書齋にすわり、鐘鼓しょうこが鳴り響き夜はすでにふけている。冬も深まって風も強く、月明かりは冴えわたり犬の声が寒々しく響く。旅の年もいま暮れようとしているが、田舎を愁えても夢はまだ全うしていない。灯心をかきたてて何をしようというのか、ために手紙でも見てみよう。」

本山・東本願寺の一带は、関係する詰所（各地の門徒が宿泊した）、仏具店や商店もふくめると、かなり広大である。ある僧侶が「ここ（本山）にばかりいると、ここが世界の中心だ

と思つてしまふ」と語っていることを聞いたことがある。円了にもそうした感覚があつたのかもしれない。故郷の長岡からの手紙を読んでいる漢詩が散見されるのも、そうした環境だからだろうか。長岡での自由な学校生活にくらべると、本山は真宗の聖地であり、真宗大谷派という宗教団体特有の雰囲気が支配的で、これに違和感を覚えたのも当然であつたろう。長岡の友人たちへの手紙に、「友人との別れを惜しんで、上山命令に従つた」というのも、ホンネだったかもしれない。しかし、この本山での経験は、のちに仏教改革を論じるときに、基本的な視点となつたともいえる。

半年余りほど経過したとき、円了にとつて、再び大きな転機がやってきた。円了を英才と見込んだ東本願寺は、突然、円了に対して東京留学を命じた。東京には前年の一八七七（明治一〇）年に、西洋諸学を移入するために、日本初の「東京大学」が創立されていたからである。

一八七八（明治一一）年三月二二日、東本願寺は円了に対して東京留学の命令を告げた。仲間との別れの宴を経て、円了は四月二日に「西京」（京都）を出発する。そのときのことをこう詠んでいる。

「朝もやに降る春雨で暗いなかを、旅路の雨に濡れた柳は青々としていた。半年のあいだ鴨川のほとりで俗世間を離れていたが、学問の用意を整えて隅田川のほとりに向かうのである。」

ここでいう鴨川は京都を、隅田川は東京を指している。円了は、京都の学校での体験を、俗世間を離れた特別な世界と受けとっていた。しかし、本山の命令によって給費生となり、東京の大学で学ぶという新しいチャレンジが始まった。このとき二〇歳であった。

東京大学予備門に入る

京都と神戸間の鉄道は、円了が京都へ来た年に完成したばかりであった。東本願寺から京都駅までは、現在、地下道で結ばれているように近かった。四月二日の早朝に、初めて文明開化の象徴であった蒸気機関車（円了は「鉄車」と呼んでいる）に乗った。その日のうちに神戸に到着したが、神戸で数日待つて。それから蒸気船にも初めて乗った。風雨のために二日間がかりで横浜に到着した。四月八日、横浜から東京に汽車で向かった。その日のことをこう書いている。

「この日は天気晴朗で、鉄車の中にあつて、天然ガラスの窓より外を見ると、桃の林や菜園に黄色や白色が混在し、遠近の山々は春霞はるかすみに浮かび、その晴れた春の光は言葉ではあらわせないものであつた。」

この表現には、未知の世界に対する期待感が表されている。東京に着いて間もなく、円了は、日本を代表する学者であつた加藤弘之との出会いをもつことができた。加藤は東京大学初代総理であり、また「明六社」という団体を結成し、日本の開化・啓蒙思想を主導した、ドイツ学の専門家であつた。

円了は東京に着いた当日、現在の東洋大学白山キャンパスの近くにある、真宗大谷派（東本願寺）の念速寺に泊まつた。京都の教師教校時代の友人の寺であつた。その念速寺は加藤家の仏事を任されていた。やがて住職は円了を伴つて麴町にあつた加藤の私邸を訪問し、本山の留学生としての円了を紹介し、今後の進路について指導をお願いしたのであつた。加藤は、その後の円了の人生の大恩人となつた。

加藤から勧められたことは、創立間もない東京大学への入学であつた。そのため、九月の試験に向けて受験勉強が始まつた。東京大学は予備門と学部から構成されていた。予備

門は現在の高等学校に相当するが、この予備門を卒業しなければ、学部には入学できないシステムであった。当時の予備門の状況について、こう語っている。

「そのころの予備門では教師は日本人が二人くらい交じっていて、他はみな西洋人。試験もみな西洋風でやっていたもので、教場（教室）で話すも西洋語で、掲示も西洋文字、日本人まで英語で話しをするのであった。」

円了が長岡の洋学校で習った英語は、変則流とよばれるもので、「night」を「ニグフト」などと読んでいた。まだ英語の教育が一般的・全国的に確立されていない時代であった。円了は、そのときのことを、つぎのように述懐している。

「ところで長岡において『デアアンドニグフト』と読んだ連中なれば、さー困った。そのところで人に聞くと、（発音は）正則をやりたまえということ、直ちに始めたが古いくせがなかなか直らぬ、一生懸命苦しんで、さーいよいよ試験を受けることになった。」

円了の受験勉強はこのように苦しいものであった。

そして、九月を迎える。科目は英・数・和漢の三科目である。実際の入学試験のことをこう語っている。

「教師は西洋人で、西洋語をぺらぺらしゃべる、私は少しもわからない。……答案は英語で書くのであるが、(英語で)文章は書いたことがないので、これまた大いに困ったが、幸いにも合格できた。そのときの点の取り方は、全課目を平均して、六〇点に達すると上がれるのであった。その結果はというと……私ながらあきれた。……英語の文典が一九点、作文が二五点、それでいかにして合格ができたかという、数学がさいわいに一〇〇点満点であったから、合格ができたのだ。」

こうして、予備門の第一期生(二年生に編入)となることができた。予備門では三年間学んだ。当時のカリキュラムは、円了が入学した年に完成したばかりであった。共通科目は、英語学、数学、画学、和漢学で、これに学年ごとに学ぶ科目が加わった。現存している終業証書によれば、共通科目以外に多いのは理科Ⅱ自然科学で、物理学、化学、生理学、植物学、動物学を学んでいる。人文科学では地理学、史学、理財(経済)学である。円了が自然科学の知識を系統的に学んだことは、後の哲学、仏教学、心理学、妖怪学を究明するときに大きな役割をはたすことになる。

同級生の北条時敬はこう語っている(北条は数学者となり、その後、学習院長などとなった)。

「学生時代の井上君は頭脳明晰でかつ大の勉強家でした。もちろん私は予備門時代にも井上君とは組が別であったが、君の級ではいつも君は首席を占め、一段高くぬきん出て頭角を現していた。……学科の成績以外に君が学生でありながら、すこぶる活動的であったから……君が創意的な見識と読書から得た豊富な知識とその弁舌とは、おのずから学生間の一異彩であった。」

資料によれば、円了入学当時の同級生は一二四名いたが、最後の四年生で卒業したときには四八名に減っていた。毎学年末の試験で二割くらいが落第するほど、激しい競争を求められたのが予備門であって、勝ち残った者だけが狭き門を通じて、大学の学部への進学を許された学校であった（当時の学部は、法学、文学、理学、医学の四学部であった）。

円了の漢詩集を読むと、旅行先の風景を詠んだものが多く、そこから予備門での生活を知らぬことは難しい。ただ、友達との別れの詩のなかに「故郷を離れてあちこち行ってから東京に学び、いつの日か名声をたてることをただ望んだ。」とあるから、心に秘めたものがあったことは確かであろう。しかし、郷里の人々はそうした円了を批判的に見ていたことが、つぎの詩からうかがえる。

「家郷に滞まって父に仕えることもできずに、再び師や友を求めて東京に出た。世の人々は男子の志をわかってくれず、私に向かつて慇懃いんぎんに遠く東京まで行くことをいさめた。」

この詩を読むと、当時、東京まで行き大学で学ぶことを理解できない人、よしと言えない人が、円了の故郷にいたことがわかる。円了は二一歳になっていた。地方では旧習のなかで、寺院の跡継ぎに早くなって、住職の父を助けることが美徳とされていたことは、戦後まで続いた見方なのである。円了が「男子の志をわかってくれず」と嘆いたことはよくわかる。西洋の物理学などの知識をいきなりゼロから学ぶことは、現在のように小学校から積み重ねていた時代とは異なり、難しかったと考えられる。テキストは英文でもあったから、理解するのに努力しなければならぬ。チャレンジャーに対して、誤解や無理解はつきまとうものであるが、それにしても、円了の心は、無理解な忠告を受けたことに失望してがっかりしたことであろう。

文学部哲学科に学ぶ

ギリシヤに誕生した哲学を日本に移入したのは、幕末にオランダのライデン大学に留学

した武士・西周にしあまねである。西は「philosophia」を、「フィロ」は愛求する、「ソヒイア」は知恵、この二つ造語の「知恵を愛求する」を、「哲学」と翻訳した。「哲」は、あかるい、さとい、賢いの意味であるが、日本人にはなじみが少ない字である。

一八八一（明治一四）年九月に、哲学科は独立して一科になったばかりで、入学生は円了ただ一人であった。このとき二三歳になっていた。

当時の東京大学は、お雇い外国人教師が英語などの原語で授業を行う時代で、西洋の近代的知識がそのまま教授された。哲学科の円了は、西洋哲学として論理学、心理学、純正哲学（哲学論）、倫理学の順に学んだ。西洋哲学の教師は、ハーバード大学出身のアーネスト・フェノロサと、ミシガン大学出身で「スペインサーの門番」と渾名あだなされた外山正一まさかずであった。第一学年で論理学を学んだ円了は、第二学年から西洋哲学を本格的に学び始めている。フェノロサからは、スペインサーの『世態学』、モーガンの『古代社会』を参考にした社会学や、シュベグラの『哲学史』（英語抄本）を教科書とした、近世哲学史やカント哲学を受講した。もう一人の講師の外山正一からは、ペインの『心理学』、カーペンターの『精神生理学』、スペンサーの『哲学原理総論』による、心理学を受講している。

そして、つぎの第三学年になって、フェノロサからは、カント哲学からヘーゲル哲学までを、また、ウォーレスの英訳本を使用したヘーゲルの論理学を受講している。第四学年は、外山正一からダーウイン、スペンサー、ミルの著作を学び、フェノロサからは、ヘーゲル哲学からスペンサー哲学までにもとづいた道義哲学（倫理学）・政治哲学、審美哲学（美学）・宗教哲学の講義を受けている。当時の講師陣を検討すれば、円了の哲学への傾倒に、フェノロサが大きな役割を果たしていたと考えられる。

井上哲次郎は東京大学第一回卒業生で、円了の先生にもなったが、その哲次郎はフェノロサについて、「大学において、さらに哲学への興味を深くし、かつ自分の思想的傾向に多大な影響を及ぼしたのは、フェノロサ氏であった。……氏は二十六歳であった。氏が未だ青年とも言うべく、澁刺たる元気をもってデカルトからヘーゲルに至るまでの哲学史を講じたが、その印象は今日なお忘れることができない。」と述べ、まだ哲学を知らない日本人に対して、フェノロサは諸学説を簡潔に要約して教えてくれたので、わかりやすかったとも言っている。

円了は西洋哲学の講義をきく一方で、また東洋哲学の儒教、仏教も学び、その他に英文

学や社会学などを学んでいる。こうして、円了は予備門から学部で、哲学を中心に、西洋諸学の教育を受けたのである。学生時代の円了について、同級生の阪谷芳郎は後年、こう語っている（阪谷は大蔵省に入り、事務次官から大蔵大臣を務め、東京市長などを歴任した）。

「円了博士は哲学科で私は政治経済科であったが、同じ寄宿舎で生活していたところより、博士と私は親密であった。概していうと、博士は学生時代から非凡の才識をもった人で、すべての点において衆人に卓越したところがあった。

また一面には非常な着眼力の鋭敏な人で、その時代に日本にはじめての催しであった学生の運動会、演説会などには非常な技巧を凝らして、衆人をアツといわせたこともあり、また演説もなかなか雄弁で、学生の期待するところであった。その外、学生の団体でやる事業にはいつも参謀として諸般の事務を取り、敏活の才を振っておられた。

このように博士の学生時代は一面には才気溼漑はつろなところがあつたが、また他面には大の読書家であつた。騒々しい寄宿舎にいても、独り沈黙を守って読書にふけつたり、図書館などにてはいつも博士の姿を見受けた。普通の人は沈黙家、読書家であると、一種の性癖があつて変人とか奇人とかの風評を受けるものであるが、博士にはそんな態度がなかつた。

いたって温和な社交家で、学生の談話会にはいつも話の中心となった人であった。大学在学中には博士の外にも沢山の知友がいたが、私の脳裏に一番印象深かったのは博士であった。」

このように、円了は活動家でありながら、大の読書家であり、騒がしい寄宿舎でも独り読書に耽ることができた稀な集中力の人であった。

大学時代のノートは、今でも東洋大学に保存されている。その中でとくに目立つのは、「明治十六年秋 稿録 文三年生 井上円了」と表書きされた分厚い学習ノートである。この『稿録』というノートは、西洋の文献の抜き書き集とでもいべきものであり、当時の円了の学習の関心を知ることができる。この『稿録』を分析した、ドイツ人の井上円了研究者ライナ・シユルツァによれば、抜粋された五九冊の英書の種類でもっとも多いのは西洋哲学で、その他では、生物学・人間学（進化論）、地理学、物理学、辞典・百科辞典、化学、歴史、文学と、多岐にわたっているという。

明治一〇年代は、社会が文明開化で変動し、まだ価値観が動揺している時期であった。昔のものをそのまま信じることもできないし、新しいものも本当なのか、まだ信じられない

い。そういう状況に立ち至ったとき、円了は『稿録』に見られるように、読書と思索を通して、自分の頭の中で論理的に検証していく作業を行った。

そして、円了は、ギリシャを起源とする西洋の哲学の本質を理解するようになった。それは、「真理とは何か」の究明であった。哲学が真理の基準であるという考えに達した。そのことをこう書いている。

「僕がもっぱら力を注いだのは哲学の研究（授業と独学で「哲学とは何か」を追い求めること）であり、その中に真理の明月を発見しようとして、また数年という長時間を経たのであった。そんなある日、大いに悟るところがあった。僕が十数年来、苦しみながら渴望していた真理は、儒教、仏教の中には存在せず、キリスト教の中にも存在せず、ただ西洋で講じられる哲学の中にあることがわかったのである。そのときの僕の喜びははかりしれない。あたかもコロンブスが大西洋の中に陸地の一端を発見した時のようであった。このとき十数年来の迷雲が初めて開き、脳の中がすっきりして頭の中を洗ったような心地であった。」（佐

藤厚の現代語訳）

これは円了の自伝的文章である。円了は納得できなければ、認めない人間であった。そ

のため、青年時代から、仏教、儒教、キリスト教を知りながら、それらのどれも真理とは思えなかった。真理は、ただひとり西洋の哲学中にあることを知った。自分のなかで、雲の中にいるように悩み、苦しんだ日々は長かったが、ある日、突然としてにわかには雲は晴れて、迷いは解けていったと言う。

哲学界内に「真理を発見した」円了は、その見方から他の旧来の諸教を再検討したところ、ひとり仏教の説だけが、大いに哲理に合するものであることをみたという。そして、さらに仏典を考証して、「ヨーロッパで数千年来、実究されて得たところの真理は、それよりも早くすでに東洋で三千年前の太古にあったことを、私はどうして知らなかったのだろうか」と言い、仏教が東洋の哲学であるという結論を得た。哲学としての仏教を新たに「発見」したのである。それは一八八五（明治一八）年、大学四年生のことであったと述べている。これによって、円了は「哲学は洋の東西にあり」と確信した。「哲学は知りたいという気持ちをもつこと」といわれるが、円了は哲学研究のチャレンジを達成し、この確信を得たことで、一生にわたり哲学を手放すことはなかった。

こうして在学中の一八八四（明治一七）年に、哲学の先駆者・西周、加藤弘之、井上哲次

郎などの先学者と、三宅雪嶺^{せつれい}、棚橋一郎などの先輩の同意を得て、日本に初めての「哲学会」を創立したのである（この哲学会は、現在も東京大学哲学会として存続している）。

円了は自分の学生時代をふりかえって、こう語っている。

「人生一生のうちにおいて、その愉快なるときは、学生時代に及ぶものはない。その幸福愉快なることは、とても言葉で表現し尽くすことはできないものである。」

この学生時代の漢詩集のタイトルは『屈蠖^{くつかく}詩集』という。専門家によれば、「屈蠖」とは、身を屈している尺取り虫を意味するという。尺取り虫が屈するのは、つぎに伸びようとするからであり、しばらくは志を得ずに忍耐するのも、それは他日を期して隠忍するからである。このような名称を用いることで、円了は心の中では、雄飛^{ゆうとび}（勢い盛んに勇ましく活動する）せんとするチャレンジャーの叫びを、詩集に託したように考えられる。

一方で、円了は故郷の父母を想う詩をこう連作で詠んでいる。

「ひとり旅するため、初めてふるさとと別れる。両親は旅行く自分を心配してどれだけの日を送ったのであろうか。家からの手紙には諫め^{いさめ}が書かれており、固く勤儉（勤勉で儉約する）を守れという四文字であった。」

「学問を研究してすでに数年、ただひとりいまだに官職にも就いていないのだが、いまもふる里には心配している年老いた親がいるのである。」

こうして両親の思いを自分に重ねて詠んでいるが、他方、時代の先へ進もうという自分の志をこう詠んでいる。

「古くさい書物について研究することすでに一〇年になる。この一〇年はむなしく古代の聖賢に学んだことになる。しかしながら、ここで過去の死せる物を学ぶことにはいかなる益もないことがわかった。いまや世の移り変わりの活きた歴史を見ようとするのである。」

この詩には、過去の聖人や賢人たちの訓話（字句の解釈）はもうやめて、文明開化へ移る時代の変化に役立つものを、自分で創ろうとするチャレンジャーの心が入っているように考えられる。哲学することに確信をもった円了は、のちに、日本人の手になる初めての西洋哲学史の『哲学要領』や、日本人の初めての哲学論『哲学一夕話』を発表する。これは当時、よく読まれた本であると、現在も評価されている。

卒業で岐路に立つ

一八八四（明治一七）年九月、円了は大学四年生になった。二六歳であった。卒業後の進路を考えなければならなかった。ある日、陸軍軍医の幹部になっていた恩師の石黒忠恵から、こう言われた。

石黒「君は成績もよいので、文部大臣の森有礼に話して、文部省の方でぼつてき抜擢採用するよ
うに勧めたら、大臣もそれでは採用しましょうということになった。君はどうか。」

円了「おもし召し（私を思ってください）はまことにありがたいのですが、もとよりわたしは本願寺の宗費生（奨学生）として大学で学んできましたから、官途（政府の職）につくことはできません。わたしは日ごろの誓いとして、将来は宗教的教育的事業に従事して、大いに世の中の人々のために一生懸命に力をつくしたいと思っておりますから……」

こうして円了は、石黒の文部省への就職の斡旋を辞退した。「末は博士か大臣か」という当時の事情からいえば、文部省に入ってしまったえば、留学していずれは大学教授へと進むコースを断ったのである。その理由は、東本願寺からの恩義を大切にしたいからであると

いう。と同時に、教育的事業に従事したいという将来の希望を述べていたのである。

石黒の斡旋を固辞したのには訳があった。円了はすでに、大学四年生になった直後に、東本願寺へ学校設立の上申書を提出していたからである。その上申書では、「日本が鎖国から開国して、内務ばかりでなく、外務を設けたように、教団も内務にあたる自教の性質を研修すると同時に、外務にあたる西洋諸学やキリスト教を研究する時代にはいつている。この外務を研究・教育するために、新たに仏教館、哲学館の両館を創立することが必要である。」と述べられている。

七年間にわたり東京大学で西洋諸学を学んできた円了には、日本の仏教界に対して深い危機意識があった。そうしたことから、上申書では、仏教界の主な課題として、つぎのようなことをあげている。

第一に、西洋哲学諸科を研究して、仏教の諸説に応合させる。

第二に、物理生物諸学を講習して、仏説と理学との争論を調和する。

第三に、政治道德の性質、社会の事情を探索して、実際の布教を思考する。

そして、これらのことを行う学校を「輦轂れんこく（天子のおひざもと＝首都）の下に創設して、これ

までの僧侶で内外の学問を学ぼうとする者を集め、宗教の真理を講究させれば、僧侶学を中心に、日本の教海（仏教界）の標準となるでしょう。」と提言している。

円了にとっては、西洋で発達した学問・知識は無視できないものであり、それと日本の歴史的知識や文化をどう融合させるのか、ここに「明治青年の第二世代」の共通した課題をみることができる。

当時、東本願寺の東京留学生は円了を含めて六人いて、円了はそのリーダーであった。円了は、この五人と相談して、新時代に対応する学校の創立を東本願寺へ訴えたのである。二〇歳代の円了が、大教団への復帰よりも、「今日の急務」という差し迫った表現をもって、東京での学校創立を主張したことは、教団の関係者にすれば、大変な驚きであったろうし、また、伝統と組織を無視した上申であると受け止められてしまったことは、十分に考えられる。

一八八五（明治一八）年一〇月、東京大学学位授与式が行われた。円了は四八名の卒業生の「総代（首席）」となって、加藤弘之総理に対して、つぎのような謝辞を述べた。

「私どもは将来役人（国家公務員）となったならば、国家・国民のためにできる限りの力

を尽くし、民間で働く者となったならば、国家の方針によく協力し、それぞれの分野で立身出世（努力発展）いたします。そして、一生懸命に社会の文化や文明を發展させ、国家のために尽くすよう努める所存です。

このように、各自が置かれた立場で持てる力を發揮してこそ、大学を出て学士の称号を得た者の義務 (noblesse oblige) を全うしたことになり、併せて、大学を卒業するまでに私どもを応援してくれた方々（両親・恩師等）の恩に報いることになるのだと信じています。」

このように榮譽ある役割を果たした円了に対して、留学派遣した東本願寺ではその対応策が決まっていなかった。学位授与式に参列したのは南条文雄であった。南条は、東本願寺から、イギリスのオックスフォード大学の宗教学者であるマックス・ミュラーのところへ海外留学して、『南条カタログ』という英訳の仏典の目録を作成し、修士号を取得して帰国した人物で、円了の大学時代の保証人になっていた。

南条は深紅の学位服を着て式に出席し、ひときわ目を引いたというが、終了後、すぐに東本願寺の首脳を訪ねて、「さて井上が学士になりました。仏教の各宗中ではじめての学士です。東本願寺でも、早く何とか優遇の道を講じなければいけません。それでないと逃げ

てしまうからです。」と、わざわざ献言したという。

結局、東本願寺からは、「インド哲学取調係り」を続けるようにという命令だけがあった。円了は、今度は国費給費生となつて、東京大学研究生（五名）、帝国大学大学院（七名）の一人に選ばれた。しかし、円了の学校設立に関する東本願寺との交渉は、その後も再三再四にわたつて行われたという。

「人間一生で、どのくらいのことができるのか」

長岡で育つた青年・円了は、東京大学の予備門と学部で大きく成長し、日本の問題を自分の問題として考えられるようになっていた。「知は力なり」といわれるが、教育の力によつて人間は変化し発展する。

時代がすでに明治に変わつて二〇年が経過しようとした時点で、日本には大きな問題があった。「有形のもの、蒸気船、電信などの物の世界は進歩したが、無形のもの、心（精神）の世界はまったく進歩していない。」と福沢諭吉は言っていたが、円了も同じ考えであった。哲学を社会に広め、教育の力で日本人の「ものの見方・考え方」を近代化しようというの

が円了の考えであった。

石黒が決めてきた文部省への就職を固辞した円了が、将来に私立学校の設立を考えていたことはわかった。東本願寺への提案は、依然として交渉中であったが、大学を卒業した円了は、自分の将来をこう考えていた。

「俺はよそこから月給をもらわないで、ひとつ人間一生で、どのくらいの事業ができるか試してみよう。」

円了の死後、前田慧雲（東洋大学第二代学長）が述懐したところによると、円了はいつもこう言っていたという。官職を固辞したことと、自分がこれから果たすべきことを考えて、一つの哲学（理念）として得た結論なのだろう。この哲学を実行することが、円了の人生になった。

国費給費生として東京大学の研究生になった円了は、まだ身分は東本願寺の教学局にあったが、自由に活動することができた。そこで取り組んだ第一の事業は、著述・出版のことであった。円了の論文執筆は大学時代から始まっていた。教団系の新聞や創刊されたばかりの学術雑誌に論文を発表していたが、大学卒業前後から、より広く社会に哲学や宗教

に関する新しい知識と思想を伝えるために、本格的に著作活動に専念した。それはつぎのとおりである。

宗教界の新聞『明教新誌』に、キリスト教と仏教の比較論を二年にわたり合計で一二〇回連載した（これはのちに『真理金針』として全三編にまとめられた）。また、『令知会雑誌』に、日本人で初めての西洋哲学史の著述となる「哲学要領」という論文を、一年四か月にわたり一五回連載した（これはのちに『哲学要領』前編としてまとめられ、後編は日本人の初の哲学論として書き下ろされたものである）。これらの著述は、仏教界のみならず社会的にも高い評価を受け、円了は若き論客として社会から注目されるようになった。

こうした社会的評価を背景に、円了は単行本をつぎつぎに出版した。『哲学一夕話』、『通信教授 心理学』、『心理摘要』、『倫理通論』、『哲学道中記』などが、初期の主要な著作である。いずれも、当時の日本にとっては真新しい理論であった。円了が「近代日本の啓蒙家」と呼ばれるのは、こうした著作が広く読まれたからである。哲学科の二年先輩の三宅雪嶺は、こう語っている。

「井上氏は卒業とともに人一倍の働きができた、いな数倍の働きである。……すなわち、

在学中に十分に火薬（知識）をこめ、卒業後に弾丸を発射（著作）したもので、……数年間は何者もよくこれを防ぐことができない勢いであった。」

このようにして数々の著作を発表したのであるが、その著作の特徴を、『哲学一夕話』などを分析した哲学者の小坂国継氏はこう指摘している。

「明治期における純正哲学は井上円了の『哲学一夕話』（明治一九〇二）をもつて嚆矢（じまり）とする。西田幾多郎は青年時代にこの書を読み、感銘をうけたことを追懐しているが、本書はいわば日本の観念論の原型とも称すべき著作である。」（西田はのちに「西田哲学」を確立し、現在も世界的な哲学者と位置づけられている）

「前述したとおり、円了の『哲学一夕話』は明治期における本格的な純正哲学つまり形而上学（じしやうがく）の端緒であった。また、それはその後の日本的観念論を方向づけたという意味でも重要な著作である。そこには、仏教思想にもとづいた幽玄（ゆうげん）な思想が円了の文才によって、きわめて興趣に富んだ一篇の読物に仕立てられている。それは当時よく読まれた本であった、哲学の通俗化（普及）という点でも貢献度の高い著作であった。」

また、のちの『哲学新案』という本を取り上げて、「『哲学新案』は円了の主著ともいう

べく、自己の純正哲学を体系的に叙述したものである。円了はもともと体系的思想家であったが、その性格がもつともよくあらわれているのがこの著作であるといえるだろう。」

円了は第一の事業（著述）へのチャレンジに成功し、一躍著名名人になった。この間の一八八六（明治一九）年一月一日に、元金沢藩医の吉田淳一郎の娘・敬と結婚した。敬は東京女子高等師範学校（現在のお茶の水大学）の出身で、結婚する前は私立中学の教師をしていた。また、哲学書の普及・宣伝のために「哲学書院」という出版社を、一八八七（明治二〇）年一月に設立している。

ベストセラー 『仏教活論序論』

一八八七（明治二〇）年二月、円了は『仏教活論序論』を刊行した。これは文字どおり、仏教を活性化させることを目的とした書物であった。明治の初め、それまで国教に準ずる位置にあった仏教であったが、明治維新をきっかけとしてその位置づけが大きく変わった。明治新政府の方針は天皇を中心とする国づくりであり、宗教は天皇制と結びつけられた「神道」を中心とするというものであった。そして、神道を中心として仏教を排斥するという

方向に世の中が進んだのである。

明治維新が起こったとき、円了は一〇歳であり、今でいえば小学校高学年である。そのとき、世の中に吹き荒れた廢仏毀釈運動はいぶつきしやくの中で、お寺出身の円了は、仏教というものの運命を考えざるを得なかったであろう。そして一度は仏教に見切りをつけたが、東京大学で西洋哲学を学び、そこに古今東西を貫く真理を発見した円了は、再び仏教を見てみると、実は西洋哲学と同じ真理が仏教の中にあることを発見した。そして沈滞化していた仏教界に対して奮起を促したのがこの本であった。

この本は三部構成からなっている。第一部「国家と真理」では、学者として国家を護り発展させることと真理を愛することは、両立することを説いている。「護国愛理」は一体不二のものである、これが円了の哲学であり、ものの見方の特徴である。第二部「国家と仏教」では、日本に必要な宗教は仏教かキリスト教かを問題とし、それが仏教であるとする。そして、当時仏教が盛んな国は日本しかないから仏教を世界に輸出すべきであることを説き、さらにキリスト教が日本に適合しない点を述べている。第三部「仏教と真理」では、仏教の哲学的部分と宗教的部分の特徴を指摘しながら、哲学的部分においては西洋哲

学の説く真理と一致していることを説いている。

このように『仏教活論序論』の主題は、国家、仏教、真理であり、それらが有機的に結びついていることを論じている。さらに、仏教は、日本という国家にとって利益になる教えであるとともに、それ自体としても西洋哲学の真理と合致する、すばらしい教えであることが論じられている。

円了はこの本の「緒言」(まえばき)で、当時の仏教界をつぎのように痛烈に批判している。「今、仏教は無知な民衆の間で行われ、無学な僧侶の手で伝えられているため、悪習がとても多く、外見上、野蛮な教えとなっている。そのために仏教が日に日に衰退している有様である。これが、僕が大いに嘆く点であり、真理のためにあくまでこの教えを護持し、国家のためにあくまでその弊害を改良しようと思うのである。

だが、その護持と改良のやり方は、今の僧侶たちと一緒にやろうとしても無駄である。彼らの過半数は学識も気力もないからである。そのため、たとえ一緒にやろうとしても志を遂げられないのは必至である。そのため僕は、世間の学者、才子(知識者)の中で、かりにも真理を愛し、国家を護る志を持つ者がいれば、彼らとともにその力を尽くすことを決

意し、あわせて世間の学者、才子の方には、僧侶の世界の外に仏教の真理を求められることを望むものである。」（佐藤厚の現代語訳）。

すでにみてきたように、円了は寺に生まれ育った人間であり、東京大学へ留学させてくれたのも東本願寺教団である。にもかかわらず、その人間が「仏教は無知な民衆の間で行われ、無学な僧侶の手で伝えられているため」と、門徒や寺族（住職とその家族）を愚かで無知な者たちと批判したのである。当時の円了のおかれた立場においては、このような批判を口に出すことさえタブーであり、心の中でそう思っても、口に出すこと、さらには文字にして、世間に仏教界の腐敗した実態を糾弾することは、誰もしなかった。円了はチャレンジャーとして、教団追放の危険を承知でタブーを破ったのである。

しかし、この本が刊行されるとベストセラーになった。仏教界の若い人々で志ある者は、この『仏教活論序論』を読んで仏教の教えを自ら学ぶようになり、のちに碩学（大学者）になった人もある。なかには、釈迦の経典をチベットへ求めに、危険をおかして海外へ出たチャレンジャーもいる。仏教研究者の常盤大定は、この本を評価して、「円了の『仏教活論序論』は仏教界にとっては救世主の到来ともいえるほどの書物であった」と言い、この

本が仏教界だけでなく、広く社会で読まれたことを指摘して、「仏教近代化の原点になった」と述べている。

難治症にかかる

円了が大学四年生から三年間にわたって執筆した本は一六冊に及んでいる。四〇〇字詰め原稿用紙で数えると、優に二〇〇〇枚を超えている。起きれば書籍や原稿用紙に向かい、疲れれば寝るといふ、昼夜を問わない研究生活を行っていたと考えられる。

「ヨコのをタテにする」といふ言い方があるが、悪い意味では、西洋の文献を日本語に翻訳して自説として主張したことを指す（正式な翻訳本は別である）。円了も西洋の文献を積極的に学んだが、その説を受け売りするのではなく、これを自分で消化して、自説を加えて本としたことがわかっている。

初期の著作はこのようにして社会的な評価を得て成功したが、逆にその代償は大きかった。円了のメモによれば、

「一八八五（明治一八）年二月二四日、痔疾のため本郷の大学病院に入る。一九年一月

「四日に退院。」

「一八八六（明治一九）年四月一日、（痔の）切断を施す。」

「同年五月二〇日頃、咽喉カタル（喉の炎症や咳が出る病氣）を起こす。」

「一八八七（明治二〇）年二月三月の際、三、四回血痰を吐くことあり。」

「同年一〇月二日夜、咯血（かっけつ）（肺結核の疑いが多い）。」

時間の経過とともに、病状は悪化していった。円了は温泉などでの療養生活を余儀なくされたが、その間も執筆は続けられたという（円了は病氣を理由に大学院への進学を辞退していた）。

肺結核は「不治の病」とされていた。しかし、すでに紹介した『仏教活論序論』の中で、こう書いている。

「僕は、今後いかなる困難に当たっても、決して避けることではないのであるが、一大事を計画しながら、いまだにその成果を出せないうちに、この病にかかってしまった。そんな中で僕の心が、どうして落ち着いていられようか。…この病氣の全治は望み難いことがわかったが、護法愛国（仏法を護り国を愛する）の一心に至っては、ますます盛んになることを覚えた。」（佐藤厚の現代語訳）

ここでいう「すでに一大事を計画して」とは学校の創立のことであり、このように円了は「命がけ」で新たな事業にチャレンジしようとしていた。そういうブレない「信念の人」であった。

III
哲学館時代
1

高等教育の始まり

円了は東本願寺との交渉をあきらめて、個人で学校創立を決意するが、当時の日本の高等教育はどのようなようになっていたのか、そのことを明らかにしておこう。

日本の近代教育は明治時代から始まった。それ以前（江戸時代）にも、武士は藩が設立した学校（藩校）などで学んだが、一般民衆の中には教育に対して関心を持っている人も多く、寺子屋、家塾、私塾などで盛んに教育が行なわれていた。そうしたこともあり、当時の日本の識字率は世界一と言われていた。しかし、これらは歴史の中で自然に発達したもので、もちろん義務教育ではなかった。

明治政府は「士族や平民の区別なく、全国民が一様に教育を受ける」ことを理念として、フランスの教育制度を導入した。一八七二（明治五）年に公布された「学制」（学校制度）がそれである。小学校を人口六〇〇人につき一校（合計、五万三七六〇校）、中学校を人口一三万人につき一校（合計、二五六校）、大学を全国に八校（のちに七校に修正）設置するという内容であった。だが、政府の財政基盤が弱かったため、その実現は困難を極め、数十年かかった。

すでに述べたように、日本初の大学は東京大学である。この開設にいたるまでにも、紆よきよくせつ余曲折があつた。幕府の學術機関を接取した明治政府は、大学本校、南校、東校としたが、主たる学問を漢学にするか、国学にするか、という主導権争いの末に分裂した。「学制」発布と同時に文部省が設立され、それから五年後の一八七七（明治一〇）年ようやく、東京開成学校と東京医学校を合併して東京大学とし、予備門と四学部を設置した。

教育の主流は「官学（国立）」というのが、戦前（一九四五年の敗戦まで）の政府の教育政策であつた。円了が「私立学校」を創立しようとした時期、根拠となる法律は「諸学校通則」であつた。一八八九（明治二二）年の「東京諸学校一覽」という資料によれば、同じ私立といつても、裁縫学校や大学予備校と同じ扱いで、必ずしも高等教育に限つたものではなく、「その他」（雑種）をまとめたものであつた。歴史のある私立大学もすべてここから出発した。当時は届け出をするだけで、どのような種類の学校であつても、自由に設立することが可能であつた。これは、官学中心主義の教育政策をとつていた政府が、私立学校を高等教育機関としては認めず、制度に組み入れることもしなかつたからである。したがつて、私立学校を設立することは自由であつたが、国からの援助はもとより、帝国大学（一八八六・

明治一九年に東京大学から発展させたに与えられたような優遇措置もいっさいなかった。しかし、制度に組み込まれないという点を裏返してみれば、国からの制約を受けられないということであり、創立者は、それぞれの教育理念に基づいて自由な学校づくりができた。そのため、明治初期から多くの私立学校が、それぞれ独自の建学の精神を掲げて誕生していた。

表1は、明治期に設立された私立学校で、旧制大学から戦後の新制大学まで続いている二五校を、設立年順に並べたものである。これによると、日本の近代教育の創始期である明治一〇年代に続々と学校が誕生しているが、特に「五大法律学校」と称される現在の専修大学、法政大学、明治大学、早稲田大学、中央大学がこの時期に創立されていて、それらは法律家の養成という帝国大学の役割を補完する意味があり、「代言人（弁護士）」を養成するために、これらの私立学校に五〇〇〇円が特別に補助されたが、そのとき以外、政府は私立学校にまったく補助金を出さなかった。しかし、私立学校は民間の立場から高等教育を行おうというものであり、政府がその存在を正当に評価していなかったにもかかわらず、その社会的役割は次第に増大していった。

表1 旧制大学から新制大学まで続いた25の私立大学

設立年	設立時校名	現在名
1858(安政5)年	蘭学塾	慶応義塾大学
1872(明治5)年	宗教院	立正大学
1874(明治7)年	立教学校(英語学校)	立教大学
1875(明治8)年	曹洞宗専門学校	駒沢大学
	同志社英学校	同志社大学
1879(明治12)年	大教校	龍谷大学
1880(明治13)年	専修学校	専修大学
	東京法学社	法政大学
1881(明治14)年	明治法律学校	明治大学
	成医会講習所	東京慈恵会医科大学
1882(明治15)年	真宗大学寮	大谷大学
	皇典講究所	国学院大学
	東京専門学校	早稲田大学
1885(明治18)年	英吉利法律学校	中央大学
1886(明治19)年	真言宗古義大学林	高野山大学
	関西法律学校	関西大学
1887(明治20)年	哲学館	東洋大学
1889(明治22)年	日本法律学校	日本大学
	関西学院	関西学院大学
1891(明治24)年	育英饗農業科	東京農業大学
1900(明治33)年	台湾協会学校	拓殖大学
	京都法政学校	立命館大学
1904(明治37)年	日本医学校	日本医科大学
1911(明治44)年	上智学院	上智大学
1926(大正15)年	天台宗大学・豊山大学・宗教大学	大正大学

表2 設置者別学校数・学生数（1888・明治21年）

区 分	大 学（旧制）		専門学校（旧制）	
	学校数	学生数	学校数	学生数
国 立	1	738	4	439
公 立	—	—	5	1,107
私 立	—	—	34	7,736
計	1	738	43	9,282

出典：文部省『学制百年史（資料編）』1972年。

表2は、哲学館設立の翌年、一八八八（明治二一）年における高等教育機関の学校数と学生数を示したものである。大学は帝国大学一校だけで、官立の専門学校は九校だが、これに対して私立学校は三四校にもほっている。また、学生数の点でも私立学校が七七%以上を占めており、その高等教育における割合がいかに大きくなっていったかが明らかである。

これらの私立学校を教育内容別にみると、実用的な学問を教授する学校と、キリスト教、仏教、神道などの宗教を中心とした学校とに分けられ、前者はさらに、①法学・経済などの社会科学系、②英学など語学中心の人文科学系、③医学・物理学などの自然科学系に分類できる。このことからわかるように、哲学という分野を専門とする学校はこのいずれにも入らず、その意味では、哲学

館は極めてユニークな学校であった。

「哲学館開設の旨趣」

東本願寺との交渉を断念した円了は、個人で学校を創立することを決断する。教育は円了の生涯にわたる事業となったが、すでに述べたように、病身でのチャレンジであった。

学校の創立について、円了に協力したのは、のちに「哲学館の三恩人」といわれた加藤弘之と寺田福寿である。加藤のことはすでに紹介したとおりである。寺田は円了と同じ真宗の僧侶で、慶応義塾に学び、福沢諭吉の厚い信頼を得ていた。そして福沢の推薦で真浄寺（現文京区向丘）に入寺し、円了に対して全面的な支援を惜しまなかったという。

大学を卒業して二年が経過しようとしていたころ、円了はこのような支援者と相談して、哲学館の創立を実行に移した。一八八七（明治二〇）年六月、「哲学館開設の旨趣」を新聞・雑誌に発表した。要約すれば、つぎのようなことが書かれていた。

「文明の発達に主として知力の発達によっている。知力の発達を促すものは教育という方法であり、高等な知力を得るためには、それに相応する学問を用いなければならない。

その学問とは哲学である。哲学は万物の原理を探り、その原則を定める学問で、政治・法律から理学・工芸にいたるすべての学問の中央政府にして、万学を統括する学問である。しかし、哲学を専門に教授しているのは帝国大学だけであり、翻訳書が多く出ているとはいっても、それを読んだだけで原文の真意を理解することはむずかしい。

そこで、それぞれの分野の学士と相談して、哲学専修の一館を創立し、これを哲学館と称することにする。ここでは晩学にして促成を求める者、余資よしなき者（大学の課程に進むだけの資力のない人）ならびに優暇ゆうかなき者（原書を読みこなせるようになるだけの時間のない人）のために哲学を速く学べるようにし、一年ないし三年で論理学、心理学、倫理学、審美学、社会学、宗教学、教育学、純正哲学、東洋諸学などを教授する。哲学館の教育が成功すれば、社会、国家に利益をもたらし、文明進歩の一大補助となるであろう。」

当時の高等教育は、法律・医学に象徴されるように、実学系の学校が主流であったから、哲学（思想）を専門にした哲学館は、「ある意味で特別な学校であった」と円了は述べている。設立旨趣のこの文章で、円了は、哲学が人間にとって大切なものであることを力説したうえで、哲学館はそのような哲学を、広範な人々が学べる特別な学校であることを述べてい

る。「開設の旨趣」のなかの「哲学は万学ばんがくを統轄する（すべておさめる）学問である」という、この教育理念の言葉は、現代の東洋大学では、「諸学の基礎は哲学にあり」という言葉で継承されている。

これを第一とすれば、第二の理念は、「余資なき者、優暇なき者」である。つまり、学ぶ意志があっても、経済的・社会的な理由から学べない人々に、教育の機会を開放しようということ、これも哲学館の教育理念である。私立大学の創立の精神にふさわしいものであった。

このような旨趣の文章は、設立の協力を求めるために、知人や著名人に送られるとともに、雑誌にも掲載され、円了の学校創立の意図を広く一般に訴える役割を果たした

すでに述べたように、当時の私立学校の設立は、府県知事に届け出をすればよいものであった。国からの援助はなかったが、それぞれの学校の教育理念に基づいて自由な学校づくりができた。同年七月二二日に「私立哲学館設置願」が東京府知事に提出された。その設置の目的は「本校は哲学諸科を教授し、専ら速成を旨とす」、名称は「哲学館と称す」、位置は「本郷区龍岡町三一番地」、専任教員は円了と徳永（清沢）満之の二名であった。

開館予告を出してから生徒募集が始まった。月謝（月の授業料）は一円、束脩（そくしゅう 入学金）は一円五〇銭、九月一日以前に申し込んだ者は束脩を半額にした。定員は五〇名としたが、九月七日の新聞によれば、定員は満員となつて、一五名に限り追加募集したが、申込者が後を絶たず、そこで新たに第二教場を設けて八〇名を追加した。これもほどなく満員になつて、入学謝絶したと伝えている。

哲学館の開館式

哲学館は、はじめは独立した校舎を持たず、東京大学に隣接した、本郷区龍岡町（現在の文京区湯島）にある臨濟宗妙心寺派麟祥院（りんざいしゅう りんしやういん）という寺の境内にある建物一棟を借りて教室としていた。開館式は、一八八七（明治二〇）年九月一六日、この寺の境内で行われた。

式は午後一時ごろから始まり、来賓および生徒一同を前に、まず館主である円了が開館の趣旨を述べ、ついで帝国大学文科大学長外山正一が「哲学の普及」という祝辞を呈した。さらに棚橋一郎が「哲学の要」、辰巳小次郎が「哲学の世間に及ぼす効用」と題して演説をした。来賓は帝国大学の学士と仏教各宗の学僧が多かつたという。式の模様は当時の『東

『京日日新聞』や『郵便報知新聞』などで報道された。

井上円了が開館式で行った演説は、「哲学館開設の旨趣」の内容をさらに発展させたもので、哲学館の目的を詳しく述べている。円了は、哲学館における教育の対象者を、つぎの三点にまとめている。

第一 晩学（若い頃に学べなかった人）にして速成を求めめる者

第二 貧困にして大学に入ることが不可能な者

第三 原書に通ぜずして洋語を理解できない者

そして、哲学館はこれらの人々に哲学を教授するが、その目的は「哲学者の養成ではなく、哲学を学ぶ（哲学をする）ことにある」としている。哲学は諸学の基礎となるものであるから、法律家や工業家など、社会に出て一つのことを達成しようとする人は、哲学諸科を心得ているべきであり、また教育家や宗教家になる人が学べば、専門の学問の理解を助けることにもなる。哲学館は、このように活用範囲の広い哲学を日本語で教え、速成するための学校であると言っている。ここで円了が考えていたのは、哲学館は円了自身が学んだ東京大学の哲学科をモデルとして、その速成科たるべきことであった。

さらに、哲学館には学問上においても大きな役割があると、円了は言っている。まず、哲学は西洋諸学の関係を知るのに便利であること。そして、哲学を学ぶことによつて、東洋の学問、特に東洋哲学の空想的で憶断にたよるといふ欠点を補い、その活性化をはかること。そのためには、西洋哲学と東洋哲学を同時に学ばなければならず、哲学館のような学校が必要となる。円了は、開館した哲学館が「仮教場」であり、いずれ校舎を建設して、「哲学館の独立」をはかるつもりであると述べて、演説を締めくくっている。

ところで、哲学館の誕生にはどのような期待が寄せられていたのだろうか。円了にとつて東大時代の恩師の一人である外山正一は祝辞の中で、哲学と哲学館の必要性について、つぎのようなことを言っている。

「高等教育機関は帝国大学だけが、これは修学の年限が長く、学費もたくさん必要である。現在、学問をしたいと願う人々が多いという『世の需要』にもかかわらず、学校は不足しているので、『専門学校』が必要になつてくる。そもそも一国の文明を開くということは、一人二人の知識人がいるだけでは達成できず、やはり一般人民が知識に富むようにならなければならない。

そのために法律・医学・政治・経済などの速成学校（短期修得型の専門学校）が多くできるようになったが、哲学の学校というのにはなかった。哲学館はその欠点を補う意味がある。世間には哲学思想をあまり重視しない人もいるが、歴史を書く、宗教を論じる、美術の改良を論じる、人倫を研究する、さらに国の隆盛をはかるにしても、哲学上の思想によらずにできるものはない。」

歌人であり、また和歌の研究者として現代でも広く知られている佐佐木信綱のぶつなは、この式典に哲学館の第一期生として参列していた。佐佐木は、円了の『哲学一夕話』などによって、哲学に対する興味をかきたてられ、帝国大学の古典科と国民英学会に学ぶかたわら、哲学館にも通うことにしたのであった。「開校当日、麟祥院に行ってみると、本堂にだいぶたくさんの方がおりました。自分の第一印象としては、自分と同じく哲学を知ろうとあこがれている人がこのように多いのだろうか、驚くとともに喜びました。」と、佐佐木はそのときの感想を書いている。

すでに述べたように、帝国大学（東京大学）に入るには、まず予備門で語学を学ばねばならなかったもので、大学卒業までには七年もかかり、しかもその卒業者は少なかった。これ

では、近代化に必要な人材の養成や学問・知識の普及は望めない。

これに対して私立学校は、速成主義をとり、授業も日本語で行っていた。東京専門学校（早稲田大学）の創立者の一人である小野梓は、一八八二（明治一五）年の開校式で、「同校は速成を期し、日本語で教授するところで、これによって学問の独立、大学の設立へと進むであろう。」と演説している。これは、当時の私立学校の創立者たちに共通の考え方であり、円了もこれと同じ立場に立っていた。

若い教員たち

こうして哲学館はスタートしたが、円了の理念の実現を支えたのは、教員たちであった。開設当初の講師・評議員（表3）には、創立までの協力者が多いが、特徴は二つある。

表3 創立時の講師および評議員（年齢順）

氏名	年齢	学歴	担当科目	関係事項
井上 円了	29	東大卒	心理学、 哲学論	教育者、哲学者、哲 学館創立者
岡本 監輔	48		儒学	東大予備門講師
村上 专精	36	高倉学寮	仏教論	仏教史学者、東大講 師
清野 勉	34		論理学	哲学者、創立以来論 理学を教授
内田 周平	33	東大卒	儒学	中国哲学者、美学、 儒学を教授
国府寺新作	32	東大卒	教育学	高等師範学校教授、 外交官
松本 愛重	30	東大卒	国学	文学博士
松本源太郎	30	東大卒	心理学	教育家
嘉納治五郎	27	東大卒	倫理学	教育家、講道館柔道 の創始者
織田 得能	27	高倉学寮	仏教史	仏教学者、真宗大谷 派僧侶
辰巳小次郎	27	東大卒	社会学	東大予備門教諭
三宅雄二郎	27	東大卒	哲学史	哲学者、評論家
清沢 満之	24	東大卒	心理学、 哲学史	哲学者、僧侶、東本 願寺の改革運動をお こす、評議員
棚橋 一郎	24	東大卒	倫理学	教育家、郁文館中学 を設立
岡田 良平	23	東大卒		官僚、政治家、東洋 大学第5代学長、評 議員
日高 真実	22	東大卒	論文校閲	教育者、東大在学中
加賀 秀一	22	東大卒		教育者、学習院教授、 評議員
磯江 潤	21	応報義塾	英学初歩	教育者、幹事兼講師、 京華学園を創立
坂倉銀之助		東大卒	論理学	哲学者、鹿児島高等 中学造士館教授
柳 祐信			英学初歩	東本願寺留学生、評 議員

第一点は、講師一八人のうち一二人が東京大学の卒業生であること。第二点は、講師の年齢が若いことで、館主・円了は二九歳で、教員のほとんどは二〇代と三〇代であった。最高齢者の岡本監輔は、円了が予備門で教えを受けた人だが、それでも四八歳である。また、村上専精は仏教学の講師として勤めながら、同時に一学生として西洋哲学を学んでいた。明治は「早熟の時代」だったともいわれるが、創立したばかりの哲学館の推進力となっていたのは、彼らのみずみずしい知性とあふれる情熱であった。

創立当初は、入学試験はなく、一六歳以上の男子が対象というだけで、特別な制限はなかった。したがって、学生は一七〜一八歳の青年から四〇〜五〇歳の中年までと幅広く、中には「子持ち」や「孫持ち」の学生もいたということである。

一九歳で哲学館に入り、のちに第四代学長となった境野哲(黄洋)は、当時の印象をこう記している。「学校とは名前のみで、徳川時代の寺子屋式であって、湯島の寺の一室を借りて校舎にあてていた。通学する学生の服装は一定ではなく、洋服あり、破ればかまあり、あるいは金襴きんらんの袈裟けさに数珠じゆずという人もあった。いまから考えれば、一種の仮装行列ともいべきありさまであった。」

また、学力の差は人によって大きく違っていて、専門的知識を持った人もいれば、まったく白紙の状態の人もいた。ほとんどの学生が英語はもちろん知らないし、心理学や倫理学など聞いたこともないというような状態であった。

哲学館で学べたのは、最初の年は、教室に来て直接講義を受けられる通学生（館内員）だけであったが、翌一八八八（明治二一）年一月からは、今日でいう通信教育にあたる「館外員制度」が創設され、『哲学館講義録』を通じて学習することも可能になった。この講義録は、教室での講義をそのまま筆記印刷したもので、地方で学ぼうという人々に便宜をはかるため、毎月三回、頒布が行われた。哲学館では、その購読者を「館外員」と呼んで、学生として受け入れることで、「余資なき者・優暇なき者」に教育の機会を開放するという、哲学館の教育理念を実現したのである。「館外員」には年齢制限がなく、また特別な資格を必要としなかったことから、この制度の下で多くの人々が哲学などを学んだ。この翌年の統計をみると、北海道から朝鮮まで、館外員は合計で一八三一名に達していた。

学生の一人であった河口慧海は、鎖国状態にあったチベットやネパールに入って、貴重な仏典を持ち帰ったことで知られる仏教学者で探検家であるが、哲学館が創立されたとき

は二二歳で、はじめは学資がないので大阪で「館外員」として講義録を読んでいた。そのうち苦学を決心して上京し、「館内員」となった。しかし、実際の生活はそうとうに厳しく、「茶漬沢庵の下宿で、一か月金二円、学校の月謝と校費で一円一〇銭、残金九〇銭が雑費である」と書いているが、この二円を得るためにアルバイトに励み、疲労と闘いながら勉強をしたのである。哲学を学ぼうという熱意は当時の学生に共通したものであった。

当時は西洋の大学と同じように、九月から翌年七月までが学年の区切りになっていて、一日の授業時間は午後一時から五時までであった。では、「寺子屋式」の畳敷きの教室では、具体的にどのような授業が行われていたのであろうか。

哲学館では、テキストに翻訳本を使わず、教室で教師が原書を訳しながら授業をしていた。まだ、しきりに訳語をつくり出して出している時代だったので、翻訳本は読みにくく、かえってむずかしいこともあったからである。しかし、この方法にも問題がなかったわけではない。ときには教師が適当な日本語を思いつくことができなくて苦しむため、聴いている学生はよけいにわからなくなることもあったようである。「授業時間が一時間であれば、質問時間は三〇分必要であった」と、学生の一人は記している。ついには、矢のような質

問で教師に迫る「質問博士」とか、逆に教師に対して堂々と説明してみせる「説明博士」などと呼ばれる学生も現れたということである。

また、ある講義では、むずかしいカントの哲学を一番はじめに教えてしまったとか、また別の講義では、学生に「キャツカン（客観）とはどういう字ですか」と日本語の表記を尋ねられた教師が、「それはオブジェクトです」と英語で答えたという、これではなにがなんだかわからないだろうと思えるような、そんな笑い話のようなエピソードも残っている。

初期の授業は教師と学生の間に混乱があり、不完全なものであったが、どちらも情熱にあふれていたのも、実に活気に満ちていた。また、学問に対する態度は真剣で、自由な研究という点では非常に優れたものがあつた。

哲学館の創立資金

入学者は確保できたが、学校を開設するには基金が必要であつた。このため、円了は、現在でいうクラウドファンディング方式により、広く個人から寄付金を募ることで資金調

達を行い、哲学館を創立した (crowdfunding とは、民衆 (crowd) と資金調達 (funding) を組み合わせた造語である)。

円了によると、「この学校は二八〇名の創立寄付者によって七八〇円余り」の基金で始まったという。しかし、当時の新聞・雑誌を見る限り、哲学館の開館を予告した記事や広告で、創立寄付金に触れたものはない。仮に、円了の知人に寄付を直接お願いできたとしても、二八〇名となれば、さすがに知人だけの範囲を超えている。

このように、円了が二八〇名からどのように寄付金を集めたのか、長らく明らかではなかった。だが、最近になって、寄付金募集に関する重要な資料が発見された。その資料は、井上円了記念博物館の北田建二学芸員が、インターネット上の古書通販サイトから探し当てて入手したもので、いまごろになって、およそ一三〇年前に雑誌の付録として作成されたB4判の印刷紙片が破損もなく、ほぼ当時のままの状態で出てきたのには驚くほかほかだった。

資料をみると、「哲学館開設の旨趣」「賛同者」「哲学館規則」「学科表」が大きく印刷されているが、肝心の「寄付者」については、欄外に「本館設立の旨趣を賛成して、金員又

は物品を寄付せられたる諸君は、本館創立員となし、永くその恩名を本館と共に存し、他日その親戚の来館ある節は特別の優待をなすべし」とある。当時の「金のことを公然と語る者は、人間が汚い」と言われた時代に、クラウドファンディング方式で広く呼び掛けて寄付金を集めるといふのは大変勇気のいることで、自分の教育理念に深い確信がなければできないことであった。

たとえば、同志社の新島襄も大学設立を期して、募金活動を展開していたことが新聞に紹介されている。新島は一八九〇（明治三三）年一月、募金に歩いている最中の四八歳で病死した。新聞によれば、このときの後援者と寄付金額が公表されているが、政界や実業界からの寄付が多く、例えば大隈重信から一〇〇〇円、実業家の渋沢栄一から六〇〇〇円、三菱会社社長の岩崎弥之助から五〇〇〇円など、一人で三万一〇〇〇円が集まっている。

円了の場合、「はじめ哲学館を創立したときには、もとより無資本で、またほかから扶助保護を受けることもなく、すべて有志の寄付によって創立費をまかないました。当時本館の旨趣に賛成して多少の寄付をしてくれた人は二百八十人ありました。したがって、哲

学館は二百八十人で設立したものと行ってよいわけです。」と言う。

これが円了の経営哲学である。「ほかから扶助保護を受けない」とは、教団などの組織や政財界の有力者に頼らないことを意味する。当時の円了は二九歳と若かったが、東京大学出の超エリートであり、すでに著名になっていたから、政界・官界・財界などの有力者に依頼して、多額の寄付金を集めることはできたはずである。しかし、「俺はよそから月給をもらわないで、ひとつ人間一生で、どのくらいの事業ができるか試してみよう。」ということ立志とした人間であるから、「ほかから扶助保護を受けない」で、自分の力で事業を興そうというのは、円了なりに一貫した哲学であった。

一八八七（明治二〇）年の円了は、一月に哲学を普及するために「哲学書院」という出版社を設立し、二月にベストセラーの『仏教活論序論』などを刊行した。さらに、六月から「哲学館開設の旨趣」を出して学校開設を進め、九月に哲学館の開館式を挙行した。どれほど多忙であったのか、推測できない。念願の哲学館はこのようにして創立されたが、開館後の一〇月に多量の咯血をしていることから、健康状態は決して良くなかった。それでも前に進んだ。

この略血のとき、ある人がこれを慰めたところ、円了は平然として、「溜まったものが出たのであるからご心配はご無用です。無いものが出たらそれこそ心配である。」と、大笑いしていたという。逆境にあつてもユーモアを忘れない、そういう人間であつた。

「円了の哲学」

円了の生涯を決定づけたのは、西洋の「哲学 (philosophy)」との出会いであつた。円了は哲学をどのように考えたのか、このことを理解するには、古代ギリシヤ人の「ものの方・考え方」から説明するとわかりやすい。それはつぎの四つに分けられていた。

一 ドクサ (doxa) ……思い込みとか偏見、常識など。一般に「知っている」ことをいう。

二 エピステーメ (episteme) ……分析してわかる (分ける)。科学的知識、簡単にいえば「知識」。ラテン語のスキエンチア (scientia)、つまり英語のサイエンス (science)、「科学」である。

三 ソフィア (sophia) ……「知識」に対する「知恵」で、総合的な知識をいう。ラテン語でサピエンチア (sapientia)。「人類」の学名である「ホモ・サピエンス」(知恵のある人間)

のサピエンスの語源である。

四 ノース (snow) ……直感。言葉では説明できない、神的、神秘的なものをいう。

ヒロソフィー（知恵を愛求する＝哲学）は、古代ギリシャが発祥の地である。ドクサ、エピステーメー、ソフィア、ノースという「ものの見方」は、現代にも通じるものである。「円了の哲学」をこのような古代ギリシャ人の見方で説明すれば、つぎのようになる。まず、明治初期の偏見や思い込み、つまりドクサを取り除いて真実を知る。つぎに、徹底的に分析をする。とことん「分けて」考えたのである。

円了はこれを西洋の実証的な学問から学んだ。これがサイエンスである。そのうえで、分けたもの（知識）がどのような連関のうちにあるのか、その全体的な理解を、円了は「哲学」と名づけた。エピステーメーとソフィア、スキエンチアとサピエンチア、つまり知識と知恵、科学と哲学。そして、さらにこれら両者を統合すること、円了はこれを目指したのである。

ソクラテス、プラトン、アリストテレスといえば、古代ギリシャの哲人たちであるが、紀元前四世紀代に活躍したアリストテレスは、多くの学問を残した哲学者として知られて

いる。

彼の業績は、学問の方法論である論理学、自然学、宇宙論、倫理学、政治学など多数に及んでいる。当時の自然学、人文学、社会科学を網羅している。このアリストテレスの学問を、紀元後三〇年に整理したのがアンドロニコスである。

アンドロニコスは、アリストテレスの著作を整理したとき、宇宙・社会・自然などすべての現象、つまり「自然の探究」を終えた「あと」（メタ）、「自然を超えた」（メタ）、そういうものがあると考えた。アリストテレスが「第一哲学」と名づけたものであるが、ものごとの根本を探る学問を「タ・メタ・タ・フィジカ」と呼んだ。現在、「Metaphysics メタフィジックス」＝形而上学けいじじょうがくと呼ばれる学問である。形而上とは、形のないもの、道理を意味する。われわれがものごとを知るのは、感覚、知覚、経験、分析してから、さらに原理・原因を探る。つまり、現象から本質への道をたどることをいう。

哲学者の柴田隆行は、円了が創立した東洋大学に、今でも建学の精神として伝えられている「諸学の基礎は哲学にあり」という言葉について、それはアリストテレスの学問方法論に基づき、哲学の常道をあらわしているとして、さらにこう語っている。

「『諸学の基礎は哲学にあり』を平たく言い換えると、『どんな学問でも、そのおおもとにあるのは、知りたいという気持ちだ』ということになります。知ったかぶりをせず、なにごとに対しても謙虚に『知りたい』と願ひ、探求してもしも真理が得られるならば、私たちはいろいろな束縛から自由になるでしょう。円了は最初期の著作『仏教活論序論』で、『余（私）が愛するところのものは真理にして、余（私）がにくむところのものは非真理なり』といい、また、『人だれか学んで真理を愛せざるものあらんや』といい、『護国愛理』を唱えたのも、まさに『真理がわれらを自由にする』からであり、そのために、『知りたい』という気持ちつまり哲学を、人間にとつてもつとも大切なものと考えたのです。哲学は結論ではなく、出発点だからです。』。

円了は世界の哲学者の中から、四人の聖人を選んでゐる。東洋からは釈迦と孔子、西洋からはソクラテスとカントである。これを「四聖」と呼んで祭つた。西洋と東洋という世界的な視点から選んでゐることを考えると、円了は現代のようなグローバルな感覚の持ち主であつたといえる。

また、哲学者の柴田は、このようにも述べてゐる。

「知りたいということは知らないことの自覚が前提とされる。だから、哲学は驚きとにも始まったと言われる。」

井上円了が西洋哲学から学んだことは、この驚きを筋道立てて解明する精神と手法だと私は思う。井上円了は『哲学史講義録緒言』の中で哲学の効用を説き、それを、一 思想を精密にする、二 情操を高尚にする、三 想像力を高める、四 志望を遠大にする、五 精神を安定する、の五つにまとめている。これだけだといかにも素人向けの一般論のように見えるが、この素朴な一般論を堅持しつつ、生涯かけてそれをそのまま実現しようとした点に彼の独自性があるとと言える。」

驚きは、「なぜ」という疑いにつながる。円了が哲学によって得たこれらの力を結実したのが、大著『妖怪学講義』などであろう。

一年間の世界旅行

明治時代には、政府でも民間でも、西洋先進諸国の知見・知識を学ぶための視察外遊が盛んに行われていた。私立学校の創立者にも外遊や留学の経験を持つ人は少なくない。慶

応義塾の福沢諭吉はアメリカとヨーロッパ、同志社の新島襄はアメリカ、早稲田の小野梓は中国とイギリス、明治の岸本辰雄はフランスと、それぞれの国で学んでいたが、円了の場合は、一年をかけて世界を一周するという大規模な視察旅行であった。

哲学館を創立し、館内員（通学生）と館外員（通信教育生）を合わせて二〇〇〇名という全国的な教育体制を創ることに成功した円了は、それから八か月後、「突然」として世界旅行に出発する。留守中の哲学館を倫理学講師の棚橋一郎に託し、一八八八（明治二一）年六月九日、イギリスのゲーリック号に横浜から乗船した。このとき、三〇歳であった。現代では日本からアメリカへ一〇時間余りで行けるが、当時はまさに太平洋を横断するので、大波で船体が揺れて食事もとれない日もあった。合わせて一四日かけて、アメリカのサンフランシスコに到着した。

そして、開業から二〇年目を迎えた大陸横断鉄道に乗って、アメリカ大陸を横切った。そのときの感想は、「アメリカの駉々しんしんとして隆盛に赴く所以ゆえんのもの（速いスピードで発展している理由）はこの山川の形勢あるによる……アメリカ人の計画するところのもの、みな広大にして百事百物一として大ならざるはなし」、つまり、アメリカ大陸の広大なる山河の形

勢が人々の思想を「大」にしているのであるという。見る物、聞くもの、食べ物など、その違いを考えながら、円了は旅をしていたようである。ニューヨークに一週間滞在し、大西洋を渡った。

当時、ニューヨークとイギリスのリバプールの定期船が運航されていた。リバプールからロンドンへ汽車で到着したとき、東大時代の師で一八八四（明治一七）年から留学していた井上哲次郎が待っていた。さっそく、British Museum（大英博物館）、South Kensington Museum（現ビクトリア&アルバート博物館）を見学した。ある日、地下鉄に乗ろうとして駅の入りを探したが、わからないので歩いている人に、「Where is the station?」と聞いたところ、「Here」って言われて、円了は苦笑いせざるをえなかったという。それから二か月間、スコットランドやイギリス南部を回った。この間に、オックスフォード大学では、ヨーロッパで初めて仏教学・宗教学の研究を確立したサンスクリット学者のマックス・ミュラーに会い、ケンブリッジ大学では、カワー（インド学者）、ウェード（中国研究者）、シーレー（歴史学者）といった人々と東洋哲学について話し合った。また、アジア協会でインド哲学の現況を尋ねたりした。

一二月下旬に、ロンドンからパリに渡った。パリにはちょうど西本願寺僧侶・藤島了穩が、哲学研究のために留学していた。藤島はフランス語で義浄の『南海寄帰内法伝』を訳して、仏教哲学を欧米の学者に紹介した人物である。井上円了は藤島の隣に宿をとり、日本に哲学を普及させることや、帰国後の哲学館の事業について語り合ったという。

パリからローマ、ウィーンを経て、ベルリンへ行った。このころ、前述の哲次郎はベルリン大学で哲学を研究しながら、付属の東洋学校で教員をしていた。藤島もベルリンにやってくるまで、三人は今後の哲学普及の方法を語り合い、またニコラス・ハルトマンという哲学者を訪ねて、著作の翻訳権の了承を得ている。その後、ベルギーを経てパリに戻り、世界万国博覧会を見学した。一八八九年のパリ万博といえ、エッフェル塔が建設されたことまで有名である。

帰路は、マルセイユから船に乗り、エジプト、アラビア、スリランカ、ベトナム、中国を経由して、一八八九（明治三二）年六月二八日、横浜に到着した。出発から一年余りが経過していた。

一年間の世界旅行とはどれほどの旅費・宿泊費などがかったのか、筆者は調査研究し

てきたが、いまだにわからない。文部省の留学規定の中に、往復の旅費について、「アメリカは金貨四五〇円、欧州各国は六二五円」と書いている。円了の場合、アメリカとヨーロッパの交通費になるが、五三八円である。金貨一円は、明治の前期と後期では価値が異なり、現代の金額に推定するのはむずかしいが、かなりの旅費が必要だったはずである。

「日本主義」と「宇宙主義」の大学

世界を一周してきたその結論について、円了は元大リーガのイチローと同じことを語っている。イチローは、「SNSの現代は瞬時に世界各地の情報が手に入るが、世界を知るにはその地で『体感』することが大切である。」と述べている。円了も「欧米各国のことは、日本に安座して想像するのとは大いに差異なるものである。」と、「体感」の必要性を語っている。それは、どんな小国でも、人民はみな「独立の精神」を持っているということであった。つまり、アメリカにはアメリカ風の、イギリスにはイギリス風の固有なものがあるということである。

一八八九（明治三二年）七月、帰国した円了は、まず「哲学館改良の目的に関して意見」

を発表した。その内容は三つに分かれていた。

第一は、欧米各国では、その国で発達した学問・芸術（たとえば言語学、文章学、歴史学、宗教学など）が盛んに講究されていて、一国の独立にはその国固有の学問の発達が不可欠であること。

第二は、西洋の諸国では、その国の学問・芸術を研究するほかに、東洋学の研究も盛んに行われていて、日本でそれらの学問を興す^{おこ}必要があること。

第三は、欧米各国の指導者の教育法は、日本のように学力のみに重点がおかれているのではなく、たとえばイギリスなどのジェントルマンのように、人間の人物・人品・人徳もあわせて養成していて、日本の教育に欠けているこの点を改良すべきであること。

円了はこの見解を發展させて、八月に「哲学館将来の目的」を発表した。その中で、哲学館を将来において大学へと發展させる、つぎのような計画を明らかにした。

哲学館が目指した大学を「日本主義の大学」という。それらは日本固有の学（神道・儒教・仏教、および哲学・歴史・文学）を講究する大学で、日本の学問を基本とし、これを助けるのに西洋諸学を用いて、「日本国の独立、日本人の独立、日本学の独立」を目的とする、つまり、

日本人としての主体性をもって生きることを意図している。当時は欧化主義という西洋の移入・模倣が万能であったが、「日本には日本の良さがあり、それを活かそう」という考え方であった。すでに述べた、「明治の第二世代」に共通する問題意識であった。

この目的をめざして、哲学館の教育は、表には「日本主義」、裏には「宇宙主義」を掲げあわせて教育の基本とする。「日本主義」とは、日本独立の精神的基礎を形成するもの、「宇宙主義」とは、普遍的な真理を追求するもので、これを一体化したところに、円了の独自の理念がある。そして、知力と人格を兼ね備えた「教育家」「宗教家」「哲學家」を養成し、学問を実践・応用して「国民全体の精神（心）の改良」に取り組み、日本を文明社会へと進展させる。

円了は、このような哲学館の将来構想をまとめながら、帰国直後に校舎の新築を決断し、八月一日から建設に着工した。三二歳のときである。新校舎の場所は本郷区駒込蓬萊町二八番地（借地、現文京区向丘）で、そこに講堂（教室）一棟、寄宿舎一棟、ならびに館主の自宅も新築することにした。

当時の私立学校では、維持金（運営にかかる資金）は入学金と授業料だけで、新しい校舎な

どを新築するときは、寄付をお願いしなければならなかった。円了は「哲学館将来の目的」を発表して、有志からの寄付を募った。そのときに出会った一人が、幕末・明治に政治家として活躍した勝海舟であった。実は、円了と敬が結婚したときの仲人が、大蔵官僚で法律家の目賀田種太郎と、海舟の三女逸の夫妻という縁があった。海舟との出会いはこう伝えられている。

「円了氏が欧米視察を終えて帰り、東洋学の振興を計ろうと思って、その趣意書を知名人に配付した。もちろん勝海舟氏の許もとにも送った。海舟氏はこれを読んで青二才未熟ものがと云って打棄うちやって（捨てて）しまった。このときあたかもその席にあった目賀田氏が、円了氏の人物を大いに賞賛し『一度』と言ったので、海舟氏もその気になって『一度会ってみよう』と、目賀田氏にその意を告げたので、目賀田氏は円了氏に之を伝えた。早速円了氏は赤坂氷川邸の海舟氏を訪ね、自分の抱懐している（心に抱えていること）意見を述べた……海舟氏は円了氏の話しを聞き終わって『それは面白い、十分遣やるが好い、然しそれには資金を集める必要がある』と、『幕府が倒れたのも金がなかったからだ。お前も金を集めろ』とこう言った。別れたあとで、『あんなに若い人だったか』と感心していた。」

当時、海舟は六七歳、円了は三三歳であった。海舟もチャレンジャーとしての人生を歩んできたから、三五歳の年の差を超えて、お互いに響き合うものがあったのであろう。

「新校舎の建設と「風災」

海舟との出会いから一週間後の九月一日に、全国で多数の死者を出すほどの大型台風が襲来し、完成目前の校舎は倒壊してしまった。このとき円了は、仏教公認運動のため京都の仏教教団を歴訪して遊説していたが、電報で知らせを受け、すぐに東京へ向かった。途中、東海道線が不通となっていたので、四日市から横浜まで船を使って東京へ着いた。円了は「前に進むか、退くのか」、決断を迫られた。円了はこの災難を「風災」と呼んだ。学校の授業開始の手配などをして、そして、九日後の二〇日から二度目の建築にとりかかった。再建のことを聞いた海舟は、一週間後に円了を私邸に呼んだ。

海舟は、円了に対して、哲学館の事業を達成するには「精神一統何事か成らざらん（精神を集中して事に当たれば、いかなる難事でも為し遂げられないことはない）」と、懇々と説いたという。幕末の動乱のとき、海舟は「誠の心」に徹して、政治的混乱から日本を救った人物であっ

た。その経験からの貴重なアドバイスを円了は受けた。そして海舟は、「これはホンの寸志(自分の気持ち)までじゃ」と言っ、紙包みを渡した。海舟の私邸をあとにした円了は、外に出てからその包みを開けて、「一〇〇円」という当時の大金が入っていたので、驚くとともに、海舟の飾らない励ましを自らの心に刻んだという。

一〇月三十一日、難航した哲学館の新校舎が完成し、麟祥院から蓬莱町(現文京区向丘)への移転式が行われた。海舟はその移転式の二日前に、知恵を象徴する「文殊菩薩の木像」(現在も東洋大学に保管されている)と、ご祝儀としてさらに一五円を寄付してくれた。海舟はこうした心遣いをさりげなくできる人間であった。

翌日から新校舎での授業が始まった。この思いがけない事故により、費用は予定以上にかかり、落成時には大きな負債が残った。校舎は二階建てで、教室は、一階に一五〇人収容のものが、二階に五〇人収容のものがあった。また、校舎とは別に寄宿舎も建てて、こちらも二階建てで、七畳二〇室で四〇人以上が入れるようになっていた。

この校舎は哲学館の所有であったが、ちょうど棚橋一郎が郁文館(現在の郁文館高校)を創立したため、哲学館の授業のない午前中は、郁文館に貸与していた。郁文館は中等教育の

場であったが、哲学館の学生にも英語の授業を受けさせていた。また、円了は郁文館の顧問に就任している（この時期に、父・円悟から慈光寺の住職として高齢化しているために、住職を引き継ぐようにとの手紙が来ていた。それに対して、一八八九（明治二二）年八月、円了は日本の現状と仏教の危機との関係を詳しく説明し、すぐに寺には帰れないという手紙を父に送っている。結局、円了は住職を継がず、父の逝去後に弟の円成が住職となった）。

哲学館の教育理念

麟祥院から蓬萊町の校舎への移転式は、一八八九（明治二二）年一月一三日に行われた。来賓は元老院議官の加藤弘之、文部大臣の榎本武揚、東京府（現在の東京都）知事の高崎五六をはじめ、博士、学士、各宗の高僧など合わせて一〇〇名、それに学生が参列した。

円了はこの日の演説で、まずこれまでの哲学館の開館旨趣を紹介したあと、外遊の結論から導き出した哲学館改良について、四項目をあげた。

- 第一 わが国旧来の諸学を基本として学科を組織すること。
- 第二 東洋学と西洋学の両方を比較して日本独自の学風を振起すること。

第三 知徳兼全の人を養成すること。

第四 世の宗教者、教育者を一変して、言行一致、名実相応の人となすこと。

さらに、「他日一箇の専門学校を開き、国家独立の大機関ともいふべき歴史科・言語科・宗教科を分かち日本大学ともいふべきものを組織し、学問の独立と共に国家の独立を期す。」と述べて、哲学館を国家の独立を維持するために必要な言語・歴史・宗教を研究する「日本主義の大学」にする決意を明らかにした。哲学館創立からまだ三年目のときに大学の設立の目的を掲げたのは、オックスフォード大学、パリ大学などの世界の大学の起源を実際に見てきたからであろう。

ここでいう「日本大学」「日本主義の大学」とは、組織や学科から教師やテキストまでを西洋にならった「西洋の大学」に対する表現であって、西洋に学ばないということではない。基本にあるのは日本固有のものの改良という考えであって、そのためには西洋の学問の良い点は活用しようという考えがあった。彼はまた、この「哲学館の改良」の方針を、雑誌や新聞に発表した。

ところで、哲学館の移転式の演説で、円了は「知徳兼全の人を養成する」ことに触れて

いた。また「哲学館の改良」の中でも、知育がいかに進歩しても徳育（人格の養成）も平行しなければ効果がないと言っている。つまり、知識教育だけでなく、人間性を高めるような教育をしなければならないという考えであった。両者が一体となって、初めて知性的人間となるからである。しかし、人間性を育てることは、知識を教育するようなわけにはいかない。あくまでも本人が自分のために自覚し、実行することが重要である、そのため、「自由開発主義を重んじる」というのが円了の方針であった。このような人間性の育成を重視し、その具体的な方法として「寄宿舎」をつくった。

円了は、学生時代は社会的な拘束のない自由な時期であり、貴賤貧富にかかわらず、どのような人とも交われる時期でもあるので、「人間一生の春」だと考えた。学生が自由を求めて行動することに対して、学校ではさまざまな規則を設けて、学生を束縛することが一般的である。しかし、哲学館ではこのような方針をとらず、そのため、寄宿舎でも細かい規則の網を設けず、寛大なる人間性の育成をもって対応することとした。行為に関する善悪の判断は、学生個人の道徳心と自覚に任された。規則でもって「制裁」を加えることは決してしなかった。

この考えをさらに進めたのが、寄宿舎生を対象とした「茶会」である。茶会は外遊中に見たイギリスの「ティータイム」にヒントを得たもので、ここで彼は学生とともに談笑したり遊んだりして、人間性の育成に役立てようとした。茶会は一八八九（明治三二）年一月一五日から始められ、当初は毎月二回であったが、その後、毎日朝夕二回開かれるようになった。つぎの資料は後年のものであるが、茶会の雰囲気がよくわかる。

「土曜の夜には、寄宿生は一同連れ立って井上先生のお宅に参り、八畳の座敷に円座して、先生からいろいろと修養上のお話を承ったものである。日曜の朝八時には、先生は必ず寄宿舎に來られて、舎生一同としんみりとお話をなされた。先生のおいでになるに先立って、舎生一同が各自の座布団を全部重ねてお待ちしていると、先生はつかつかとその高く重ねた座布団の上に座られ、慈父じふのごとき暖かいお心持ちで、いろいろと学問上、修養上のお話をなされた。この土曜日と日曜日の会合が、舎生一同のもっとも誇りとし、かつ楽しみとするところであった。」

茶会は人間性の育成を目的としていたが、そこには円了の教育の基本的な姿勢がよく表れている。その基本とは「対話」である。円了は決して自分の考えを強制することはなく、

自分の意見を出しても、その是非については、学生個人の自覚と選択に任せた。

対話の姿勢を象徴するような話がある。当時、多くの学校で、学生が講義内容を不満として教師排斥運動を起こしていたが、哲学館でも教育学の講義に対して不満が出て、学生が館主の円了に講義の中止を申し入れた。そこで円了は、自分が学生とともにその講義に出席し、終了後に討論会を開いて、教師と学生の双方の意見を明らかにして、改善策を探ったのである。

また、円了は学生に偏見を持たないようにと指導していた。授業の中で仏教家を例に取り上げて、「すべてのことを仏教で解決できる」という独断的な風潮があることを指摘し、このように他の説はことごとく顧みるに足らないというのは、狭量な偏見にすぎないとして、「事実をもって」広い視野からのものの見方・考え方を学ぶように注意したという。

彼は、新しいことを積極的に学ぶ姿勢も大事にしていた。当時、「進化論」はまだ新しい思想であつたので、盛んに論じられていたが、円了は欧米留学から帰国したばかりの研究者を講師に招いて、自らも学生とともに講義を聴いたりした。

このように教師と学生がともに交わり、教育の場で互いの人間性を尊重し合うことを、

「対話の精神」という。円了は思想錬磨の術として、哲学することを基本とした教育によって、この精神を実現していたのである。

存亡の危機と全国巡講

一八九〇（明治二三）年、哲学館は第一回目の卒業生を送り出した。総数二三名であった。当時ほどの私学でも、入学者は多かったが、卒業生は少数に限られていた。これは、三年間の課程を続けることが困難であったからである。また、この年の一月に、私立で初めて「大学」の名称をつけた慶応義塾大学部が誕生した。

すでに述べたように、当時の制度では帝国大学のみが唯一の大学であったため、慶応義塾の場合は「大学部」と変則的なものになっているが、そこに文学・法学・理財（経済）の三学科を設置した。私学としての新たな歴史の第一歩であった。

円了も九月に、哲学館を文系私立大学へ発展させる具体的な構想を明らかにした。この「哲学館ニ専門科ヲ設クル趣意」によれば、この構想は従来の普通科一年、高等科二年を合わせて三か年の普通科とし、その上に新たに国学科・漢学科・仏（教）学科・洋学科の

四科を二か年の専門科として設置し、計五年間の課程とするものであった。

専門科の四学科にはそれぞれ正科と助科をおき、正科で日本の学問を、助科で西洋の学問を学ぶように計画した。洋学科は、日本固有の一学を修学したうえで、さらに西洋の哲学・文学・史学を専攻する学生のためのものであった。

そして、この構想では、「資金一〇万円」を募集し、寄付金が五万円に達したとき、まず専門科の一科（二か年）を開設し、続いて順次に全科を設置する。また、寄付金が一〇万円以上集まった場合には、各専門科にそれぞれの専攻を別に設けるというものであった。

しかし、この構想を発表したころ、哲学館は大きな危機に陥っていた。原因はあの「風災」であった。もともと哲学館は、宗教教団などの団体や政財界の有力者の支援に頼らず、「無資本」で個人の寄付を基本として設立され、二八〇名の賛成者、七八〇円の寄付金から出発した。

その後、新校舎の建設に踏み切ったが、円了の移転式での演説によれば、新築・倒壊・再建という一連の費用は合わせて四千数百円に達し、この時点までに納入された寄付金はおよそ一五〇〇円であったから、三分の二が負債として残ったことになる。

一八九〇（明治二三）年七月、円了は哲学館の窮状を勝海舟への手紙でこう書いている。

「哲学館も現今のところ、学校の維持法はまったく立っておりません。今秋より資金募集に着手することにしておりますが、その方法についていろいろ愚考しておりますけれども、別に良い手段も思い浮かびません。」

すでに、円了は四月、五月と二度にわたって海舟を訪ねていた。おそらく、この問題をどのように解決すべきか、その相談が行われたものと考えられる。政府の「官尊民卑」（政府や官吏に関連する事業などを尊いとし、一般の民間人や民間の事業などを卑しむこと）の高等教育政策のなかで、その支援を期待できない私学にとって、授業料は運営資金の基本であり、それ以外の大規模な校舎の建設などの施設費は、寄付金に頼る以外に方法がなかった。

この手紙には、慶応義塾や皇典講究所（現国学院大学）などに下された恩賜金のこと記されているが、円了も哲学館への恩賜金の仲介を海舟に依頼した。おそらく、それによって哲学館への社会的な評価を高めて、新聞・雑誌に広告を出して、哲学館への資金を募集しようという計画であったと考えられるが、「それはむずかしい」というのが海舟の返事であった。

九月になって、海舟は円了を赤坂の私邸に呼んだ。海舟は開口一番に「裸になれ」と言った。円了は知恵を使ってこの危機を打開しようとしていたが、海舟はその考え方を完全に否定し、「誠の心」以外に、この危機に当たる方法がないことを懇々と説いた。それは、幕末の混乱する政治的危機を、「誠の心」で突破してきた海舟の哲学でもあった。

そして一〇月一六日に、円了は再び海舟を訪れている。この日のことは『海舟日記』に「井上円了、哲学館寄付の事」と、特にこの日だけ事項が記されているのは、つぎのような計画を、円了が伝えたことを意味していた。

円了の計画とは、全国各地の依頼に応じて学術・教育・宗教に関する講義・演説をするため、一〇月下旬から東海道筋、翌年一月から四国・九州地方、三月から中国地方、五月から北陸筋、七月から奥羽・北海道へと、全国を巡回しようというものである。この講演会のとくに、あわせて哲学館の大学設立のための専門科開設の資金を、広く社会・大衆から募ろうという計画であった。それまでのように有志からの寄付金に頼るのではなく、対象者を国民全体に広げて募金活動を行うことで、資金を得て学校を発展させるという新しい方法に、海舟も賛同した。海舟は円了に対して、寄付者への御礼にと自らの揮毫（書）

を持たせた。この全国一周巡回の計画は、哲学館の『講義録』や機関誌『天則』で発表された。全国に広がる哲学館の館外員の協力を得るためである。

一八九〇（明治三三）年一月二日、円了はこうして哲学館の存亡危機を打開するために、見ず知らずの全国の人々から寄付を集めるといふ、新たなチャレンジの旅に出発した。各地での講演を終えてから、哲学館への支援をお願いした。しかし、この募金活動は、円了の期待に反した結果に終わった。

『哲学館専門科二十四年度報告』に、一八九〇（明治三三）年一月から一八九一（明治二四）年一〇月までの一年間の募金のこと記されている。円了はおよそ二〇〇日をかけて一八
県・二一九の市町村を巡回して、合わせて四四〇回の講演会を行った。そして哲学館では、各地に賛同者を勧誘する委員（募金依頼方）を三〇〇名以上置くなどして、寄付をお願いした。講演時の各地の反応から、募金への期待はふくらんだが、その成果は六七六円四〇銭にとどまった。創立時の新聞・雑誌の広告のみで、最終的に四〇〇名から三千数百円以上が寄せられたことと比べれば、円了の落胆は大きかった。

内容を見ると、予約が約一八九五円あっても、実際に納金された金額は約三分の一にあ

たる六七六円で、未納金が多かったためである。当時はこのような未納が多く、どこか私学でもその対応に困っていた。円了はそういうことを知らなかった。

哲学館の場合、大口の寄付者は、五〇円以上が一名、一〇円以上が三名で、ほとんどが一円や五〇銭であった。円了は「当時自分は、なにぶん大学を出たばかりで、一向に世間の事情を知らぬから、ずいぶんボンヤリしたものであった。」と言っているが、そうした自身を痛感させられ、さきの『哲学館専門科二十四年度報告』の題言に、「全国の有志諸君に泣請する（泣いて頼む）」と書かざるを得ないような結果であった。

海舟は、そうした円了を見守り続けた。『海舟日記』の会談日を調べると、円了は巡講の出発前か、あるいは帰京後に、必ず海舟と会っている。

円了は巡講での体験を、つぎのように語っている。

「誤解の代表的なものは、哲学を禅や仙人の学問と考え、よほどおもしろいことを説く、奇々妙々の学問という考えです。そのため、つぎのようなことがあります。

哲学者っていうのはひげが長く、身は軽く、仙人のような人で、今度、東京よりその大家がきて話をするそうだ、ということ、おもしろいものを見たいという人々が旅館の前

にたくさん集まっていました。ところが、私のように仙人らしくない人物が到着したので、人々の中には、哲学者をいつわるにせ者が井上円了の名前をかたつてきた、と言いふらすこともありました。

またあるところでは、私のことを、鍛冶屋の先生、という人がいました。それは、テツガク、という言葉をも、鉄学、と誤解したからです。

そのほか、哲学はあらゆる学問に通じ、なにひとつわからないことはないものだということからの、いろいろな誤解が生まれ、詩や俳句の添削を請う人、書画骨董の鑑定を頼む人、はなはだしい場合は茶の湯や生け花の品評、人相手相の判断を頼む人もあって、これには閉口しました。」

一八九二（明治二五）年一月二一日、円了は再び全国巡講（巡回講演）へと出発した。このようにして巡講を続ける館主の姿を、当時の学生の一人はこう語っている。

「先生はときどき『口をもって伝えないで、身をもって導く』（新聞や雑誌に広告して寄付を集めず、みずから身体をはって、現地に行ってお願ひする方法のこと）という意味のことを語られた。学校の資金募集のために旅行がちな先生が、日にやけてやや旅やつれのした体を教壇に運ば

れて、極めて飾り気のない旅行談をなさるとき、私たちは旅行談以外の強い感銘を与えられずにはいかなかった。」

円了の大学時代の同級生である内田周平は当時、熊本の学校にいた。熊本県知事の要請を受けた円了は「哲学の効用」について、市内の大劇場に集まった数千人の聴衆に対して、およそ二時間の演説を行った。聴衆を感動させたこの演説について、内田はこう語っている。

「一番感心なのは、原語（外国語）を訳しても、原語そのものを用いることがなかったことです。あれだけはほかの人にはできません。その時分はハイカラがつてよく原語を使つたものですが、彼は原語を使わないし、解釈もなるべく平易に訳してありました。これは演説のときでも変わりがありませんでした。それだけは偉いと思います。自分の腹のなかで消化してしまうのですから。」

巡講の日々

巡講は一度出発すれば二、三か月にわたり、一年三六五日の半数に達するというハード

表4 年別巡講日程日数

年	年齢	巡講日程	日数
1890(明治23)年	32歳	11.2 ~ 12.15	44
1891(明治24)年	33歳	1.31 ~ 4.1 5.11 ~ 6.19 7.17 ~ 9.6	153
1892(明治25)年	34歳	1.21 ~ 3.6 4.5 ~ 4.9 4.20 ~ 6.2 7.19 ~ 9.4 12.21 ~ 12.31	154
1893(明治26)年	35歳	1.1 ~ 2.8	39

なもので、表4のように、一八九〇(明治二三)年は四四日、一八九一(明治二四)年は一五三日、一八九二(明治二五)年は一五四日、一八九三(明治二六)年は三九日と、講演した日数だけで、合わせて三九〇日、一年一か月に及んだ。この間に、三二県の三六市・三区・二三〇町村で講演した(残された県は主に関東・甲信越・北陸である)。結局、この苦勞の多い全国巡講によって、哲学館の存在はより広く庶民層にまで知られ、最終的には三五〇九円九〇銭の寄付金が寄せられ、円了は危機を突破した。

北は北海道から南は九州まで、四年間かけて全国を一周したことによって、円了は多くのことを学んだ。一番目は、哲学館の経営者としての自覚を高めたこと。二番目は、明治維新から文明開化をスローガンに国家・社会の発展を目指して二〇年が過ぎても、各地には江戸時代とあまり違わ

ないところが少なくなかったこと。三番目は、各地で妖怪談を調査するフィールドワークができたことである。

この調査で、人々のものの見方・考え方の根底に「妖怪」などがあり、生活に深く根ざし、人々に恐怖心や脅威を与えていることを、改めて痛感した。

IV
哲学館時代
2

「妖怪博士」

現代で妖怪博士といえは、「水木しげる」と答える人が多い。しかし、明治の時代の妖怪博士として一世を風靡ふうびしたのは、円了である。水木はあるテレビ番組で、「日本で一番妖怪を知っているのは、井上円了博士です。民俗学者の柳田国男さんとは比べものになりません。私は円了さんの『妖怪学講義』などの本を読んで、自分の知らない「妖怪」を学び、それを描くこともあります。」と言っている。

円了が「妖怪」研究に関心を持ったのは、東京大学で心理学を学んだときであった。「日本人の妖怪の十のうち、八、九が心の問題である」と気づいたのであった。その後、大学内に「不思議研究会」を設立し、さらに、雑誌に広告して各地の「妖怪」の事実を集めるなど、研究を継続していた。

円了の妖怪研究の特徴は、「妖怪」「不思議」という捉え方であった。そのため、「不思議庵主人」と自ら称していた。妖怪とは「不思議と異常を兼ね備えたものである」と定義し、哲学館では創立時から「応用心理学」「妖怪学」として正式に授業で取り上げていた。

円了は一八八七（明治二〇）年五月に、『妖怪玄談 第一集 狐狗狸こっくりにの事』を出版した。当時、西洋から移入された「テーブル・ターニング」が日本式に改良されて一大流行になっていて、人々はこれを「こっくりに様」と呼んでいた（二つとも霊を呼んで占うもので、現在のインターネットで、当時のやり方を見ることが出来る）。円了はその解明に取り組み、文献や情報、それに実験を行って、「こっくりに様」の正体は、狐・天狗・狸の霊ではなく、「人間の心と身体にあること」を解き明かした。それから円了は、不思議な現象を取り上げる、変わり者の「妖怪研究者」として有名になっていった。

一八九三（明治二六）年一月、円了は十数年にわたる、研究成果を体系化し、「妖怪学講義」として講じた内容を『哲学館講義録』（第七学年度）にまとめて発行した。この講義録の元となった妖怪関係の資料は、つぎのようなものであった。

- 第一、全国の有志より寄せられた各地の妖怪の報告（四六二件）。
- 第二、実地について研究した、コックリの件、催眠術の件、魔法の件、白狐の件等（数十件）。

第三、北海道から九州までの全国各地で実地に見聞したもの（三二道府県）。

第四、数年間にわたり古今の妖怪についての文献を調査したもの（五〇〇部）。

以上のものを資料として、円了は学問としての「妖怪学」を独創した。例えば、第四の文献については、山内瑛一「妖怪学参考図書解題」（『井上円了選集』第二巻所収）によれば、円了が直接ないし間接的に、参考にしたり引用したものは、古典籍類のほか、明治期の雑誌・新聞などを加えると、その数は一六四〇件余りに達している。

これらの膨大な資料を、円了はどのように整理し、講義録として記述したのだろうか。当時の作成過程を物語る文章はほとんどないが、円了の口述筆記者の一人である田中治六（哲学館の卒業生）は、『妖怪学講義』の「第五 心理学部門」を担当し、その實際をこう語っている。

「先生は学者として構想統合の才能に富んでいたことは顕著な特色でした。先生の記憶力も強大なもので（何かの秘術を用いられたのでしょうか）、われわれのもっとも難しいとする人名・地名などを驚くほどまでよく覚えておられました。しかし、先生は、あるいは博覧強記（広く古今・東西の書物を見て、物事をよく覚えている）の人のように、ただ種々雑多の事項をよく記憶しているようなものに止まることなく、これらの材料を統合・案配して新形式を構成する

こと、または独創新奇の思想を造出することは、もつとも得意とするところでした。……

私は『妖怪学講義』のお手伝いをしたときに、とくに先生の構想力の偉大なることを感じました。この講義は哲学、宗教、道徳、天文、理科等の諸部門に分かれ、各門がまたいくぶんかの章節に区分せられており、二か年にわたって発行せられた非常に大きな著述です。しかし、先生は第一に多年にわたり収集せられた山なす材料を整理して、各部門各章節にそれぞれ案配して、この材料は何部門の何章何節にといちいち記入しておく、さて後に各部門の首章（始め）より次第に口授して、これをわれわれ門下生に筆写させて、その適所にそれぞれの材料を挿入すること、整然として一糸乱れざるものでした。そればかりではなく、講義録の頁（ページ）数も、一定の制限内にして、ほぼ多からず少なくないように加減され、このような著述に終始したのは、一つには先生の多年著述の経験によるものとはいえ、また先生の構想統合の偉力によらなければならぬと、大変に感嘆しました。」

田中治六の話を現代流に要約すれば、「新しいものをつくりだすクリエイティブイ（創造力）とともに、インプット（膨大な情報を収集し記憶する）とアウトプット（整然とまとめ伝える）の能力にも優れていた」ことになる。

仏教学者の田村晃祐は、「円了は抜群の記憶力の持ち主であった」と言っている。膨大な資料をまず四冊の和綴じのメモ帳に筆記し、さらにこれに記号をつけて整理したのである。このメモ帳の実物は現在も東洋大学にある。これを見ながら、田中の言うように、記憶を再現して口述筆記をして、二四七〇ページの『妖怪学講義』を完成させた。この資料を整理し構想したときに、円了は思索に没頭してつぎのような行動をとったという。

「先生は注意凝集の力にとくに優れていましたが、先生がある事項を専心一意に考えておられるときは、そばの喧噪（けんそう）（さわがしいこと）なることも妨害とはならず、また他より先生に話しかける者がいても、一向に聞こえないよう受け答えもせられませんでした。先生の奥様はこの注意凝集の状を見ることに、『また例の考えごとが始まった』と言われました。」

「妖怪学」とは何か

円了は「妖怪とは異常、変態にして、しかも道理で理解できない、いわゆる不思議に属するものにして、これを約言すれば、不思議と異常を兼ねるものである」と定義している。そして、妖怪は人と世によって異なるもので、妖怪の有無は物ではなく人にあり、妖怪の

標準というものは、人の知識や思想であると指摘している。したがって、「妖怪のそのもの」のなんたるを究めてこれに説明を与えるは、すなわち妖怪学の目的」であるという。

その説明を与える理論を、円了は哲学を中心とし、これに心理学、理学、さらに医学などを加えて、西洋の学問（総合科学）の理論とその応用で構築しようとした。この妖怪学の目的は、円了の理念である「護国愛理」^{ここくあいり}であり、真理を愛する愛理の精神に基づき、妖怪の原理をきわめて、これを実際に応用して世間の人々の「迷いや苦しみ」をいやし、世の教えの改良をはかることは、国家を護り発展させることにはかならないと主張した。

当時の学者や知識のある一部の人は、「妖怪を恐れるのは、愚民たちである」として、「卑賤（身分が卑しくや貧しい）者たちの問題だからと取り挙げなかった。しかし円了は、「文明が進んでいるのに、かえって妖怪はその勢力を拡大しようとしているし、社会的に多方面に影響する大問題である」と捉えていた。民衆の心に知識の電灯を灯すことによって、これを解決しようとした。妖怪学で円了が特に重視した分野は、教育と宗教であった。民衆の「心の雑草」を除去する「妖怪学は宗教に入る門路であり、教育を進める前駆である」と位置づけている。

円了は『妖怪学講義』の中で、人間と妖怪との関係を歴史的に捉えている。その見方は、つぎのように区分されている。

第一時期 感覚時代（知力の下級）

第二時期 想像時代

第三時期 推理時代（知力の高等）

円了はこのように歴史的に区分して、つぎのように述べている。

「妖怪学は人類のはじめから存在したものではなかった。その理由は、太古の時代は人が物や心がなんであるかを知らず、万物を見てこれを怪しむ理由がわからなかったからである。『無思無想』の時代であった。

第一時期の感覚時代になって、人間は妖怪を初めて意識するようになった。人の知識がようやく進んで、物心や内外の別を知り、結果を見て原因を探り、原因を知って結果を求めるところになったからである。ここから、妖怪学は始まったのである。万物のすべては妖怪にして、日月も妖怪、星辰（太陽・月・星）も妖怪、雨風や山川も妖怪とみたのである。そのため、その原因を究め解釈を与えようとした。その解釈ができないときは、不安を覚

えるようになった。ここから『百科諸学が世に起こる』のであった。

万物の解釈を与えるときに、人間の感覚によって見聞して得られるもの、『形質上』のもののみによって説明する時代であった。しかしこの時代の解釈は、現在よりみれば『迷見』や『妄想』のみであった。いわゆる学説ということとはできないが、これらは妖怪学の起源である。

第二時期の想像時代は、人知が進んで、實際上、『有形質』のみにて解釈できないものがあることを知り、自然に『無形質』を想像するに至ったのである。想像作用が進むに及んで、『有形質の影像』がさらに変化して『無形質に近づき』、ついには感覚以上、経験以外に無形世界を『想立』するようになった。こうして、第一時期にあつては雨風や山川のそれぞれに霊ありとして『有形的の多神』を信じていたが、その想像がようやく無形にうつって、多神を無形的に考えるようになった。そしてさらに、多神の上に一神があると想定するに至ったのである。

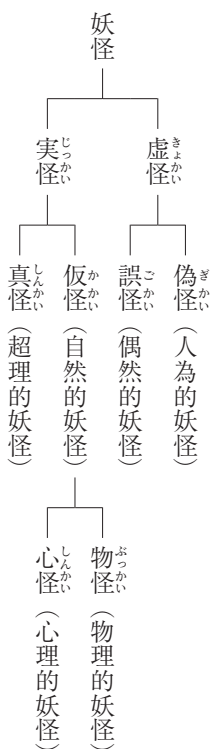
この一神の体が物心二者を支配し、一切の現象の変化はみなその想像または媒介によるものと考えられるようになった。したがって、この時代にあつては、妖怪の説明はみな神力の

『干涉媒介』や『天啓感通（天の神が真理を人間に示す）』によるものと考えられた。しかし、この説明は想像によるもので、いまだ論理思想の作用がない時代であった。

第三時期の推理時代は、人知が大いに発達し、虚構や想像を交えずに確実な推理によって、卑近から高遠まで及ぼし、有形から無形まで及ぼし、感覚以内から感覚以外まで及ぼすもので、今日の学術時代の解釈である。これは宇宙万物の法則をもとし、精密かつ確実なる『論理』によってさまざま現象を説明するものであるから、妖怪の解釈も大きく変化せざるを得なくなった。」

円了は、「私の妖怪学はこの第三時期の解釈法によって説明するものである」と言う。その説明にも、第一に理外的または神秘的説明法、第二に唯心的または理想的説明法、第三に經驗的または自然的説明法があり、この三種類の説明法を、第三時期の真面目しんめんぼくとしている。

このように円了は、人間と妖怪の関係を歴史的に捉えている。そして、このような理論の結論として、円了は妖怪の分類を、つぎのように示している。



この分類を簡単に説明すると、「偽怪」とは、人を恐怖におとしめようとするため、作為的につくられた偽りの妖怪で、個人的なもの和社会的なものの二種類がある。「誤怪」とは、偶然に起こった出来事が、誤って妖怪と認められたものである。これには外界と内界の二種類があり、それぞれ「客観的妖怪」と「主観的妖怪」という。この「偽怪」と「誤怪」は「虚怪」であり、真の妖怪とはいえないものである。人の虚構と誤謬から生まれたものなのである。

この「虚怪」に対するものが「実怪」である。その第一は「仮怪」である。「仮怪」は人為にあらず、偶然にあらず、自然に起これるものであり、これに物の上に現象するもの

と、心の上に現象するものがある。そのため、一方を「物怪（物理的妖怪）」、他方を「心怪（心理的妖怪）」に区分している。さらに「実怪」には、「仮怪」のほかに「真怪」がある。「真怪」とは、真正の妖怪である。円了によれば、「仮怪」は有限かつ相対的で可知であるのに対して、「真怪」は「絶対無限の体」を名付けていうものである。

「実怪」の中で、「仮怪」は、これを講究してその原理に達すれば、普通一般の規則と同一の道理に基づくものといえることができる。今日の人知では妖怪とみられるものも、将来の人知によってその理の解明が期待されるものである。これに対して「真怪」は、「いかに人知が進歩するとも到底知ることができないものであり、これは超理的妖怪である」。すなわち、「不可知的不可思議」なものである。

円了の研究によれば、「妖怪の七割は中国を起源とするもので、残りの三割のうち、インドから二割、日本固有は一割であり、また妖怪の分類でいえば、『偽怪』が五割、『誤怪』が三割、『仮怪』は二割」と述べている。

円了の哲学と妖怪学の関係を、哲学者の柴田隆行はつぎのように語っている。

「井上円了の哲学は、学術的にはともかくとして、また本人の意図も括弧かっこに括くって、一

般人の理解として見れば、妖怪学という一言に尽きるのではないだろうか。明治期にはさまざまな妖怪が存在すると信じられてきたが、井上円了はそれを科学的に解明しようとした。『科学的に』ということは、妖怪などは迷信にすぎないとして紋切り型でそれを切り捨てるのではなく、筋道を立ててその存在に、あるいはその存在を信じる自分の心に、分析を加え、その由来を明らかにすることを意味する。つまり、妖怪の存在を信じて恐れている人たちが、あくまでも自分自身で納得して、自分の力でそれにメスを入れることができるようにすることが、妖怪学の目標である。」

円了の「妖怪学」への評価はどのようなものであったか。たとえば、一八九七（明治三〇）年二月に文部大臣から、「本書、材料の収集に富み、論説援据えんきよ（事物の是非を論じ説明し、書物・事実などをひいてきて、証拠として示す）することにくわしきはもちろん、ことに現在も民間においてなお迷信が流行し、あちこちに普通教育の進歩を妨げる点もあり」「学術上いちいちこれが説明を与えられているのは、大変有益のことと思考し」「このような著述が広く世に公になり行われれば、今後の迷信の旧習を減退する一助となるでしょう」という評価があり、同月二二日に宮内大臣から明治天皇に奉呈され、天皇は『妖怪学講義』を愛読した

と言われている。このように、「妖怪学」は社会的な評価を受けて、さらに円了は民衆から「妖怪博士」「お化け博士」と呼ばれるまでに、社会に普及したのである。

現代では、妖怪は脅威ではなく、「可愛いもの」としてみられ、妖怪文化はサブカルチャーとして、アニメ、映画、小説の主題となつて好評を博している。歴史的にみれば、妖怪文化は江戸時代に絵や文章になつたことをもつて、ある研究者は文化の確立という説明をしているが、それは好事家（もの好きの人）たちの間であり、多くの民衆は生活に根差した妖怪に、恐怖や崇りを感じて、表立って話すこともなかった。こうした社会の裏側にあった妖怪を、学問として堂々と表舞台で論じたのが「妖怪博士・井上円了」である。円了は現代ではゴーストバスター（妖怪退治）の側面のみで語られるが、現代の妖怪文化の舞台をつくるという歴史的役割を果たした画期的人物でもある。

「火災」と新校地への移転

一八九六（明治二九）年一月、円了は哲学館の機関誌『東洋哲学』に、「哲学館東洋大学科ならびに東洋図書館新築費募集広告」を出した。その新築のために、小石川区原町（現

在の東洋大学白山キャンパス)の土地を、一八九五(明治二八)年に三三二〇坪、九六(明治二九)年に四五〇坪、合計三七五〇坪を購入していた。この土地は勝海舟の娘婿・目賀田種太郎夫妻の自宅に隣接していて、土地の選定にあたっては夫妻の助言を得ていた。土地購入の費用は九九〇八円で、それまでの寄付金でまかなえた分は半分であり、五三〇五円が不足した。

円了は哲学館の寄付金規則を改正して、新築費は五〇〇〇円の予定として五年間で積み立て、維持金は五万円ないし一〇万円を予定して一五年間で積み立て、維持金を資本として、その利子を経費に充当することを計画した。

当時、この土地の高台はキジが鳴きながら飛び交うヤブであり、低地は田とも沼ともつかないものであった。この土地を見た学生が「こんなところを買って、どうなさるおつもりですか」と驚いたほどであった。しかし、円了の脳裏には明確な構想ができあがっていて、笑いながら「君たちにはまだわかるまい」と答えていた。

これによって哲学館は、蓬萊町の校舎とは別に新たな校地を用意して、大学設立へと進むことになった。七四歳になった海舟はこの計画に賛成した。能書家(文字を巧みに書く人と

して人気があった」として知られていた海舟は、哲学館への資金募集の先頭に立った。そのことを、海舟の娘の逸いづはこう語っている。

「父が書いたものなどを差し上げると、それを哲学館に寄付などなされた方々へのお札に送っていらしたようで、そんなふうふうに父の書いたものが、井上さんの事業の足しになるならばと、父も一時は『陰ながらの筆奉公ふでほうこう』をいたしたものです。」

海舟の揮毫は寄付者へのお札として用いられ、五円から一〇〇円までという寄付金額によつて書幅の大きさが異なり、郵送方式でも受け付けられた。しかし、当時の海舟は七四歳と高齢であつて、「二八年八月以来臥病ふ（病んで床に臥す）。ほとんど死期の来るごとし。我も世に在るを欲せず。一二月になつて病治り氣力回復」と、健康状態は決して良くはなかつた。

一八九六（明治二九）年三月、円了は、巡講を従来の全国巡回から「一県巡回」の方法に転換して、長野県地方に出発した。このとき、円了は海舟の執事にあてた三月三〇日付けの書簡に、つぎのように書いている。

「信州各郡を巡回し、揮毫を切望する人が多く、すでに一〇〇余円の寄付が集まりまし

たことは有り難く仕合わせなことでございます。持参してまいりました二、三〇枚の揮毫はほとんどなくなりました。過日お願いしていたものと、新たに使いの者に持参させた用紙にも御揮毫をお願い申しあげます。」

海舟の書は渴望されていた。そのため偽書もあり、哲学館の広告に、寄付金の「領収証には伯爵勝海舟翁真筆の証明を付記」しなければならぬほどであった。

一八九六（明治二九）年の円了の巡講は四九日間と少なかったにもかかわらず、海舟の「陰ながらの筆奉公」という支援があつて、この年だけで一三七五円の新築寄付金が集まり、大学設立への展望は現実のものとなつていった。

六月には、論題「仏教哲学系統論」により、帝国大学の審査を経て、円了は文学博士の学位を授与され、盛大な祝賀会が催された。一二月にはようやく漢学専修科設置の旨趣の発表にこぎつけ、大学設立へ向けて一歩前進したが、哲学館はここで思わぬ不幸にまわられた。類焼（よそから燃え移って焼ける）という「火災」によつて、校舎を全焼したのである。

一二月一三日は日曜日であつたが、哲学館の校舎を借りていた郁文館は、大工を頼んで納屋で机や椅子の修理をさせていた。出火元がこの納屋であることから、火災の原因は大

工の吸ったタバコか暖房の火ではないかとみられている。出火は夜一〇時三〇分ごろであった。寄宿舎で熟睡していた学生がたたき起こされたときには、すでにあたりは昼間のように明るくなっていったという。

近くに交番がなかったため、消防への通報は遅れたが、隣の寺田福寿が住職を務める真浄寺で半鐘が打ち鳴らされた。近所の人々が駆けつけたときには、火は納屋を吹き破ったばかりだったので、円了宅の井戸から水を汲んで消火につとめたが、火勢はますます強くなり、とうとう校舎に燃え移った。火はさらに寄宿舎にも移り、学生たちはその前に身の回り品を持ち出してはいたが、ただ呆然と学校が焼け落ちていくのを眺めているしかなかった。およそ一時間後に鎮火したときには、校舎も寄宿舎もすべて灰となり、図書や書類もほとんど失っていた。

この火災に遭って、郁文館館長の棚橋一郎はひどく狼狽ろうばいしていたが、円了は少しも慌てることなくなかった。学生が「思いがけないことで、肝をつぶされたでしょう」と見舞いの言葉を伝えると、円了は自宅の縁側に腰掛けたまま「必要な荷物はほとんど出しましたよ」とだけ答えて、平然としていた。円了は、ふだんから理性的で冷静沈着なタイプだったと

いうが、それを如実に示すエピソードであった。哲学館は二度目の危機に陥っていた。だが、円了はすでに前を向いていたという。

火災の起こったのが一二月も半ばだったことから、すぐに休校措置をとって、新年の授業は寺を借りて仮校舎として始められた。二番目の新校舎の建築は翌一八九七（明治三〇）年四月から始められた。場所もそれまでの蓬萊町から、すでに購入していた「鶏声けいせいが窪くぼ」と通称された小石川区原町の敷地に移転することにした。

円了は大学設立を諦めなかった。漢学専修科を一月に、仏教専修科を四月に開設した。このように前進させたときに、思わぬことがあった。原町の新校舎へ移転した一か月後、宮内省から明治天皇の恩賜金三百円が哲学館に与えられたのである。円了はこの恩賜金の使途について熟慮し、中等教育発展のために、尋常中学校を創設することに決め、一〇月から新校舎建設に着手した。

それが、一八九九（明治三二）年二月に開校した私立京北尋常中学校である。円了は校長となったが、再び新築資金募集の全国巡講を行っている。この中学校が円了の一貫教育・総合学園構想の第一歩となり、一九〇五（明治三八）年には京北幼稚園を創立している。円

了の「ピンチをチャンスにする」積極的な姿勢は、「火災」という事故から、新たな構想で哲学館を發展させることになった。

四月に京北中学校の新学期が始まると、円了は自ら教壇に立って教育を行った。『三太郎の日記』などで知られる、哲学者で文芸評論家の阿部次郎は第一回の卒業生であるが、京北中学校は各界で著名な人材をその後も輩出し、都内の有名私立中学校として發展していった。

このようにして、哲学館が火災から再出發できたのは、勝海舟などからの支援があつたためであるが、一八九九（明治三二）年一月一九日午後、海舟は狭心症を發して倒れ、静かに眠るように死去した。

この年の七月、円了は第二回目の全国巡講に出發した。各地で社会教育としての講演を行ったが、寄付金への御礼として、自ら揮毫するようになったのは、このときからである。こうした円了の活動に対して、ある新聞に「井上円了さんの靴はキフキフと鳴る」と擲諭する（からかう）言葉が載つたこともあつた。これを読んだ円了の娘は憤慨して、「どうしてこんなことを言われなければならないんですか」と父に問いただした。父はこれに対

し、つぎのように語って聞かせた。

「大学なんて個人でできるもんじゃない。寄付で作れば、寄付した人は自分の学校だと思つて愛してくれる。だから寄付をもらっているんだ。」

娘は納得したようで、「新聞で書かれるぐらい憎まれないと、学校なんてできないのよ」と、お手伝いさんに語っていた。円了の家族は、父の行動をよく理解していた。

V
哲学館時代
3

徴兵猶予と教員無試験検定

円了は創立以来一〇年の間に、「風災」「火災」という二つの災難に遭遇したが、哲学館を私立学校から大学へ発展させるといふ目的を堅持して、大きな負債にもめげず、全国巡講をしていた。円了の経営について、哲学館の教員の鼎義かなえぎ暁きょうは「寄付金の集まっただけで、土地をかうなり、建物を新築するなりするといったやり方で、決して借金などをするということとはなかった。全く石橋を叩いて渡るといふ主義だった」と述べている。

私立学校から大学への発展を実現するために、必要なことがあった。

第一は、徴兵猶予である。在学者の徴兵を延ばす許可のことで、学校に必要な認可であった。徴兵猶予の特典については、哲学館は一九〇〇（明治三三）年に取得しているが、それ以前に、早くは一八八九（明治二二）年に東京専門学校（現早稲田大学）、明治法律学校（現明治大学）、専修学校（現専修大学）、和仏法律学校（現法政大学）、日本法律学校（現日本大学）が取得し、慶応義塾（現慶応義塾大学）、同志社（現同志社大学）などがこれに続いて取得していた。

また、一九〇一（明治三四）年に台湾協会学校（現拓殖大学）、国学院（現国学院大学）、一九〇二（明

治三三) 年に関西法律学校(現関西大学)、京都法政学校(現立命館大学)が取得した。

第二は、国家資格の問題であった。文部省の「官高私低」の政策によって、官学(国立)と私学では格差があった。中等教員無試験検定により、教員免許を文部省の検定試験を受けずに、卒業と同時に取得できたのは、官学だけであった。私学は、いわゆる「文験」という文部省の検定試験を受けなければならなかった。

哲学館の学生たちは、この試験に一〇名以上が合格していたので、円了は一八九〇(明治三三)年以来、二回にわたって、文部省に哲学館の中等教員無試験検定の認可申請を行ったが、いずれも認められなかった。しかし、円了は諦めなかった。今度は国学院と東京専門学校と相談し、円了が代表となり、文部省に建議した。

文部省は一八九九(明治三二)年に、私立学校卒業生の教員免許に関する省令を公布し、私立学校にも無試験検定の「特典」を与える方針を示したので、哲学館は国学院と東京専門学校とともに、直ちに願書を提出した。申請は七月一〇日に認可され、その内容は、教育学部倫理科甲種卒業生には修身科または教育科(一月七日追認可)、同漢文科甲種卒業生には漢文科の資格を、無試験で付与するというものであった。そして、教員無試験検定の

資格は、三年後の一九〇二（明治三五）年の卒業生から適用されることになった。現在、私立大学の学生が中学校や高等学校の教員免許を国家試験なしで取得できるようになったのは、円了がこのときにパイオニアとして粘り強く文部省と交渉して勝ち得た成果である。

認可を受けるとすぐに、哲学館の学制は変更された。九月の新学期からは、予科一年、本科三年とし、本科は教育部と哲学部とし、それぞれ二科制として、教育部を倫理科（のち第一科）と漢文科（のち第二科）に分けた。さらに、漢学専修科を漢文科に、仏教専修科を哲学部に併合した。のちに免許の範囲が拡大され、漢文科甲種卒業生に中等学校国語科教員の無試験検定が認可された。

この教員無試験検定は、教育家養成という目的のためばかりではなく、当時の私立学校が発展するために備えなければならぬ条件の一つでもあった。私立学校の主な財源は授業料であったので、なんらかの公的な特典があれば、学生を多く集めることができ、財政は安定する。その特典というのが、さきの徴兵猶予と教員無試験検定であった。

教員無試験検定についてみると、哲学館と同時に東京専門学校と国学院が取得したのをはじめとして、つぎに慶応義塾、日本法律学校が取得した。このように、一九〇〇（明治

三三三年の時点ですでに、哲学館は私立学校発展の必要条件を二つとも備えていたのである。

「哲学館大学部開設予告」

一方、円了自身は、一九〇〇（明治三三）年に文部省から「修身教科書調査委員」を委嘱され、また翌一九〇一（明治三四）年には内閣から「高等教育会議議員」の嘱託を受けるなど、公的な面での活動も盛んになった。

こうして哲学館の発展に必要な条件が整った一九〇二（明治三五）年四月、円了は「哲学館大学部開設予告」を発表した。大学部では、国学（神道）、漢学（儒教、仏学（仏教）のうち、儒教（東洋の倫理学）と仏教（東洋の宗教学）をそれぞれ倫理科と教育科として開設し、入学資格は中学卒業程度の学力を有するもので、修業年限は五年であった。国学がはずされたのは、神道の専門的学校がすでに存在したからである。

「大学部開設予告」の中で、円了は、哲学館の「益友とも先輩とも」いふべき慶応と早稲田の名を挙げて、慶応はすでに大学部を開設し、早稲田も前年から準備にかかっているので、哲学館もその優れた例にならって大学部開設に着手することになったが、これはそ

のような機運が高まったためである、というような趣旨のことを言っている。この時期、私立学校はさらに発展するための条件を整えていて、一九〇二（明治三五）年に、東京専門学校は条件付きで「早稲田大学」となった。

同年一二月の『中央公論』に掲載された「明治三十五年の概観」という記事には、「私立大学の勃興」という項があり、その末尾には、つぎのように書かれていた。

「早稲田のごとき、哲学館のごとき、明治法律学校のごとき、その経歴において、その名声において、優に帝国大学の法科もしくは文科大学と相拮抗して、遜色あるを見ざるもの、いままたさらに歩武を進めて、その基礎をかたくし、その規模をまったくし、もってこれを大学となす、吾人すこぶるこれを歓迎せざるを得ず。けだし、私立大学の勃興は、日本教育の一大転進なればなり。」

このように、私立学校そのものが力を伸ばしていた時期に、中には哲学館などのように、帝国大学に匹敵するほどの実力を備えた学校も現れていたのである。

円了は堅実な経営者であったが、消極的ではなく、積極的であった。教員無試験検定などの認可を得たことを、大学や総合学園への発展のチャンスと考えたのだろう。そのため、

原町の敷地は京北中学校の専用にしようと、新たに大学移転のために用地を探した。それが東京府豊多摩郡野方村大字江古田の和田山（現在の東京都中野区松ヶ丘の哲学堂公園）と通称される、およそ一万五〇〇〇坪の土地である。八月には売買契約を結んで新校地を購入した。新たなチャレンジの第一歩であった。

これに続いて、円了は新たな教育の目的を探るために、一二月から欧米視察を計画した。それについてこう語っている。

「今度の視察は政教視察というのではなく、欧米の私立学校の盛んなる国へ行って、主として私立学校の組織、事務の整理法などを見るつもりでおります。私立学校の維持法については、大いに研究すべきものがあると感じています。目下の急務は社会の生命たる人物養成です。」

このように私立学校がその力を伸ばした時期に、哲学館はトップ・グループの一つとして念願の大学開設を目指していたが、そのときに「哲学館事件」が発生した。

哲学館事件の前史

哲学館事件は「明治の二大思想事件」といわれる。一つは、一八九〇（明治二三）年に第一高等中学校の教員であった内村鑑三の教育勅語に関係する不敬問題であり、もう一つの哲学館事件は、一九〇二（明治三五）年の哲学館の教員である中島徳蔵の試験問題が天皇に對する不敬にあたりと見られた問題である。中島の場合、事の起こりは、事件が発生する以前、文部省の要請で修身教科書の起草委員を務めたところにさかのぼる。

哲学館では、円了が一九〇〇（明治三三）年に文部省から、「修身教科書調査委員会」の委員を委嘱された。修身とは、いまの道徳・倫理である。当時は、そのおもとは明治天皇の「勅語」、いわゆる「教育勅語」におかれていたが、この勅語は発布されてから一〇年経っても、民衆に定着しなかった。また、この間の世界情勢の変化に合わないという問題があった。現場の小学校では、教育勅語の丸暗記が主流で、これでは道徳の徳目が理解されないという問題があった。

文部省は、同年、中島に対しても、修身教科書の起草委員になるように要請したが、中

島はこれを断った。しかし、文部省の要請は繰り返され、最後に中島は引き受けざるを得なくなった。教科書を起草する（文案をつくる）ことは、天皇の教育勅語との関係があつて、非常にむずかしかつた。だから、中島は何度も辞退したのである。

中島の委員就任から半年後に、突然、右派のジャーナリズムから「勅語撤回論を為すがごとき大不敬漢中島某なる壯士」と、名指しで非難された。この問題は、帝国議会衆議院でも取り上げられ、文部省は「事実まったく無根なり」と突っぱねたが、この質問からほどなくして中島は辞任した。

なぜ、中島徳蔵が、天皇の言葉とされる教育勅語の撤回論者とされたのか、それは、つぎの二つの事柄によって仕立てられたと、現在の研究者は考えている。

第一は、一部の漢学者・官僚などによる「陰謀」であつた。当時の文部省は中学校の教育から漢学科を廃止しようとしていた。これを阻止しようとした漢学者たちが、ある新聞に載つた二つの別々の記事から、「中島徳蔵が教育勅語撤回論者であり、文部省がこの中島を修身の起草委員にしていることは不敬（天皇に対する敬意を欠く）にあたる」というストーリーを捏造して、右派の新聞・雑誌でキャンペーンを展開し、中島徳蔵を文部省攻撃のた

めのスケープゴート（身代わりの犠牲者）に仕立てたからである。結局、攻められた文部省は取り引きをして、漢学科の廃止を取り消している。

第二は、中島の私案を聞いた関係者の「密告」であった。起草委員であった中島は、小学校の修身教科書の場合、子どもにわかりやすい「智・仁・勇の三徳を中心として課題と教材を配当する」ほうが、教育勅語の丸暗記の強制よりも、修身・道徳を理解しやすいという私案を持っていた。これは教授法上の配慮であった。ところが、中島がこの私案をある委員に話したところ、「修身は教育に関する勅語の旨趣に基づく」という当時の忠実な方針に反するとして、文部省の関係者に密告され、教育勅語撤回論者にされたという。こうしたことから、文部省は中島徳蔵をマークしていたといわれている。

卒業試験の解答

一九〇二（明治三五）年一〇月二五日、教育部第一科甲種（倫理科）の卒業試験が始まり、三二日までの一週間にわたって行われた。事件のきっかけとなったのは、このときの倫理学の試験であった。試験は哲学館の図書館において行われ、受験者は四名であった。この

日、試験に立ち会うために文部省から派遣された視学官は隈本有尚と隈本繁吉の二人で、これに彼らの随行者や哲学館の試験担当の事務職員らが加わって見守る中で行われた。

倫理学の講師は中島徳蔵であった。中島は文部省を辞任してから、哲学館に復職していた。中島が授業で使用した教科書は、ミュアヘッド著、桑木巖翼訳の『倫理学』初版であった。ジョン・ヘンリー・ミュアヘッドは、イギリスの新ヘーゲル主義の哲学者で、この本は、当時多くの学校で教科書として採用されていた。試験問題はこれに基づいて出題された。

試験終了後、隈本有尚視学官は、集められた答案の中で、加藤三雄という学生の答えを見て、つぎのような質問をした（中島はこの答案に九〇点という最高点をつけていた）。

問題は四つあって、その最後の「動機善にして悪なる行為ありや（動機が善であっても、悪の行為は存在するか）」という出題に対する解答で、加藤は「動機ならざりし結果の部分を見て、これに善悪の判断を下すべきものに非ず。しからずんば自由のために弑逆しいぎやくをなす者も責罰せらるべく、……（行為は動機を問題にしなければならない。そうでなければ暴君を殺した民衆も悪になってしまう）」と書いていた。弑逆というのは、民が君主を、子が父親を殺すという意味である。

この答案に関する隈本と中島のつぎのやりとりが、哲学館事件の発端である。

隈本はこの記述を発見すると、中島に質問した。

「ミユアヘッド氏のこの学説に批判を加えましたか。」

「私は学生の程度に合う本として教科書を選びましたから、特別に批評はしていません。」と中島は答えた。

すると、隈本は、前年六月に政友会の実力者だった星亨ほしとあるが、東京市役所参事室で伊庭想太郎という剣客けんかくに暗殺されたテロ事件を持ち出した。星亨は、当時の新聞などで汚職をとりざたされていた人物である。

「伊庭は、国家のためにこやつを殺したのは愉快なり」と言っていますが、動機としては善ではありませんか。」

「あれは違います。彼の動機は単に主観的・感情的なものであって、あの場合は善とはいえません。」

「しかし、動機が善ならば、主君を殺すことも悪ではないのですね。」
これに対して中島は、ミユアヘッドの学説に基づいて答えた。

「弑逆も絶対的にいけないということではありません。やむを得ない場合、その動機が善であるならば、認めることもあります。日本では主君を殺すという例はありません。イギリスのクロムウェルは議会軍を率いて王軍を破り、チャールズ一世を処刑して共和制を敷きましたが、彼の行為は歴史家の承認を受けているのです。」

「グリーンも、そういうふうの説明をしていますか。」

「そうだと思います。」と中島は答えた。

中島と隈本の間には交わされた問答は、以上のような短いものであった。隈本は、中島が弑逆をも場合によっては認めているということから、日本の国体上の問題であると指摘したことは明らかであったが、中島は、のちにこれが大きな事件に発展するなどは夢にも思っていないかった。

なぜ問題になつたのか

視学官は中島に、この説に批評を加えたかと聞くと、中島は特に加えていないと答えた。視学官は、これが認められるということは、テロリストも認められるということになる。

すなわち危険思想であると言った。当時、日本では政治家を狙ったテロが相次いでいた。それを持ち出して、これは危険思想だと言ったのである。それに対して中島は、そうしたテロとこの問題は性質が違う、と弁解した。

もう少し説明しよう。これは「動機（心）と行為（行動）の関係」の問題である。そもそも倫理学とは、人間における善悪、良いことと悪いことの定義を追求する学問である。「殺人」を考えてみると、その行為だけ見れば悪である。これは誰もが認めるであろう。しかし、動機によっては一概に悪とはいえないのではないかということも考えられる。たとえば、襲われている子どもを救うために、襲った人を親が殺した場合などがそうである。

これを政治レベルで考えると、民衆を弾圧した王を殺害した場合、これは民衆を救うために行ったのだから、必ずしも悪とはいえないとも考えられる。中島が授業で使った『倫理学』の教科書を書いたイギリスの倫理学者・ミュアヘッドの立場がこれである。そして学生の答えは、これをそのまま書いたものである。つまり、教科書どおりに解答用紙に書き、それが問題になった。文部省から言わせれば、加藤の答案＝ミュアヘッドの考え方は、政治的なテロリストは悪ではないのか、動機が良いならば認められるのではないかと

という疑問を持つことになった。そして極端な話、問題があったら天皇を殺害しても悪ではないのかという、短絡的な考えにもつながる。

このように卒業試験の一枚の解答が、私学における教育内容と文部省との間で、「特典」停止という処分に発展していく。

一月七日、教育部第一科四名の卒業試験が終わってから一週間後、彼らの卒業式が行われた。訓辞の中で円了は、無試験検定の適用第一回の卒業生としての自覚を訴え、さらに、西洋の学問を日本的・国家的なものとして応用する場合の注意を与えた。

また、中島は、ミユアヘッドの自我実現説の理論と応用に触れて、「もっとも新しく、もっとも切れ味のよい学説は、一方において危険を伴うことがある」ので、理論を応用する場合には部分的解釈にとどまらないようにして、現実において誤解を生じないように注意しなければならぬと述べた。

問題となった答案を書いた加藤三雄は、学生総代として答辞を述べた。

一月一〇日ごろ、円了、中島、湯本武比古の三人は、文部省に隈本有尚などを訪ねている。それは、試験が終了したわずか数日後から、哲学館には無試験検定による教員免許

が与えられないかもしれないという、うわさが流れていたためであった。

一三日には、円了が文部省総務長官・岡田良平を訪ねた。そこで岡田は「教科書と試験問題に問題あり」と言った。それに対して円了は、「哲学館の倫理教育は、自由討論をするけれども、教育勅語に基づく忠孝を基本としている」と答えた。つまり自由な討論はしているが、最初に見た教育勅語に基づいた忠と孝、天皇に対する忠誠を教育の基本としているから問題ない、と答えたのである。この時の感触で問題ないと思ったのか、二日後の一五日、円了は二回目の世界旅行に出発する。その後、一七日に文部省は哲学館に、「動機と行為の関係」についての照会を求め、一九日に哲学館は文部省に回答した。

哲学館事件起こる

一二月一三日、文部省は哲学館の無試験資格認定を取り消した。これが哲学館事件の勃発である。

一九〇三（明治三六）年一月、中島徳蔵は責任をとって哲学館を辞職した。そして、『読売新聞』などの四つの新聞に、哲学館への処分の不当性について投書した。ここから世論

を巻き込んだ議論が始まる。中島は「余が哲学館事件を世に問う理由」を発表し、つぎの四点を主張して文部省を批判した。

- 一 倫理学の教科書の弑逆などの節を批評しないで教授するのは教師の不注意か。
 - 二 学校は監督不行届で重罪になるのか。
 - 三 これからの卒業生に対する資格も取り消される必要があるのか。
 - 四 文部省は日ごろは巡視などせず、一度の卒業試験で初めて臨検して、その場で教師の不注意を発見したとして、直ちに認可の取り消しが断行できるのか。
- これに対して一月二九日、文部省は「当事者たる隈本視学官の話」として、こう反論した。

- 一 学説は学説として批評を加えなければならない。
 - 二 穏やかならぬミューアヘッドの学説を完全な倫理として教授したことを問題とする。
- 二月に入り、三日と四日、中島が読売新聞に反論を掲載すると、一六日には時事新報に哲学館事件に関する文部省当局者の話を載せた。その概要は、
- 一 哲学館は国体（天皇を中心とする日本国のあり方）にそぐわない危険な内容を教授したの

だから、他校と比べて格別な特権を与えておく必要はない。ゆえに無試験検定を取り消した。

二 もし、哲学館がこれからも国家にとって危険となるような倫理学説を唱導するならば、学校に対して断然、閉鎖を命ずることもあるであろう。

この議論は、さまざまな新聞、雑誌で取り上げられて多くの人が議論を行い、一九〇三（明治三六）年の一大社会問題となった。表5は、哲学館事件に関する記事・論文数である。

一九〇二（明治三五）年一月から一九〇四（明治三七）年二月までの、記事・論文の総数は五六四件である。このうち、中島が社会に問題を明らかにした一九〇三（明治三六）年一月から六月までを合わせると四七三件で、全体の八〇%を超えている。とくに、二月～三月は五〇%となっていて、「新聞・雑誌に哲学館事件の載らない日はない」とまで言われ、一気に社会問題となったことがわかる。内容をみると、記事・論文のほとんどが「文部省の処分は不当である」というもので、これに対して「文部省の処分は妥当である」という記事は少数であった。

このような処分に対する反応の裏には、当時の文部省が社会から批判されていたからで

表5 哲学館事件に関する論文・記事数

明治35年12月～明治37年2月					明治36年2月			
年・月	雑誌	新聞	その他	合計	日	雑誌	新聞	合計
35.12	0	6	0	6	1	3	11	14
36. 1	1	24	0	25	2	0	5	5
2	34	106	0	140	3	1	8	9
3	63	80	0	143	4	1	6	7
4	51	12	0	63	5	5	3	8
5	32	27	0	59	6	0	5	5
6	34	7	2	43	7	0	6	6
7	9	2	0	11	8	0	4	4
8	12	11	1	24	9	0	3	3
9	20	4	0	24	10	3	1	4
10	5	0	0	5	11	0	1	1
11	5	0	1	6	12	0	1	1
12	5	0	0	5	13	1	6	7
37. 1	9	2	0	11	14	0	2	2
2	5	0	0	5	15	6	1	7
合計	285	275	4	564	16	1	1	2
					17	0	1	1
					18	1	4	5
					19	0	2	2
					20	1	2	3
					21	1	5	6
					22	0	3	3
					23	0	6	6
					24	1	4	5
					25	6	2	8
					26	2	4	6
					27	0	5	5
					28	1	4	5
					合計	34	106	140

- 注1. その他の内容は、単行本・所収論文である。
 2. 現在判明しているぶんのみ。
 3. 点数は延べ点数である。

あろう。それは、一九〇二（明治三五）年に明るみに出た「教科書疑獄事件」と呼ばれる、教科書の売り込み競争にからんだ大規模な汚職事件であった。検挙者は県知事、県議会議長、府県視学官、文部省の担当者など、二百名に及んだ。この中には、哲学館事件の発端となった卒業試験で、隈本有尚とともに臨監した隈本繁吉も含まれていた。

哲学館事件が発生したころ、この一大疑獄事件によって、文部省は社会の厳しい批判にさらされ、文部大臣の問責にまで発展していた。したがって、そのような時期に、またもや文部省がらみの事件ということで、哲学館事件への社会の注目度も増したと考えられる。文部省は三月に、事件の当事者である視学官の隈本を、高等教育視察のためという名目でヨーロッパへ派遣した。

哲学館事件の収束に一定の役割を果たしたのが、「丁酉倫理会」という倫理学の研究者の団体で、一九〇三（明治三六）年三月一〇日に「哲学館事件に対する意見」を発表した。「われらは、目下問題となりおる哲学館事件につき、ム氏（ミアヘッド）の動機説を、教育上危険と認めず、また倫理学の教授に際し、中島氏が、その引例をそのままになしおきし所作をもって、深くとがむべき不注意にあらずと認む。」

哲学館では、事件発生直後に、館主不在のために「謹慎の意を表し慎重な態度を取る」ことを決め、一月に「稟告」^{ひんこう}を掲示した。そのため、学校としての意見を表明しなかった。認可取り消しは倫理学科の卒業生だけの問題ではなく、すでに卒業した漢文科の学生にまで及び、さらにその影響は、教育部第一科（修身・教育）と第二科（国語・漢文）の三学年、合わせて八三名の将来にかかわることであった。学校側はこれらの在校生を講堂に集めて、今後特典がなくなったことを告げ、進路については転校も可能であることを伝えた。当時の卒業生はその状況をこう語っている。

「われわれが入学した当時は同級生も相当多数いましたが、途中で例のミュアヘッドの倫理書問題のため、無試験検定資格が中止となり、その反動として学友の一部はお茶の水高師（東京高等師範学校、現筑波大学）などへ転校しました。そのために約半数に減少しました。」
 事件の報道は九月で実質的に終わるが、文部省の「哲学館は危険な思想を教える学校である」という「風評」は残ったままであった。円了は、この事件を文部省による「人災」と呼んだ。

VI
東洋大学設立時代

第二回の世界旅行

円了は、一九〇二（明治三五）年一月一五日に、東京を出発し、神戸から乗船して、第二回の世界旅行を始めた。まだ文部省の処分が出る前である。第一回は地球を東回りで一周したが、今回は西回りで、途中、インドで下船した。チベット探検中の河口慧海えかいやサンスタリット語で仏典を研究していた大宮孝潤こうじゆんの二人の卒業生と再会し、仏跡など各地を案内されている。その間に、中国の近代思想家の康有為こうゆういとも会談している。

インドからスエズ運河を経由して、地中海からスペイン回りで、イギリスのロンドンに着いたのは、翌一九〇三（明治三六）年一月二四日である。ここで、哲学館事件の発生を知った。そのときのことをこう述べている。

「去月（二月）三〇日、東京より飛報あり。曰く、一二月一三日、官報をもって文部省より、本館倫理科講師所用の教科書に關し、教授上不注意の廉かど（事項）ありとて、教員認可取り消しの厳命あり云々。余これを聞き、国字をもって所感をつづる。

今朝の雪畑を荒らすとおもうなよ、生い立つ麦の根固めとなる。

「苦にするな荒しの後に日和あり。……」

円了にとって、認可取り消しは「意外な沙汰（裁定）」であった。ちょうどロンドンには、大学の後輩で、文部省の普通学務局長をしていた沢柳政太郎がいたので、省内の事情などを聞くことができて、事件の真相を知ることができたが、円了はそのことを生涯、具体的に話さなかった。

沢柳は、つぎのような提案をした。

「文部省の処置の不当は差しおき、ひとたび省議となつて発表した以上は、省の威信を保つために、取り消しはもちろん、即時に認可を与えることはできないだろう。しかし、謹慎の態度をとつて、一時を経過したのちには、再び認可を願ひ出ることもできるだろう。」

沢柳のこの意見をもとに、円了は二月一日付けで哲学館の幹事に書簡を出して、緊急の対応を指示した。その書簡では「認可取り消しの一件は実に意外の沙汰にて驚き入り、哲学館火災以後の大不幸というより外なし。」と述べている。

そして、善後策として、今後の学生は検定試験を受験しなければならないので、その参考書を購入すること、文部省に対する方針として、表面には謹慎を表して処罰に随順し、

裏面では文部省に関係する元勲や先輩に依頼して、同省から寛大な処置を得るようにすること、以上を当面の策とした。

それから一週間後、哲学館の関係者への書簡では、事件の対応へ奔走していることに感謝し、「学校の迷惑はともかく、生徒の迷惑は実にそのままに見捨てがたく、これを救済するには認可の復活以外に道はない」と述べ、このような事件に巻き込まれ、館主として早く帰国しなければならないが、まだ遠路をかけて調査地に着いたばかりなので、予定どおりに取り調べを進めたい、と苦しい胸中をつづっている。

今回の事件は「天災にあらずして人災としてあきらめるよりほかなし」というのが、円了の心中であった。二月一二日、イギリスの地方の実況を視察するために、北部のリーズ市の郊外のバルレー村 (Bulley、バリー) に移った。リーズ市は羊毛工業で栄えていた。円了はバルレー村で、民間の風俗、習慣、宗教を調査している。バルレー村には一か月滞在した。ミス・アーノルド・フォスター氏という、当地の富豪が手配してくれたバックレール邸に止宿した。

一五年ぶりに訪れたイギリスは、大いに経済的に発展し、バルレー村のメイドの年収は、

日本の普通の国家公務員と同じであった。なぜ、そのような格差が生じたのか、円了はその原因を知りたかった。そのことについて、つぎのようなことを発見している。

「毎日曜、貴賤上下おのおのその奉信するところに従い、東西の会堂（キリスト教会）に集まる。村内四、五の会堂いずれも群参せざるはなし。これ英国人のもっぱら誇るところにて、毎日曜修養の力、よく富強をきたすというも、あえて過言にあらざるなし。よつて余は、『鐘の音のひびくなかで人の往来することせわしなく、紳士も淑女も花のごとく色のとりどりに会堂にみちる。日曜の朝から夕暮れまで修養につとめ、それが国を富ませ兵を強くさせているのである。』とつづり、この日曜修徳の方法は、わが国にても各寺院において行いたいものと思うなり。」

三月一二日に村を離れ、アイルランドに向かった。アイルランドへの船中で、「過般の哲学館事件を想起し、感慨のあまり、左の七絶（漢詩、原文は省略した）をつづる。『講堂は一夜にして風のために倒壊し、再び築いて竣工したとたん、またしても火災にあつて灰となった。忘れぬ恨みをいだくも、禍の源はなお尽きず、天災がようやく去ったかと思つたのであるが、またしても人災（哲学館事件）が起こつたのだ。』余おもうに、今回のことたる

や、人災と名づくべきものならんか。果たしてしかりとせば、風災、火災、人災の三災に逢遇せりといわざるを得ず。」

この船中における感慨（身に染みて感ずること）は、当然のことだろう。現代流に言えば、「またか」と、嘆くところである。創立以来、一五年間に三回の災難に遭っている。これまで見てきたように、そのたびにピンチをチャンスに転換する努力をしてきたが、人災は天災ではない。人間社会でつくられた事件である。それだけに、円了は船中で独りになったとき、この漢詩を作ったのであろう。そして、今回の事件が起きてしまったことに対して、円了はあきらめるよりしかたがないと受け止めたことを表しているのではないだろうか。

第二回の世界旅行は、現代におけるイギリス（イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランド）およびアイルランドを回り、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイスとヨーロッパ大陸を回り、リバプールからニューヨークに渡り、六月二四日、ボストンでハーバード大学の卒業式に参加した。哲学館の出身者が留学していたからである。

アメリカの発展について、つぎのように述べている。

「独立して以来、まだ年数は浅いが、はやくも富強の基を作り上げた。電気の応用は耳

目を驚かせ、器械についての工夫は新しくすぐれたものがある。実業ではすでに世界の国々を超え、文芸もまた周辺を圧するに足りる。政治は平等の規律を定め、人民は同等にして尊卑はない。汽車は上中下の差を作らず、学校はなんと官公私を区分することはない。この国の前途はだれが想像できようか。おそらくは世界を震動させるときがあるう。」

シアトルから一九〇三（明治三六）年七月二七日に、八か月間の旅を終えて帰国している。

「独立自活の精神」

第二回の世界旅行の日記は、哲学館の雑誌『東洋哲学』に、まとめて送られてきたものから発表された（のちに『西航日録』として出版されている）が、事件後の哲学館の方針などに関するようなものはない。ある人は、円了を評して、「博士は『自分の主義は死んでも枉げない』というておられたが、何事によらず一旦決心した事は万難を排して進もうとする気概（困難にくじけない強い勇氣）がある。」と言っている。帰国直後に新聞のインタビューを受けているが、その発言を要約すれば、円了の主義は変わらなかった。

円了は、事件後に文部省に出した嘆願書は処分された学生のためであること、文部省が

これになんら対応をしていないこと、の二点を理由に、今後教員免許の特典が再び与えられることになっても、これらの学生についての問題が解決されない以上、「学館の義理」として新たに特典を受けることはできないとして、「徹頭徹尾御断り」する方針を明らかにし、円了はこれを頑固に貫いた。つまり、事件の処分を認めないということであった。

さらに、帰国後まもなく、円了は事件の責任をとって辞職していた中島徳蔵に、哲学館への復職を依頼した。八月三十一日の中島の日記には「小生は再び同館講師の一人たることを快諾」とある。この時点で円了が彼を復職させようとしたのは、哲学館を事件以前の状態に戻そうと考えたからであろう。

円了は、帰国前の五月三〇日に、第一三回卒業式へ「告辞」を送り、今後の哲学館の方針を「独立自活の精神をもつて純然たる私立学校を開設する」こととして明らかにしたが、具体策は示されていなかった。

九月五日、円了は「広く同窓諸子に告ぐ」を発表して、今後の哲学館の方針を具体的に明らかにした。文章では、まず、イギリスと日本の国民性が取り上げられた。先進国のイギリスと日本を比較した場合、イギリスが世界第一の国家となった理由はその国民性によ

ついで、イギリス人は、第一に独立自活の精神に富んでいて、第二に実用的な国民で高尚な理論を極めると同時に實際を忘れることがない。これらの精神は日本の国民には欠けているものであり、今後の哲学館はそうした精神の養成を目的にする。

そして、六点にわたる哲学館の改革を述べた。

一、大学科の開設 専門学校令による大学組織をつくる。学科は予科、専門科、大学科の三科とし、専門科は三年、大学科は五年とし、それぞれの卒業生には得業、とくぎょう哲学士の称号を与える。

二、教育部および教員検定試験 認可が取り消された以上、実力養成を主として受験準備を充実させる。学力によつては、三年といわず一年でも半年でも試験に合格できるように、実力本位で対応する。

三、哲学部の実用主義 哲学部の目的はもっぱら宗教家の養成にあり、仏教の基礎を三年で教育し、さらに専門外の倫理・心理・法制などを教授して広い知識と視野を身につけさせてきたが、今後は英語や中国語(漢学)を重点的に教えるという実用主義をとる。

四、国際化の対応 これまで教育家と宗教家の育成に重点をおいてきたが、時代の変化

に依じて、さまざまな人材を養成することとし、とくに国際化に対応した教育をする。今後、日本人が活躍する所はアメリカ、中国、朝鮮なので、英語と中国語を中心に語学教育をする。そのために随意科をおく。

五、記念堂としての「哲学堂」の建立 大学開設用の敷地に、基本金が集まりしだい着手する。大学開設の記念堂を建立して、これを四聖堂しせいと称して、古今東西の哲学者を記念する。また、哲学館事件で資格を取り消された卒業生・在校生八三名の氏名を記した記念碑を建立する。

六、哲学応用の奨励 哲学館の方針は、理論の研究だけではなく、哲学を社会全般に応用することを奨励してきた。卒業生は、直接的には教育・宗教に、間接的には法律家・工業家などに従事して、この成果は十分にあげているが、大学開設後はさらにこれに重点をおく。そして、学問上の成績だけではなく、社会において功労名誉を有する者に対して、アメリカのハーバード大学のように、認定得業、講師、名誉講師の称号を与える。この称号の規定は、哲学館の教育の主義を表すものである。

こうして哲学館は再出発した。

「再出願をめぐって」

一九〇三（明治三六）年に公布された「専門学校令」は、日本の高等教育を変化させるものであった。この法令により、専門学校は「高等の学術技芸を教授する学校」として、専門教育を行う高等教育機関に位置づけられることとなった。これまでの日本の教育制度のなかで軽視されてきた私学も、専門学校として認可されることで、東京高等商業学校（現一橋大学）などの官立学校と同格の教育機関となり、また名称として「大学」と名乗ることができるようになった。一九〇三（明治三六）年には公立三校、私立一三校が、翌二七年には公立一校、私立二二校が認可を受け、三八年の段階では合計六三校（実業専門学校を含む）が専門学校となった（現在の専門学校は、戦後の法律で定められたもので、正式には専修学校といい、職業教育を主にしている）。

円了は帰国後に申請して、一〇月に「哲学館大学」として認可され、新たに大学部が設けられた。卒業証書に「哲学館大学哲学士」と書くことができるようになった。一八九〇（明治二三）年に、大学を目指して専門科設置を発表して以来およそ一四年、火災からの再

建や哲学館事件という苦難の道を乗り越えて、ようやくその目標を達成したのである。

これで創立以来の目的の一つが達成された。その記念として、新たな校地（現哲学堂公園）に哲学堂（現四聖堂）が建設され、一九〇四（明治三七）年の四月一日の午後、開堂式が行われた。

同日の午前には、哲学館大学の開校式も行われたが、政財界の有力者や宗教教団の支援などに頼らずに、個人の少額の寄付金によって運営されてきた学校の財政は、かなり厳しい状況にあった。同窓会では、大学の開校式に先だつ一九〇四（明治三七）年三月に、会員あてに「同窓諸兄に檄す」の一文を送り、母校発展のために積極的な寄付金の募集運動を開始した

学長の円了も、自ら各地を巡講した際に寄付金の募集に努めた。たとえば、一九〇四（明治三七）年一月の厳冬に、大学開設と修身教会設立の報告のために甲州地方を巡回した。そのときに寄せられた寄付金の合計は約四八八円であった

大学の財政の重要な財源として挙げられるのは、寄付金のほかに、学生を受験料、入学金、授業料による収入であるが、哲学館大学の開設の前後には、学生数が減少した。その

原因について、円了はつぎの三つを挙げている。

第一は、社会情勢の影響で、日露戦争を背景にした国民は生活全般にわたる経済的な影響を受け、とくに家計の収支への圧迫が進学の機会を一時的に縮小させた。

第二は、仏教団の教育機関である各種の学林がくりんの整備が進み、これらの学校が徴兵猶予の特典を獲得し、専門学校令による認可を受けて再生された。そのため、それまで哲学館へと進学してきた者が、宗門大学へ進学した方が将来有利であると考えようになった。

第三は、哲学館事件による中等教員の無試験検定の認可取り消しである。徴兵猶予の特典とともに、教員の無試験検定の特典は、文科系の私立大学の特色をつくっていた。哲学館は事件によってその特色を失い、その結果、学生の一部は他の学校に転校してしまい、およそ半分にまで学生数が減少した。

新たに出発した哲学館大学は、社会的条件の急変や哲学館事件の影響という重荷を背負っていた。円了は、当面する入学者の減少に対応するために、仏教界の大教団である曹洞宗の管長などへ、哲学館大学の卒業生に対して住職の資格が認定されるように依頼した。そのほかにも、さまざまな手段を講じて働きかけを行った。その対策は実現したが、学生

数の激減という事態の根本的な解決策にはならなかった。

一〇月中旬から、事態を心配した講師や校友の中から、新たな動きがなされるようになった。教員免許の無試験検定の「再出願」である。一〇月二一日、再出願への働きかけを聞いた校友有志が三四名の連署をもって、「哲学館大学が広く我が国教育界のために、この際、無試験検定の特典を得んことを希望する。」という建議書を、井上円了学長に提出した。翌二二日には「同窓会臨時大会」が開催され、再出願の建議が可決され、総代二名の手から学長へ建議書が渡された。さらに、二八日付けで講師総代として、この運動の中心であった三名の講師連名による再出願に関する「勧告書」が提出され、これに続いて、哲学館事件で被害を受けた卒業生からも、学長のもとに再出願に関する建議書が提出された。

しかし、これらの建議や勧告に対して、井上円了学長は「常に厄やぐ（くるしみ）に遇えるもののために、またこれをなすに忍びず。」と答え、被害を受けた卒業生や教員の問題が解決されなければ再出願はできないと言い、これらの建議に応じなかった。

この再出願の問題の底流には、円了と講師・校友との間に、大学のあり方をめぐる考え

方の相違があつた。講師や校友などは、新たに制定された専門学校令という高等教育制度の範囲内で大学の発展を目指すべきであると考え、「哲学館大学は我が国における唯一の哲学専門の学校であり、哲学の研究と普及とをはかり、そのなかで適当な教育者を養成する」ことに重点をおいていた。

一方、円了は、哲学館事件後に示したように、「独立自活の精神をもつて純然たる私立学校を開設する」という考え方で、自由開発主義（人の内面にあるものを自由に発達させる）という建学の精神を失わず、文部省に頼らず、独自の立場から社会への貢献と大学の維持発展をはかるうというものであつた。

このような考えから、円了は哲学館大学、京北中学校を位置づけ、さらに哲学館事件後には社会教育としての「修身教会運動」を提起し、また一九〇五（明治三八）年四月には、幼児教育の必要性から「京北幼稚園」を設立したのである。

だが、専門学校令という新しい制度のもとで哲学館大学が誕生したこともあつて、講師・校友と学長との間に学校に関する考え方の相違ができて、それが学内対立へと形を変えて進んだ。無試験検定の再出願は、学長自身の同意がなければ実現しなかつた。井上円了学

長の方針は、すでに述べたように再出願はしないというものであった。その態度は、哲学館事件の責任をとって辞任した中島徳蔵を、帰国後に再び講師としたように、「頑かたくななま

であった」と言われている。

そのため、再出願をめぐる大学の問題は、いったん学長自身に投げかけられたが、実現は不可能であったから、つぎに学長の近辺にいた哲学館出身者の教職員に向けられることになり、それは、同窓会のあり方に対する革新という形で主張されたのである。

革新派は、「学長は文部省に対して反抗的な態度をとり」、また「出身者の教職員が一種の朋党をなし専横暴慢を極めていて」、その行いは同窓会内部にとどまらず、大学の運営にまで及んでいることを指摘した。「哲学館大学革新事件」と呼ばれたこの動向は、学長をはさんだ校友同士の対立であった。

革新を主張する側が全国の同窓生に連帯を求めれば、一方の学内派は、革新派の中心者の四名を私文書偽造で告訴するまでに至った。告訴は仲裁した検事の調停により和解できたが、同窓生の対立というこの事件も含めて、学内問題は泥沼化するばかりであった。

「神経衰弱症」

このときの円了について、ある知人はこう語っている。

「明治三七年一二月の上旬に、私が新聞記者生活をしていたので、『近來一、二、哲学館を攻撃するものがあり、あるいは何か学校に関して掲載を申し込む者があっても、採用してくれるな。』というような手紙を、円了先生から寄せられたことがあった。あの大雅量（広く、おおらかな心）の人も、神経を痛められたものらしいと思った。」

円了の人柄について、アイルランド出身の文学者で、『怪談』などの作品で知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、島根県の松江で会談して、「非常に紳士的な人間である」と、その印象を書いているし、多くの関係者は「怒った姿を見たことがない」という。穏健な人間であったが、問題の中心が自分であることはわかっていた。一九〇四（明治三七）年の哲学館愛知県同窓会での集合写真にある円了の顔は、他のすべての写真と異なり、「暗澹（暗く沈んだ）」とした鬱状態に見える。このころの自分を、円了は「暗潮」という言葉で表現している。暗闇の海に漂っていたことを指すのであろう。右にも、左にも、動くことがで

きない、ある意味「絶体絶命」の状態で、心の中で苦惱し、葛藤する日々であったが、やがてその精神状態が身体を蝕むようになった。

すでにこの年の夏ごろから、円了には心身の不調が現れていた。その度合いは、「半日仕事をすれば、半日の休息が必要であり、また昼間に少し校務をしただけで夜間には大いに疲労を感じる」ほどであった。寸暇をいとわず、すべてを活動に費やしてきた人間にとって、それは深刻な状況であった。

そのため、哲学館創立以来の初期の目的を達成したと考えて、区切りを付けようとした円了は、学校を解散して講習会組織にすることを、知人たちに提案したこともあった。

大学をめぐる問題は、「哲学館は井上円了や井上家の私物ではない」という批難や、あるいは「哲学館大学は仏教の正宗一派の学校なのだ」という誤解まで生むようになった。

「世間とは誤解の多きもの」と、あえてとりあうことをしなかった円了は、一九〇五（明治三八年）四月に幼稚園を設立し、夏には心身の回復をかねて、東京を離れて静岡、山口、長崎、茨城の各県を巡講した。

しかし、こうした日々のなかで、「精神の疲労のはなはだしさを覚え、徒然として日を

送ることが多く、時には悲観に流れ、何事も意に適さないように感じ」ていた。医者からは「神経衰弱症」と診断されたが、一月ごろになると、「学校の俗務を避けたくなる気持ち日がごとくに強くなる」という精神状態に陥り、やがて二月には、自宅の「庭先にて卒倒しそうになったことが二度ほど」あった。家族は万が一の事態を心配した。

一二月一三日、例年のように、哲学館大学記念会が上野精養軒で開催された。この会では、円了が幼少のころに塾で教えを受けた石黒忠憲ただのりと、明治の仏教革新に大きな役割を果たした大内青巒せいろうの演説があった。この演説を聞き、円了は帰宅後に、過ぎ去った日々のことを思い出すなど、さまざまな思いをめぐらせた。そして、積み重なった問題の打開策として、すべての学校からの引退を決意した。

こうして、円了は、哲学館・哲学館大学という一つの時代をつくって終わりを告げるこ
とになった。

東洋大学の設立と学校からの引退

円了が引退を決意したのは、一九〇五（明治三八）年一二月一三日のことである。それか

ら二週間ほどの間に後任の学長を内定し、二八日には両者の間で事務引き継ぎに関する契約が行われた。

契約の内容は、第一は学長交代に関する日程（翌年一月から新学長に継承する）、第二は私学としての学風の継承と運営、第三は円了が保有する財産の確定である。

第一は、後任の学長であるが、講師の中から選ばれ、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の出身で、天台学の泰斗と呼ばれ、東京帝国大学でも教鞭をとったことがある、文学博士の前田慧雲が二代学長となった。

第二は、その後の大学のあり方を決めるものであり、つぎの三点であった。

一 創立の主旨である東洋哲学の振興普及をはかること
二 財団法人とすること

三 将来、出身者中にとくに拔群の者がいた場合、これに学長を継承させること。もし出身者に適任者がいなければ、哲学館の講師（教員）の中から選ぶこと

明けて一九〇六（明治三九）年一月八日、学内の掲示板に「井上円了学長退隠」のことが張り出された。突然のことであったから、驚いた教員や学生を講堂に集めて、円了は引退

のいきさつを説明した。病気のため、事業のため、社会のため、家族のため、という四つの「退隱の理由」は、雑誌にも掲載された。

二月、校友の提案を受けて教職員と学生も寄付金を寄せて、創立者の精神を将来にわたり堅持するために、記念のものを作ることにした。寄付金が予想以上に集まったので、銅像を建立することとし、さらに、その剰余金で油絵の肖像画も追加して制作された。

四月の入学式から二か月後の六月二八日、新たな校名は円了が決めた「私立東洋大学」として認可され、哲学館大学は新しい大学へと生まれ変わった。なぜ校名が変更されたのかといえば、哲学館は文部省によって「危険な思想」を教育する学校というレッテルがはられ、それが風評として残っていたからであり、また円了は、従来から東洋大学科や契約書にある「東洋哲学の普及」などとして使っていた名称に変更して、事件との関係を拭い去り、再スタートさせたいと考えていたのだろう。

七月四日には、契約に従って、「財団法人私立東洋大学」が設立された。こうして、大学は円了という個人が設立して運営したものから、法人という組織で運営されるものとなった。財団は、理事二名、監事一名、商議員一七名の構成で出発し、新しい大学は、つぎ

の世代に托された。

すでに述べたが、一八八七（明治二〇）年の哲学館の創立は、井上円了の趣旨に賛同した二八〇人の有志からの七八〇円余りの寄付金で実現したものであった。その後、円了は有志の寄付から国民的寄付へと転換し、全国各地を巡講して寄付金を募り、それを基にして大学へと発展させた。円了が引退を決意するときまで、どれほどの人々が寄付をしてくれたのであろうか。

この寄付者と金額については、円了は機関誌『東洋哲学』などにそのつど発表していたが、その全貌はわからなかった。井上円了哲学センター客員研究員の出野尚紀の研究によって、『東洋大学創立寄付者名簿』が刊行され、寄付者の氏名や金額の詳細が明らかになった。これによれば、寄付者の総数は二万四〇四九人（件）、総金額は四万四九四三円四〇銭であった。

寄付金額一円以下が四分の三を占めている。円了は、「ほかから特別な扶助保護を受けない」で事業を興したいと考えていたから、この結果を見ると、円了はその哲学を實行して、大学、中学、幼稚園（小学校の設立も実際に検討されたが、時期尚早として見送った）という総合

学園を創立した。そこには、「学校は社会の共有物である」という円了の哲学があった。

財団法人の東洋大学は、基本財産のすべてが円了からの寄付行為で設立された。それは、土地や有価証券の基本財産と、建物や動産という基本財産以外のもの、合わせて約一〇万五二四四円であった。創立者の井上円了には、哲学堂一棟、曙町の平屋二棟、株券額面二三〇〇円が、創立以来の功勞に対する「賞与」として与えられた。およそ一万五〇〇〇坪の哲学堂の土地は、円了が再び大学から買い取るものとした。

引退した円了は、名誉学長となり財団の顧問となったが、東洋大学との関係は、卒業式や同窓会などの行事に出席する程度になり、契約によって一切を後継者に託した以上、大学の運営などに干渉すべきではないという態度で終始し、社会教育としての修身教会運動（全国巡講）と哲学堂の建設に専従した（円了に対して、二度、学校に戻ってきてほしいという校友の要請があったことは事実であるが、「お化けが出た」と笑われるよと言って、固辞している）。

また、引退以前に公開遺言状を作り、「学校は余が社会国家に対する事業として着手せしものなれば、井上家の子孫をしてこれを相続せしめ、またはこれに関係せしむる道理なくまた必要なし。」と位置づけ、創立者の子孫への世襲を禁じていた。当時の言葉に「子

孫に美田を残す」があり、子孫に財産（美田）を残すことが美徳とされていたが、円了の考えは違っていて、「子孫には本の印税など最低限のものは残したので、あとは自分で働きなさい。」というものであった。「学校は社会の共有物である」というのが、円了の哲学であったからである。

一八八七（明治二〇）年に円了によって創立され、以後二〇年間にわたり創立者の「独力」で維持され、発展してきた哲学館は、このようにして一九〇六（明治三九）年に「私立東洋大学」となり、集団で運営する新たな専門学校として歩み出した。なお、問題となった教員試験無試験検定の再認可は、引退の翌年、一九〇七（明治四〇）年四月に申請され、五月に認められている。

VII

全国巡講・哲学堂時代

生涯学習としての「修身教会」運動

現代では、「生涯学習」という言葉も社会的に定着している。学校教育以外のものとして、各地で性別や年齢を問わず、個人を主体として、自由に学びを楽しんでいる風景が見られるようになった。

一〇〇年以上前に、生涯学習（当時という社会教育）を日本社会に初めて提起したのが円了であることは、ほとんど知られていない。円了は第二回の世界旅行で、イギリスのバルレー村で「日曜学校（Sunday School）」を実験して、「日本では学校教育で終わりだが、イギリスでは生まれてから亡くなるまで教育をうける場がある。」と確信した。そのため、帰国後に、日本式に「修身教会」と名づけて、全国的な生涯学習振興運動にチャレンジャーした。

イギリスでいつごろ、どのように日曜学校が広まったのか、生涯学習の研究者である矢口悦子はこう述べている。

「日曜学校の起源については諸説あるが、一七世紀末には西ウエールズで実施された」と

の記述が見られる。一般には、産業革命によって人口の増加した地域における基礎教育の必要性から、平日工場で働く子どもたちのための教育の場として発展したとされる。広く知られているのは、ロバート・レイクスが一七八〇年からグロスター地方で始めた日曜学校運動であり、これを機に各地に広がった。そこには、最初から大人も参加していた例が多くあり、昼は子ども夜は大人という所もあった。ノッテンガムの成人学校は一七八九年から記録が残っており、最古の成人学校の一つとされるが、その始まりも日曜学校であった。

日曜学校では主に読み書きの教育を実施していたが、一九世紀にはさらにベル・ランカスターシステム等多様な組織的教育の場が作られ、こうした基礎があり、一八七〇年の初等教育法の成立につながった。まるで、日本における寺子屋が、一八七二年の学制発布後の義務教育の広がりを支えたことに似ている。ただ、イギリスにおける日曜学校では、大人も多様な教育活動に参加したことで、寺子屋とは様相が違った。子どもの教育の場から、初等教育制度の補完として成人を含む地域の人々の教育機関へと発展し、尊敬される社会人としての教養を身に付ける場ともなっていた。円了先生が実際にリース近くの村で見学

された時期の日曜学校は、老若男女が集う教区コミュニティの教育・文化活動の場としての役割を果たし、とりわけ貧しい家庭に対して共同体としての相互扶助を実施する場でもあったと思われる。」

円了が、日曜学校をモデルとした「修身教会」の設立計画を公表したのは、第二回世界旅行の帰国後のことであつた（本書では記述上の混乱をさせて、引退後に書くことにした）。なぜイギリスにモデルを求めたか、それについて、円了の長男である玄一はこう述べている。

「父は第二回の外遊をした折、英国各地を二か月にわたりつぶさに視察した結果、英国人の個人主義、自由主義の長所を認めた。元来彼は、日本人にはめずらしく神経質などころは微塵みじんもなく、意志が強く自己の信ずる道を黙々と実行して行くところは、英国人の性格と似通っているので、短期間とはいえ、英国の生活は気に入つたようである。その言論の自由、人格の尊重、社会道徳の発達など、とくにうらやましく思っていた。」

このような理想的な社会をつくるため、円了は「修身教会」を大学の通信教育（館外員制度）に代わる新しい教育事業に位置づけた。そして、一九〇三（明治三六）年九月に『修身教会設立趣旨』を、大臣、各地の町村長、小学校長に配布して、日本全国に「修身教会」

を設立するという壮大なチャレンジに挑んだ。

『修身教会設立趣旨』で円了は、日本と欧米各国との発展の格差、とりわけ「国勢民力」の差がなぜ生まれているのか、そのことを問題視した。欧米では、日曜学校が修身（道德）を養成し、国民の生活のあり方を支えており、この点が日本との民力の差（日本の発展の遅れ）となっている。そのため、日本でも教育勅語を拡大して解釈し、忍耐、勤勉、博愛、独立、自由などを民衆が学ぶ修身教会が必要である。この教会は、町村の有志が設立し、日曜などに寺院や学校を会場にして、講師を教員や僧侶が務める。講義だけではなく、唱歌も入れる、などと考えていた。この全国的な運動のために、『修身教会雑誌』（その後『修身』と改題）を翌年に刊行して出発したが、同時に日露戦争が始まり、哲学館卒業生の高島米峰によれば、戦争のために、円了が期待したような成果はあがらなかったという。

しかし、あきらめたわけではなかった。すでに見たように、一九〇六（明治三九）年に、学校を財団法人にして引退した円了は、まだ四八歳であった。当時「人生六〇年」時代でも、いかに引退が早かったかがわかる。「一教育者」に戻った円了は、自分の理想とする国家・社会をつくることをめざして、「修身教会」運動を独りで進めるために、本格的に

全国巡回講演（全国巡講）に取り組むようになった。

全国巡講の鉄道などの基盤

円了は哲学館時代から、日本社会のなかで文明開化の枠外に放置された農村・山村・漁村を見てきた。これらのいわゆる「地方」の活性化がなければ、欧米に追いつけない。「国勢民力」を向上させるといふ問題の一つは、「時は金なり」などという国民の意識・生活の仕方の変化がなければできない。講演という形で、円了は地域社会にそうした教育の種をまこうとした。ところで、円了の全国にわたる巡回講演を可能にしたのは、交通機関などの発達があったからである。一〇〇年前の状況はどうなっていたのであろうか。

鉄道の開設は、一八七二（明治五）年の新橋―横浜間の鉄道の敷設に始まる。つぎにできたのは神戸―大阪間で、一八七四（明治七）年であった。大阪―京都間はその後ほそほと進められていたが、一八七七（明治一〇）年の西南戦争のあと、京都―大津、敦賀―大垣間の建設があつて、一八八九（明治二二）年には新橋―神戸間が完成した。いわゆる東海道本線である。この間に民間資本による鉄道建設も始まったが、一八九二（明治二五）年に鉄道

敷設法が公布されて、国家事業として進められ、一九〇〇（明治三三）年までに、北は北海道の旭川から、南は九州の熊本までの列島縦貫線が完成した。このようにして、全国の鉄道網は建設された。

道路は、明治初期から地方の開発のために国道が、東京を起点に、各開港場（横浜・大阪・神戸・長崎・函館）まで、さらに各府県庁および府県鎮台（軍隊の拠点）までと、その整備が重視された。しかし、費用は一八七八（明治二一）年の地方税規制によって、府県・市町村の負担が原則とされ、国家補助の件数や金額も少なく、鉄道に比べれば地域間の道路の整備が遅れた。これには、欧米のような馬車による交通手段の発達、江戸時代には見られなかったのが、原因の一つとして考えられている。

また、電信（電報）の整備は早く一八六八（明治元）年に国営での架設が決定され、一八八一（明治一四）年には全国幹線網がほぼ完成した。電話は電信に比べて大幅に遅れた。輸入された一年後の一八七八（明治二一）年に、内務省が警視本署間で初めて実用化され、その後は各官庁、鉄道、大会社などに架設されたが、国営の決定は一八八八（明治二二）年であった。電話網の発展はなかなか進まず、一九〇七（明治四〇）年に拡張計画を立案し、ほぼ

全国を網羅したのは一九一二（大正元）年であった。

さらに、政府は一八七一（明治四）年に郵便創業の太政官布告を出して、三月から、東京から京都を経て大阪に至るまでの区間を三九時間で結ぶ郵便制度を創設した。当初は、距離に応じて料金が上がる仕組みであった。運送に関しては、一人が運ぶ荷物の重量を約一キロまでとし、二時間に約二〇キロ進むこととされ、夜間には安全確保のため、随行員が一人つけられた。翌年七月には、北海道の一部を除きほぼ全国で実施され、また一八七三（明治六）年には、全国均一の料金体制に改められた。

円了の巡講が全国的に展開された背景には、このような鉄道などの国家の基盤整備があったからである。円了は、鉄道を基線に各地へ向かったのであるが、幹線ははずれると、軽便鉄道、馬車鉄道、あるいはトロッコに身をまかせ、さらに早馬に乗って行ける所まで行って、そのあとは人力車、あるいは徒歩で行かなければならなかった。例えば、東京から宮崎県の都城まで行くのに、汽車、川舟、馬車と乗り継いで、五日間もかかったと記録されている。また、そのような旅には、夜明け前に出発しなければならないことや、船が欠航して二日間も島に足止めされるようなこともあった。

ときには、悪所を人力車で越えて行かねばならず、危険な目にも遭った。千葉県の勝浦から鴨川までの通称「阿仙おせんころがし」（阿仙という婦人が風でとばされ海に吹き落とされて即死したなどという言い伝えのある難所）という、四キロの崖道を通ったときの出来事について、円了は日誌にこう記している。

「あかつきの空はあめを帯びて暗く雲がけぶり、あれくるう波がいかりの声をあげて道行く人の耳にきこえてくる。断崖の行きついた所では風はますます激しさを加え、むかし阿仙なる婦人が転落した所で、わが車もまた転倒したのであった。」

このときは、車は破れたが、幸い円了の身体は車内に残り、命拾いをした。日誌によれば、人力車からの転落は、このほかにも数回あった。

「田学」

「田学でんがく」は円了の教育理念の一つである。

円了は士族（武士の出身）の福沢諭吉を引き合いに出して、「私は世間の学者を貴族的と称し、私自身を百姓的（農民的）と唱えている。かつて福沢翁は平民的学者をもって任ぜられ

だが、私はそれよりも一段下りて土百姓的学者（最貧困の農民的学者）である。」と、自分の立場を明確に示している。平民出身の円了は、福沢よりもさらにへりくだり、あえて一民間学者としての自らの立場を、こう表現したのである。

福沢よりもいっそう民衆の奥深くへ入り込んで行こうとした円了は、自分の学問を「田学」と表現している。それは、およそこういう意味である。「紳士が田舎にいれば田紳（田舎紳士、どろくさい紳士）という。それならば、学者が田舎にいれば、田学といわれるべきである。これに対して、都会に住み、位階（地位・身分の序列）を帯び、官（政府）に雇われている学者は、官学と呼ぶべきである。官学は高貴なものといえども、田学もまたいやしむべきものではない。鯛の刺身は貴人の膳に上がるけれども、貧民の口には入らない。豆腐などの田楽は田学に通じる。私は田楽となり、学問の料理を、貴賤貧富を問わず供給することを本分とする。」

官学に対する田学という考え方は、「余資なき者、優暇なき者」に教育の機会を開放するという、哲学館創立の精神と同じものである。そのときと比べると、時代も社会条件も異なっただけだが、円了の目指していた田舎（農村・山村・漁村という民衆の暮らす所）にはまだ

教育が行き届いていなかったもので、学校教育から社会教育の場に身を移して、再び原点に立ち返ったのであった。

修身教会運動は、欧米諸国の社会道徳や実業道徳のレベルまで、日本の民衆の道徳や思想を向上させ、それによって日本社会の発展・改良を達成しようというのが目的であった。対象となるのは一般民衆であり、自ら田学と称したように、円了は、日本の基盤を支えている地方都市や田舎の町村などのいわゆる「地方」を重視し、そこに「わが身を運び」、教育の重要性を訴えようとした。

また、福沢は一度、政府からの叙勲を辞退したことで有名であるが、円了も大正時代に一度ならず二度までも内示があったが、円了はそのたびに叙勲を断っている。このことはあまり知られていない。円了は「無位無官」で生涯を終え、権力の門に屈しない在野（民間）の哲学者・教育者として生き抜いたのであった。

「南船北馬」

円了は全国巡講日誌を『南船北馬集』（第一〜一五編）として記録している（第一六編は死去の

表6 年間講演日数

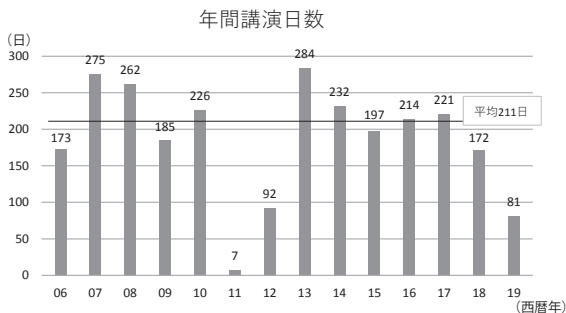
西暦	和暦	年齢	日数
1906	明治39	48	173
1907	明治40	49	275
1908	明治41	50	262
1909	明治42	51	185
1910	明治43	52	226
1911	明治44	53	7
1912	大正 1	54	92
1913	大正 2	55	284
1914	大正 3	56	232
1915	大正 4	57	197
1916	大正 5	58	214
1917	大正 6	59	221
1918	大正 7	60	172
1919	大正 8	61	81
合計			2,621

註：海外講演日は除いた。
1911（明治44）年は第3
回世界旅行など。

ため途中までの原稿が残っている。『南船北馬集』の統計によれば、一九〇六（明治三九）年から一九一八（大正七）年までの一二年間に、全国六〇市、二一九八町村を巡り、二八三一か所の会場で、五二九一回の講演を行った。聴衆は延べ一三六万六八九五人となっている（その後の大正八年の巡講の結果を加えると、講演回数はおよそ五四〇〇回、聴衆はおよそ一四〇万人にものぼり、当時としては実に画期的な規模の社会教育活動であった）。平均すると、一年間に二一八か所で講演し、一回の聴衆は二四七七人になる。まさに南船北馬（各地を忙しく駆け巡る）の活躍である。

次の表6とグラフは、年度別の巡講日数を表したものである（一九一一・明治四四年は海外巡

講と第三回世界旅行であったから、国内は七日のみであった。日誌を読むと、円了はタイトなスケジュールで講演しており、遊びはほとんどなく、東京からの往復も夜行



列車を利用するなど無駄がない。年間講演日数の最多は二八四日、最少は一七二日（年間九二日は世界旅行から帰国した年）である。二五〇日を超えたのは三年、二〇〇日以上は四年、一七〇日以上が四年である。

晩年の一三年間を生涯学習の普及につとめ、全国各地で講演した。その日数が全体で二六〇〇日を超え、一年間の平均で二〇〇日を超えたことはすでに述べたが、どのようにして、このような講演日を積み重ねることができたのか、その内訳はこれまで調べられてこなかった。今回、日誌を見ながら、一回の講演日数ごとに分類してわかったことがある。

表7は、巡講期間別（月単位）に集計した結果である。巡講は合計で四八回に分けられる。この表は、二つのことを明らかにしている。一つは最長で五か月などの長期

表7 巡講期間(月単位)

月数	回数
5か月	2
4か月	1
3.5か月	1
3か月	2
2.5か月	4
2か月	8
1.5か月	16
1か月	11
0.5か月	3
合計	48

だろう。日誌の中に「三か月ぶりに汽車を見た」と書いてあり、それほどの期間、辺鄙(へんび)（都会から離れた不便なところ）な村々を講演して回ったことがわかる。

「午前は移動、午後は講演、夜は揮毫(きごう)（書を書く）」、これを毎日繰り返す。講演地や聴衆は変わるが、基本は同じである。三か月以上が六回あり、五か月間に一度も家に帰らずに、講演旅行を続けたのが二回である。円了に言わせれば、こうして初めて全国各地にわたる巡講ができるのだということだろう。現代の学生が巡講日誌を見て、「円了さんは大きな目標に向かってコツコツ、コツコツと出来る人なんですね。」と言ったことを思い出す。

地方では旅館などの宿泊施設も整っていなかったもので、小学校や役場の宿直室に泊った

間の巡講が一〇回、もう一つが一か月〜二か月の短期間で三五回、この二つのタイプを組み合わせる全国巡講が行われていることがわかった。われわれから見ると、〇・五か月、つまり二週間くらいまでは想像できるが、一か月以上になると大半の人々の想像を超える

ことも稀まれではなかったという。円了は、出発の見送りを断り、汽車は三等で、弁当は握り飯と決めていたし、服装からカバンや時計などの所持品にいたるまで華美かび（ぜいたくなこと）を排して、実用本位のものを用いていた。その姿を見て、卒業生は、「どう高く評価しても、山奥の村長か収入役くらいにしか見えない」と言っていた。

巡講では「名物のカバン」を持参していたと言ひ、こう述べられている。「先生のカバンは、有名なものであった。タテ二尺（六〇センチ）のヤブ医よろしくといった風のカバンは何十年来先生と追隨、教室よろしく、宴会よろしく、蚊帳かや（蚊を防ぐために寢室を吊り下げた）よろしく、舟車馬背、……これを放されたことがない。中には、筆あり、紙あり、墨池あり、手帖あり、切手あり、羊羹ようかんあり、先生の七つ道具ともいべきもの、ことごとくみな備わっていた。

先生は七つ道具をもって、……汽車の合間など、寸陰すんいん（わずかな時間）といえども、これを利用しないことはなく、手紙の返事、雑誌の原稿、巡回の日記など、ほとんどこの間に作ったものである。その勤勉にして筆まめなことは、他に例を見たことがない。」

円了が巡講の際に携えたカバンは、現在、東洋大学の博物館に展示されている。巡講は

長期に及ぶことが多く、したがって、自宅で過ごす時間は少なく、帰宅しても数日からせいぜい一週間で、またつぎの巡講に出発したという。

長年にわたる全国巡講で、円了は一度だけ、スケジュールをキャンセルしたことがあった。一九〇九（明治四二）年八月二五日、「母危篤」の電報を、島根県への巡講に向かう途中の静岡県で受けた。深夜の汽車に乗り、臨終に間に合うように駆け付けたが、母のイクは、円了が到着する二時間前に亡くなっていた。葬儀の後、円了は巡講の予定をすべて断り、母を偲んで哲学堂にこもって喪に服した（その喪中に円了は『哲学新案』という円了哲学の集大成を執筆した。この著作は育ててくれた母に奉げられたものである）。

民衆との出会い

講演会の主催者や発起人は、それぞれ地元の市や郡の教育会、仏教団体、青年団、婦人会、実業クラブ、農会、また辺境（中央から遠く離れたところ）では、三か村連合や五か村連合などのようにいくつかの村の共同体、あるいは町長、村長、学校長などの個人、さらに有志の集まりなど、多種多彩であった。そして、各郡の視学官が案内役となり、地元の哲学

館出身者や旧友などが随行した。いたるところで、哲学館や京北中学校の卒業生たちの協力が得られたし、会場には必ず卒業生や館賓（哲学館への高額寄付者）、あるいは『講義録』で学んだ館外生からも訪ねてきた。

円了は出迎えや見送りを好まなかったというが、各地ではそれぞれに趣向を凝らした方法で歓迎された。船に万国旗を掲げて太鼓を打ち鳴らしたり、整列した子どもたちが日の丸の小旗を振ったり、威勢のよいラッパに迎えられたりした。

聴衆（円了は公衆と呼んでいた）は幅広く、老若男女を問わなかったし、円了も幼児や小学生に向かっても語りかけるなど、対象を限定しなかった。天候によっては聴衆が集まらない場合もあったが、逆に大相撲の地方巡業とぶつかっても会場が満員になることもあり、おむね盛況であった。これは、官民を問わぬ主催者の協力があつたこともあるが、円了の話が珍しくて、人々をひきつけたことによるものであつた。

円了は一回の講演を二席に分けて、それぞれ三〇分ほどの話をした。民衆にはちょうどよい時間であつただろう。講演テーマは、修身と一般とに分かれ、それぞれから一〇題ほどをリストにして知らせ、その中から各地の主催者が選べるメニュー方式にしていた。こ

うすれば、招待者はあまり迷わずにすむという円了の配慮であった。

巡講の講演内容の統計を見ると、第一位は「詔勅・修身」で四一％であった修身教会運動の趣旨からいって、教育勅語、精神修養・道徳をテーマにしたものが多いのは当然であった。これについて、第二位は「妖怪・迷信」に関するもので、二四％であった。円了が「お化け博士」「妖怪博士」と愛称されていたことがよく表れている。それに比べて、「哲学・宗教」は第三位で、一五％にとどまった。第四位は「教育」で八％、第五位は「実業」で七％、第六位は「雑談（旅行談）」で五％となっていた。

円了は勅語を中心としながらも、民衆に合うさまざまなテーマで講演した。すでにみたように、妖怪学に関する講演は民衆が好んだものであった。哲学館出身者で『福岡日日新聞』の主筆の斎田耕陽はこう伝えている。

「妖怪学の研究者として知られている（円了）博士は、しばしば『化物先生』^{ばけもの}の名をもつて呼ばれておる。一昨年のある宮崎県下遊説中、ある田舎で演説会を開くというので、来会者の遠近から集まり来るもの数千人、田舎においてはほとんど開闢^{かいびやく}（世界のはじめ）以来の大盛況であった。『修身教会の伝道演説にかくも熱心に集まるとは、天いまだわが道

を亡ぼさざるか』などと、博士はすこぶる得意でおると、なにがさて、『東京から名高けア化物の先生がお出でだというから、どんな顔して、どんな着物を着てござるか、その化物の先生を見に行くベエや』と、見世物でも見に行くような気で、演説見物に来たのであった。」

また、大正時代に現在の山形県村山市で、実際に円了の講演を聴いた人の子孫は、その影響をこう語っている。

「大久保に電灯がついたのは大正七、八年だから、大正五年には電灯はなかった。迷信を信ずるのは当然かも知れない。私は人魂など見たことはないが、親たちはおつかないと言っていた。円了先生のお話以来、迷信は弱まった。当時この村は六百戸なかったが、会場の小学校の体操場があればどいっばいになったことはない。六、七百人はいたでしょう。近郷から集まった。」

「私は小学五年生、円了先生のお話は珍しかった。親たちが迷信深く、夕方はさびしく、暗くなるとこわかった。狐火、鬼火、人魂の話など、円了先生は絶対おつかないものでないと説かれた。私は子ども心に気持ちが悪くなった。」

円了の全国巡講は壮大な計画のもとに行われていたが、農村、山村、漁村などの僻地で積極的に講演をしたので、それだけ苦勞は多かつたと考えられる。それにもかかわらず、円了が苦勞話をもらすことはほとんどなかつたが、哲学館講師の島地大等には心を許した仲であつたのか、巡講の苦勞をこう語っていたという。

「先生には有名な三禁説がある。いわゆる禁酒、禁煙、禁筆である。……先生は穏やかに日本全国漫遊の大願とこれを実行する方法と用意とにわたつて語られるうちに、とくに山奥の田舎の馬車も通じない辺鄙へんぴな人々へも教育勅語の思おぼし召しを徹底させようと思えば、車にも乗れぬ、馬にも乗れぬ、旅館もない、食物も小言は言えない。まずたいていは小学校にて話をし、そのままそこで寝泊りし、時には教室のテーブルを並べてその上に寝るようなこともあり、食事などもお話にならぬ有様で、その間に、村長、校長などより地方の人情風俗をさながらに聞き取るために、それらの衣食住に不足がましきことを言うどころではなく、かつ進んで彼らと並座し、彼らの呑のむ「村酎」(どぶろく)一杯をも共にし、彼らの喫する手製のタバコをも吸わなければならぬ。こうして初めて漫遊の目的を達することができる。」

ある卒業生は、「学校時代の先生はいつも『ムツツリ』されていたが、引退後に巡講するようになってから、いつも『ニコニコ』されていた。」と言う。民衆のなかで生活することに、円了は意義を見出していたのだろう。

哲学堂の創立

大学を引退した円了は、大学の移転予定地であった哲学堂（現在の東京都中野区、哲学堂公園）の一万五〇〇〇坪の土地を、個人で買い戻すことにした。すでに一九〇四（明治三七）年に、釈迦、孔子、ソクラテス、カントの四聖を祭った哲学堂（現在の四聖堂）の一棟だけが建てられていた。引退直後はそのままであった。

円了は、一九〇六（明治三九）年から修身教会運動を始め、一年間は各地の反応を見ていた。おそらく全国巡講の可能性を確認したのであろう。円了は各地での講演会の開催費用を現地に負担させなかった。その代わりに、各地で人々の寄付を集め、お礼として書を寄贈した。集まった寄付の半額を地元に残し、半額を東京に持ち帰り、その寄付金で哲学堂を公園にするという方法を考えた。現在、各地に円了の書が残っているのはそのためである。

すでにみたように、円了は哲学館時代に「禁筆」を公言していたので、海舟の書を寄付者へのお礼にしていた（卒業生には記念に書を渡していたようであるが、高島米峰によれば、どうみても能書〔書に秀でた人〕の作ではなかったという）。しかし、海舟が一八九九（明治三二年）に亡くなってから、各地の人々の頼みに応じて、額や掛軸などの書を揮毫するようになった（この世に名を残すには書をもってす」といわれるが、哲学堂の筆塚に「恥をかくのも、今しばし、哲学堂のできるまで」と詠っているように、本人は自らの書を後世に残したくなかったようである）。

現在の哲学堂公園は、二面の野球場、六面のテニスコート、児童公園、事務所、そして往時からの哲学堂の植栽がある。円了がこの広大な土地を買ったとき、基本的な設計図を自分で描いていたことが考えられる。「四聖堂」は最初の建物であるが、「時空岡」と名づけられた平地の正面に位置し、門から入るとまず目につくのである。日本や世界の公園を見てきた円了は、世界でただ一つのユニークな公園を考えていたのであろう。なお、哲学堂公園は、二〇二〇（令和二年）に、都市公園として国の名勝に指定された。現況はYouTubeの「井上円了と哲学堂公園」で見られる。

円了は、哲学堂を修身教会の本山と位置づけただけでなく、精神修養に役立つ公園に

しようとしていた。その発想は西洋にあった。円了は、「西洋には身体を養う公園と心を養う教会堂があり、人々は教会堂で半日を過ごし、公園で半日を過ごし、これによって心と身体を養っていると考え」、哲学堂を精神修養的な公園にしようとしていた。

全国巡講開始から一年後の一九〇七（明治四〇）年から、一万五〇〇〇坪の規模をもつ公園の建設が始まった。すでに世界的な聖人を祭った「四聖堂」は完成していたので、これについて東洋の聖人を祭った「六賢台」を造り、さらに日本の聖人を祭った「三学亭」を造った。公園は平地部分と斜面部分に分けられ、境は妙正寺川が流れている。円了は川との境の部分に新たに道を造り、森の中を上から下まで一周できるようにして、下の土地を「唯物園」「唯心庭」の二つの哲学論の名前に分けて、湧水、洞窟、池、坂道などを造り、この七十七か所に、「三祖苑」（哲学の元祖である中国の黄帝、ギリシャのタレス、インドのアクシャ・パードガを祀る庭園）、「宇宙館」（講堂）、「絶対城」（図書館）、「無尽蔵」（陳列所）など、一九一五（大正四）年ごろには、現在のような哲学のテーマパークが完成した。やがて一般に公開されて、円了の目的どおりの精神修養の公園となった。なお、円了は遺言状で、井上家が哲学堂を私

有することを禁止しており、死後、財団法人によって運営された後、第二次大戦中に遺言に従って東京都に寄付された。その後、中野区に移管され、現在は「中野区立哲学堂公園」となり、区の内外から年間に一七万人が訪れ、スポーツと「心の公園」として親しまれている。

地球一周旅行の完成

全国巡講を順調に行っていた円了が、第三回の世界旅行を計画したのはいつだったろうか。現在、東洋大学には「円了文庫」と名づけられた円了の洋書コレクションが残されている。その中に、海外各国の旅行ガイドブックが何冊か入っている。一年の大半を費やす全国巡講を五年間行ったことを区切りにして、世界でこれまでに行ったことのない国を選んで、旅行の計画を立てていることがわかる。すでに、東周り、西回りと、二回にわたって世界を周遊したが、それは地球を横に回ったもので、縦に回ったことはない。そのため、南半球を目指して、第三回の世界旅行へ出発した。

一九一一（明治四四）年四月一日、南半球のオーストラリアを目指し、横浜を出航した。

このとき五三歳になっていた。当時は「人生六〇年」の時代であったが、円了のチャレンジ精神は衰えていなかった。今回は「日光丸」という日本の船で、「上等客約二〇人はみな白人なり」と旅行記である『南半球五万哩』^{マイル}には書いてあるから、日本の国際化も徐々に進んでいたと考えられる。

当時のオーストラリアまでの旅程を、日記から紹介しておこう。横浜を出発し、神戸、門司、長崎に寄港して、日本を離れ、中国では香港、広東に寄港している。その後、一五日にフィリピンのマニラに入港した。一七日、出港して赤道を越えたときのことをこう述べている。

「日本を旅立ってからまだ三十日にもならず、船は異域に入って自然の風物も目新しい。一人旅の身にとってもどうして多少の感慨なしといえよう。初めて赤道より南に身をおく人となったのだから。」

二五日、ニューギニア諸島を通過して、オーストラリアの木曜島に入港し、つぎに、二八日にオーストラリアのタウンズビルに到着した。日本を出発してから二八日目であった。日本を経ったのは春の四月であったが、南半球は秋から冬に向かっていた。ブリスベ

ン、シドニー、メルボルンを回った。その際、円了は、メルボルン大学で女子の学生が一五〇名以上、シドニー大学はその二倍の学生が学んでいることを知った。このことが、のちに、東洋大学が日本で初の男女共学校となった要因の一つと言われている。

メルボルンから船を乗り換えて南アフリカに向かったのが、五月一六日である。タスマニア島を出港したときにクジラの一群を目にしている。このとき、南半球の端まで来たことをこう述べている。

「豪州の海ははるかにして見えず、雲のかなたからくる波浪は重なるようになってきた。いよいよ南極の地はそれほど遠くではない。なぜならば、南の風は冷たいこと氷を思わせるからだ。」

南インド洋を回って南アフリカのダーバンに着いたのが六月一日で、オーストラリアからほぼ一か月かかっている。その後、喜望峰を経て、ケープタウンに入港した。しかし、円了はここで思わぬことに遭遇する。要約すれば、こう述べている。

「予定では、南アフリカに滞在して内地を視察するつもりであったが、物価がイギリスの二倍であり、また、現地では日本人を拒絶する風潮があつて、視察は断念せざるを得な

かった。」

円了は南米行きの船便を求めて、ロンドンに向かった。七月七日にロンドンに着いた。一か月の船旅であった。円了にとって三回目のロンドンである。日誌を要約すれば、こう述べている。

「ロンドンには四〇キロの市街に七〇〇万余りの人々が住んでいる。市街は山のような高層の建物もあり、道は波が打ち返すように人々が行き来している。地下鉄の中は夜も昼かと思うほど明るく、水晶宮（一八五一年の第一回万国博覧会の巨大建築物で、鉄とガラスで造られた）の中は夏にもかかわらず春のようである。日々に新しく月ごとに盛んに文化が繁栄している。世界のいかなる首都も肩を並べることにはできないところである。」

七月二一日、円了は「にわかには思い立って」北極観光船に乗る。すでにオーストラリアのタスマニア島で南極に接近したので、北極へ向かったのかもしれない。八月二八日午後六時、目的地の「欧州最北の岬端ノールカップ」に着いた。「一望すれば北極まで眼中に入る」と、日記には書いている。大いに感激した円了は、「同行とともにシャンパンを傾け、万歳を呼び」、白夜の太陽を見て港へ帰っている。

その後は、北欧のノルウェー、スウェーデン、デンマークを見聞し、ドイツ、スイス、フランスを経て、イギリスのロンドンに戻ったのが八月一八日である。円了はこの旅で、汽車を船に乗せて運ぶ、現代のフェリーを体験し、雲の上に船らしきもの、つまり「飛行船」を見て、学問の発達と実際を見て、「喜びつつ私は欧州の野を歩きまわり、両手一杯に新知識を手にして帰ろうと思う。」と述べている。

二七日、南米行きに乗船して、スペイン、ポルトガル、カナリア諸島を経て大西洋を横断し、九月一四日にブラジルのリオ・デジャネイロに入港した。ブラジルではサンパウロで、日本移民の状況を調べ、ウルグアイのモンテビデオからアルゼンチンのブエノスアイレスに、一〇月二日に到着した。当地の感想をこう述べている。

「一夜窓の前に座して、自分が異郷にいることをしみじみと思う。春風のふく十五夜、月の光は李すももの花にさしこんで香りが高い。」

アルゼンチンの現状を、「独立からわずか一〇〇年で牧場の拡張、交通機関の発達、ヨーロッパから年に二〇万人が移住し、南米第一の勢力がある。」と述べている。再びウルグアイで乗船し、嵐で有名なマゼラン海峡を渡っている。その体験をこう述べている。

「狂ったような波は天にとどくかのようになり打ち寄せ、ために帆柱をくだかんばかりに、風は摩世（マゼラン）海峡のあいだからきたる。船のベッドに横たわる人々はみな船酔いに苦しみ、海鳥が舞い上がって行くかと思えばめぐりかえってくる。」

二一日、チリのプンタアレナス市に着いた。世界の最南の市である。円了は、北極海観光で、世界最北のノルウエーのハンメルフェスト市街に行ったことを思い出して、感慨を新たにしている。チリの首都サンティアゴに着いたのは一〇月二八日である。アンデス山へ汽車で行き、「断崖にかかるように、汽車はいくつものけわしい所をのぼりつくす。連なる山々の峰の頂は雪におおわれ、あたかも海風が白波をあげているような姿である。」と述べている。

一一月一四日、日本船・紀洋丸に乗船してペルーへ向かう。二八日に首都リマに着く。日系移民の暮らしぶりと風俗を調査している。一二月一〇日、メキシコのサリナ・クルスに入港し、一六日まで滞在し、ハワイへ向かう。二九日にハワイに到着し、一月四日にハワイを出発し、二四日に横浜港に到着した。第三回の世界旅行は八か月間に及んでいる。

明治時代の社会問題研究者であった横山源之助は、当時、『大阪朝日新聞』に寄せた「伯

国（ブラジル）の視察者」という記事で、「妖怪博士の名のある井上円了氏も飄然ひょうぜんとしてリオ湾内に入ってきた。」と記している。飄然とは「ひらひらと風にひるがえるような自然体」のことを意味する。円了が気負うことなく、世界各地を「なんでも見よう」とした姿で旅をしていたことがわかる。尽きることのない好奇心の持ち主であった。

三回に及ぶ世界旅行で、円了は南極、北極の二極、五大陸を、いずれも一人旅で回って、念願であった地球一周の旅行を完成させた。旅のなかで、円了は欧米先進国の教育、政治、宗教について、実地に見聞することで多くのことを学んだ。さらには、北欧、ロシアから中国、インド、そしてオセアニア、アフリカ、南米まで、多様性に富む自然と文化があることも知った。このように、現地体験を通して活きた情報を得て、それを自らの知識とした円了は、帰国後、教育事業の構想と実践のなかで、その知識を存分に活かしていった。

いわば、円了にとって、旅の中で耳目に触れるもののすべてが活きたテキストであり、少年時代から大学を出るまで、内外の書物を渉獵しやうりやうすることで得てきた知識と経験をアップデートするものだったのである。このように、現実世界を活きたテキストとして学び、活きた学問をすることを円了は「活書活学」と表現しているが、これは、近代日本でチャレ

ンジャーとして生きる円了が身につけた独自の哲学であった。

現代の日本は、グローバル化のまっただなかにあるといわれる。だが、それは何もいまに始まったことではない。まさに、円了が生きた一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけて、日本は欧米列強を中心とするグローバリゼーションの波にさらされており、世界とともに日本も絶えず動き変化していく時代にあった。そのようななかで、日本にとどまり、書物に書かれた過去の情報のみを知識としていては、たちまち周回遅れとなるばかりか、それを挽回できなければ、チャレンジャーの座から脱落するおそれすらあった。だから円了は、リアルタイムの世界を活きたテキスト（活書）とし、活きた学問（活学）をするため、二四年のうち三度も、世界各国を視察してまわったのである。

現代のわれわれは、情報化と国際化の時代に生きている。世界がどのように変化しているのか、さまざまな側面から知ることができる。円了は一〇〇年以上前に、「活学活書」の哲学を実践して、世界はどこに向かっているのか、常にそれを探究し、行動の指針を得ている。このような姿勢は、円了が現代のわれわれに似たような時代感覚で生きたことを物語っているのではないだろうか。

全国巡講の足跡

円了は元号が大正になってすぐ、「修身教会」を「国民道德普及会」に変更した。会と
いっても、会長と会員は円了一人である。

長男の玄一は、父の趣味・道楽についてこう述べている。「父円了には道楽がない。仕
事すなわち道楽である。……しいて道楽といえば食道楽くらいだが、これも高級料理では
ない。名刺に『わが好きは豆腐、揚げ物、味噌の汁、とはいえ何でも人の食うもの』と刷
つてあることでもわかる。味噌汁は豆腐汁を好んだが、母の心尽くしで季節にはむつ（魚）
を加えた。揚げ物は野菜揚げを好み、とろろ汁も大好物だった。また身欠みがきにしんを甘く醬
油で煮つけたもの、これも喜んで食べた。……酒は好きだが、『朝はいや、昼は少々、晚
たつぷり、とはいうものの上戸ではなし』と公表し、晩年には晩酌一合を水で薄めて二合
にして飲むという具合に自制していた。これは、親が代々卒中で倒れたからでもあろう。
ただ晩年全国を巡講して、揮毫にせめられ、毎夜二、三時間しか睡眠がとれなかったこと
が多かったため、心機一転にウイスキー（当時一番やすかったダイヤモンド印が多い）を用いた。」

すでにみたように、円了の全国巡講は二期に分かれる。第一期は哲学館時代で、一八九〇（明治二三）年～一九〇五（明治三八）年の一三年間である。年齢にして三二歳～四七歳の間である。巡講日は不明分を除き、合わせて九六六日であった。第二期は修身教会・哲学堂時代で、一九〇六（明治三九）年～一九一九（大正八）年の一四年間で、巡講日は二六二一日であった。二つの期間を合わせると、延べ年数は二七年間、巡講日は三五八七日、つまり一〇年間に相当する。

残された日誌を見ると、巡講地は記されているが、市町村名は変わっている。一八八八（明治二二）年の市町村数は七万二三四であったが、いわゆる「明治の大合併」で、一八八九（明治二三）年には一万五八五九の市町村に整理された。しかし、当時の旧市町村名はその後変更されているので、現在のどの市町村に該当するのか、一九九五（平成七）年に調査した。このときの市町村数は三三三四であった。そして、当時の巡講地（二回以上）を現在の市町村に色づけして、一目でわかるようにしたのが、つぎの地図である。北海道などに白が目立つのは、開拓中であったからであるが、円了の講演が全国で行われたことが、地図化するとよくわかる。

図 (全国)



巡講地



表 8 都道府県別巡講率

		巡講率			巡講率
1	北海道	29.6	25	滋賀県	94.7
2	青森県	57.5	26	京都府	69.2
3	岩手県	78.8	27	大阪府	60.5
4	宮城県	37.1	28	兵庫県	85.4
5	秋田県	92.0	29	奈良県	43.6
6	山形県	77.1	30	和歌山県	83.3
7	福島県	67.8	31	鳥取県	78.9
8	茨城県	61.4	32	島根県	89.5
9	栃木県	65.4	33	岡山県	96.3
10	群馬県	68.6	34	広島県	78.3
11	埼玉県	66.7	35	山口県	89.5
12	千葉県	46.3	36	徳島県	41.7
13	東京都	15.0	37	香川県	82.4
14	神奈川県	24.2	38	愛媛県	70.0
15	新潟県	93.3	39	高知県	17.6
16	富山県	100.0	40	福岡県	61.7
17	石川県	89.5	41	佐賀県	70.0
18	福井県	88.2	42	長崎県	66.7
19	山梨県	44.4	43	熊本県	68.9
20	長野県	53.2	44	大分県	88.9
21	岐阜県	81.0	45	宮崎県	57.7
22	静岡県	65.7	46	鹿児島県	46.5
23	愛知県	66.7	47	沖縄県	7.3
24	三重県	79.3		全国	59.5

(東京23区は1市とした)

その後、平成の大合併があり、市町村数は一七二〇となり、さらに町村名の変更が相次いだので、二〇一三（平成二五）年に旧巡講地をもとに、再びデータを都道府県別・巡講年別に整理した。その結果が表8である。市町村数に対する「巡講率」は、六〇%である（詳細は、三浦節夫「井上円了の全国巡講データベース」『井上円了センター年報』第二二号、二〇一三年を参照されたい）。

一九一八（大正七）年に円了は、六〇歳になっていた。哲学館の卒業生たちが、円了の還暦（六〇歳）の祝賀会を開きたいと提案したところ、円了は「もう四、五年歩くと、日本全国津々浦々、残りなく歩きつくすことになるから、そのときは、全国漫遊完了祝賀会というようなことでやってもらおうかと思っている。そのときまで、お祝いはお預けだ。」と言っていた。

円了の頭の中では、巡講地と未巡講地がはっきりしていたようである。

最後の巡講

一九一八（大正七）年一二月、前年の巡講が国内・一七二日、朝鮮・五九日と、例年のように二〇〇日を超えていたので、その疲れと神経痛療養のために、神奈川県湯河原温泉

にいた。二四日に帰京して、翌一九一九（大正八）年一月三日に初孫の民雄の誕生を喜んだが、元旦から風邪に冒され、咳が続き、一六日から再び神奈川県葉山で療養に専念した。二二日から東京を出発して静岡県下を巡講し、三月二四日に夜行で東京に戻り、東洋大学卒業式に出席して、同日夜一時の汽車で東京を出発し、再び静岡県を巡講した。同県の巡講から五月三日に帰京した。

その後の中国巡講のチラシを見ると、三月一〇日に書かれているから、予め日程が出来上がっていた。そのため、家で二日間という短時間で準備をして、五月五日に東京駅から中国へ出発した。この巡講について、長男の玄一はこう語っている。

「父が渡支（中国へ渡る）したのは、精神的に日支人（日本人と中国人）の結合を計るのが最大の目的で、大体の行程を上海、漢口、北京、天津、營口、大連と場所を定めておりましてけれども、その間、奥深く支那（中国）にも入り込む覚悟で出かけたが、生憎排日運動の火の手が揚がり、僻村に入ることは危険を感じ、且つ諸方からの諫止（かんし、思いとどまらせる）に従い、六月九日には福岡に嫁に行っている妹の滋野の所に寄って帰京する予定であった。」という。

一〇日に上海に到着してから、杭州、蘇州、鎮江、南京、蕪湖、九江、漢口、北京、天津で講演などをした。この間に家族に宛てたハガキには、「物価が高く、日本排斥運動（日本の二か条の要求に反対する「五四運動」）の高まり、南京虫に悩まされ、早く帰りたい。」と書いていたが、なんとか巡講を終えて、最後の講演地である大連へと向かった。五月二六日付けで、弥勒菩薩みろくぼさつの絵ハガキに書いてあることを現代文に直すと、「昨日無事に北京に到着しました。本日は終日、市内を見物中です。二十九日より万里長城を一覧し、三十一日に天津に移ります。」と自宅に連絡があった。当初から北京には一週間滞在の予定であった。六月五日、円了は大連での講演に向かっていた。大連で円了を迎えたのは、哲学館大学を卒業した新田神量じんりょうである。新田は、一九一〇（明治四三）年に真宗大谷派東本願寺大連別院を開設し、初代輪番りんぱん（代表者）として約三〇年間別院の運営にあたっていた。その新田に円了からハガキがきたのは六月一日であった。大連で三、四泊の予定であるからという。新田は、到着の晩は西本願寺別院の幼稚園で「活仏教」、翌日午後一時に東本願寺別院で「仏教の人生観」、四時から満鉄本社で「幽霊論」のタイトルで講演、翌日旅順見学、林権助長官訪問、という日程を作っていた。

新田は、五日朝の列車で、大連の前の大石橋で、円了を出迎えて同乗した。「円了先生は私をご覧になり、ニコニコして、やあ君、来てくれましたか、もう安心した。」と言われた。二人は三〇分ほど昼食をともにした。その会話の一部を再現しておこう。

円了が携帯してきたブドー酒を出して、「一杯飲め」と言われたので、「私は先生が禁酒禁煙されたと聞いていましたが」と言うと、「いや禁煙はしているが、酒は近年少しずつ飲むことにして、健康上甚だよい。」と返事し、新田が大連の予定を伝えて、「私は只今先生をお見受けするところ、大分お疲れの様子ですから、途中のヤマトホテルで少時お休みのうえ、会場へおでましになればよろしい。」というと、先生は言下に「駅から会場へ行って講演することに慣れているから休む必要はない。」「死んでから墓の下でゆっくり休む。」「講演後揮毫をするから沢山墨汁の用意を頼む。」と言われた。

新田が「私共は学生時代に、先生は常々努力奮闘、『自分の運命は自分で拓け』とおおせられました。」と言うと、先生は「自分は年五十をすぎて運命に順応することにした。」と言われた。

会食後、円了は日本の新聞などを読んで、大連到着を待った。当日の様子は、新田が詳

細に記している。長い引用になるが、正確だと思われるので、紹介しておこう。

「八時着連（大連到着）。直ちに迎えの人と馬車に同乗会場にお着き、聴衆は三百人余、八時四十分講演開始（「戦勝の結果と戦後の経営」、十五分程して突然お顔色が変わりクラクラとして倒れましたので二、三の人に支えられたが、先生はちよつと休んで話をつづけるから聴衆を待たしておいてくださいと言われた。主事室に案内して腰をおかけになりましたので、聴衆中の上野、板谷、脇屋の三医師は先生が長途のご旅行でにわかにお疲れが出たのでしよう、大したことはありませんと、代わる代わる肩をもんでおられました。段々様子が変わりましたので、隣りの畳の部屋に移して横になっていただき、二回注射してもらいましたら、意識は明瞭になり、明日は東本願寺別院と満鉄本社云々と言われましたが、次第に昏睡状態になり、何のお積もりか右の手の指を折り数えられ大きな疝いびきをされるようになった。

そこで満鉄病院の戸谷銀三郎博士の来診をお願いしましたところ、博士は診察の上これは「急性脳溢血のういつけつ」で、もう何とも手当の仕方なく回復の見込みは絶対ありません、二、三時間後ご臨終ですと言われましたので、驚き思わず落涙（涙を流す）しました。私は妻と

泣きながらお側に見守っておりましたが、翌午前二時四十分頃全く絶命せられましたので、電話で門徒を呼び寄せ、御遺骸を（東本願寺大連）別院にお移しすることにし、一方直ちに東京のご留守宅に長文の打電をしました。別院の客室に御遺骸を安置し読経、二〇余人でお通夜をいたしました。

七日午前一一時頃、三名渡連する（東京から大連へ行く）との返電がありましたので、戸谷博士と相談して防腐注射をしてもらい、東京からのおいでを待った。七、八両日多数信徒と共に通夜をしました。一〇日午後八時息子玄一、大学代表三輪政一、中学代表安藤弘の三氏が着院せられました。それまで林長官、満鉄総裁を始め数十人の弔問がありました。来連の三氏と相談の上、一二日午後二時別院で仮葬儀を行いました。官民一八〇余名の会葬者あり、三時御遺骸を大家屯大葬場で茶毘（火葬）にし、翌一三日午前九時収骨しましたが、感慨無量涙とともに読経いたしました。」

円了は六一歳の人生を、このようにして終えた。

エピローグ

これまで、円了の人生と主な思想についてみてきた。六一年間の著書の総数は一八〇冊を超え、最後の著書は『真怪』で、その原稿を渡して、最後の巡講に出発している。多数に及ぶ著書を分けると、哲学、宗教・仏教、倫理、心理、妖怪学、随筆・その他と、複数の分野にわたっている。

また、事業としては、東洋大学（哲学館）、京北中学校、京北幼稚園という、総合学園を創立した。円了は教育者であるが、学校内だけにとどまっている人ではなく、全国各地で講演と寄付を集めた。さらに、引退後は社会教育活動に専念し、一人で全国巡回講演（全国巡講）を行い、同時に哲学のテーマパークである哲学堂というユニークな教育施設（これを円了は精神修養的公園と形容した）を建設するなど、生涯学習の普及にも取り組んだ。多忙な日々の中に三回の世界旅行を行い、地球一周の旅を完成させている。

これらを合わせて考えると、実に多面的な業績を残したと考えられるが、円了のチャレンジを総括すれば、一つのことには集約される。それは「日本人の心の近代化」ではないだ

ろうか。当時の日本人の心は、島国的で西洋や世界のことを知らず、迷信にとりつかれるなど、その生活は科学的な合理性に欠け、小社会の枠内で生きる人々であった。政府はこのような人々に対して、改善の手をさしのべることなく、政治経済面での近代化を急ぐあまり放置してきた。

円了は、哲学という「ある意味特殊」な教育の普及を通して、当時の日本人の「もの見方・考え方」に新たな道を拓いてきた。「日本人の改造」や「改良」とはそのことを指し、「遠大なもの」と「活発なもの」を身につけさせようとした。さまざまな実業に従事する生活者に、合理的な知恵を得る方法を教え、合理的な知恵の通路を開くことを教えた。学校教育から社会教育へと展開するチャレンジは、このような目的意識のもとに行われた、壮大な取り組みであった。現代の国際化・情報化社会に通じる道であった。

円了の残した言葉で現代人に通じるものは多いが、そのなかでも学生に対して常々語った「自分の運命は自分で拓け」は、とくに印象深いものである。円了は「活」という文字をよく使った。「活論」「活書」「活学」「活社会」などがあり、意味を考えると、現代の「就活」「婚活」「終活」などに通じる。明治という新しい文明開化の時代に生きた円了は、日

本と世界の発展を自分で実際に体験した。世界と日本が激しく進歩しながら発展していく様相を総括して、これからの時代は「活社会」であると表現した（円了は進歩と同時に退化という側面も忘れてはいなかった）。それから一〇〇年が経過して、政治、経済、文化のグローバル化が進み、世界はより一層一つになり、激動しながら発展している。

そのような世界や社会の中でわれわれは、どのように生きていくのか。「自分の運命は自分で拓け」というのは、「自分で考え、判断して、チャレンジを実行する」ことである。つまり、「人間の主体性」がもつとも重要であるというのが、「円了の哲学」である。現代は、日本や世界中の国々、中央や地方など、人々がさまざまに、どこでも、生きてゆける時代になった。円了の時代とわれわれの現代との間には、否定できないほどのあらゆる違いがあるにもかかわらず、時を超えて、円了の思想と行動には、われわれの共鳴を呼び起こすものがある。

井上内了略年譜

- 一八五八 (安政5年)
- 2・4 越後国(新潟県)、真宗大谷派慈光寺の長男として誕生(新暦3月18日)
- 一八六八 (慶応4・明治元年) ……10歳
- 3月 石黒忠恵の漢学塾に学ぶ(明治2年4月まで)
- 一八六九 (明治2年) ……11歳
- 8月 木村鈍叟(旧長岡藩士)に漢学を学ぶ(明治5年12月まで)
- 一八七一 (明治4年) ……13歳
- 4・2 東本願寺にて得度
- 一八七三 (明治6年) ……15歳
- 5・29 高山楽群社に入り洋学を学ぶ
- 一八七四 (明治7年) ……16歳
- 5・5 新潟学校第一分校(旧長岡洋学校)に入学し洋学を学ぶ
- 一八七七 (明治10年) ……19歳
- 9月 京都・東本願寺の教師教校英学科に入学
- 一八七八 (明治11年) ……20歳
- 4・8 東本願寺留学生として上京
- 9月 東京大学予備門に入学
- 一八八一 (明治14年) ……23歳
- 9月 東京大学文学部哲学科に入学

- 一八八四 (明治17年) ……26歳
- 1・26 井上哲次郎、加藤弘之、西周、三宅雪嶺らと相談して「哲学会」を創立
- 10月 東本願寺へ学校設立の上申書を提出。そのため、石黒忠恵よりの文部省就職の斡旋を断る
- 一八八五 (明治18年) ……27歳
- 7・10 東京大学文学部哲学科を卒業
- 10月 国費給費生に選ばれ、研究生となる。東本願寺より「印度哲学取調」を命ぜられる
- 10・27 第一回哲学祭を挙行
- 一八八六 (明治19年) ……28歳
- 1・24 不思議研究会を開催
- 3月 帝国大学大学院生となる
- 春 熱海で病氣療養中に、哲学館設立の構想をつくる
- 11・1 金沢藩医吉田淳一郎の娘・敬と結婚
- 一八八七 (明治20年) ……29歳
- 1月 哲学書院設立
- 2・5 『哲学会雑誌』を創刊
- 6月 『哲学館開設ノ旨趣』を發表
- 7・22 私立学校設置願を東京府知事に提出
- 9・16 哲学館を創立。麟祥院 (現在の東京都文京区) で開館式を挙行
- 一八八八 (明治21年) ……30歳
- 1・8 『哲学館講義録』を創刊し、通信教育を開始
- 4・3 政教社が雑誌『日本人』を創刊、同社の創設に参加
- 6・9 第一回海外視察 (欧米) に出発
- 一八八九 (明治22年) ……31歳
- 6・28 海外視察より帰国
- 8・28 郷里の父に宛て、仏教が危急存亡の重大時局にあり帰郷して住職となることを断る手紙を出す

- 8月 「哲学館将来ノ目的」で将来日本主義の大学を設立することを発表
- 9・11 台風のため新築中の校舎全棟倒壊
- 11・1 本郷区駒込蓬萊町の新校舎に移転し、寄宿舎も開設
- 11・13 哲学館移転式（新校舎落成開館式）を挙行
- 一八九〇（明治23年）……32歳
- 3・10 文部省に教員免許無試験検定の認定を申請
- 4・13 哲学館で日曜講義を開催
- 7・6 哲学館内に哲学研究会を結成
- 11・2 哲学館専門科設立の基金募集のため全国巡講を開始（明治26年2月まで継続）
- 一八九三（明治26年）……35歳
- 11月 『哲学館講義録』（第七学年度）として「妖怪学講義」を発行。迷信打破
- のため、妖怪研究会を設立
- 一八九四（明治27年）……36歳
- 教員免許無試験検定の認定を再申請
- 一八九五（明治28年）……37歳
- 9月 哲学館入試制度となる
- 学制を改め教育学部、宗教学部の二学部を設置
- 一八九六（明治29年）……38歳
- 1月 東洋大学科設立と東洋図書館建設の旨趣を発表
- 3・24 第二回全国巡講開始（明治35年9月まで継続）
- 6・8 論題「仏教哲学系統論」により文学博士の学位を受ける
- 12・13 郁文館より失火、哲学館は類焼のうえ全焼
- 一八九七（明治30年）……39歳
- 1・10 漢学専修科の開講式を挙行

- 4・8 仏教専修科の開講式を挙行
- 7・17 哲学館、原町（現在の文京区白山校地）に移転
- 8・25 宮内省より恩賜金三〇〇円を受ける
- 一八九九（明治32年）……41歳
- 2・26 京北中学校の開校式を挙行
- 7・10 哲学館、教員免許無試験検定の認可を受ける
- 9月 学制を変更し、教育部と哲学部とし、また、漢学専修科を教育部に、仏教専修科を哲学部に合併
- 一九〇〇（明治33年）……42歳
- 4・2 文部省より修身教科書調査委員を委嘱される
- 一九〇一（明治34年）……43歳
- 9・16 学制を改革し、予科を第一科と第二科に、本科教育部と哲学部をそれぞれ第一科と第二科に分ける
- 10・25 内閣より高等教育会議議員を嘱託される
- 一九〇二（明治35年）……44歳
- 4・1 「哲学館大学部開設予告」を発表
- 10・25 哲学館卒業試験に文部省視学官の監査を受ける
- 11・15 第二回海外視察（欧米およびインド）に出発
- 12・13 文部省、哲学館の中等教員無試験検定の特典を剥奪する（哲学館事件発生）
- 一九〇三（明治36年）……45歳
- 2・1 ロンドンより哲学館事件に関する指示を送る
- 4・20 哲学館、円了の命により文部省へ教員免許資格に関する嘆願書を提出
- 7・27 海外視察より帰国
- 9・5 「広く同窓諸子に告ぐ」を発表

- 9・14 修身教会設立趣意書を全国に配布
- 10・1 私立哲学館大学と改称し、専門学校令による設置を認可される。その後、中等教員無試験検定校の「再出願」の動きが始まる。学内対立が起こる
- 一九〇四 (明治37年) ……46歳
- 1・15 第三回全国巡講を開始
- 2・11 『修身教芸雑誌』第一号を発行
- 4・1 哲学館大学の開校式を挙行。哲学館大学長に就任。大学部を開設
- 哲学堂 (現在の東京都中野区・哲学堂公園の四聖堂) 開堂式を挙行
- 夏 神経的疲労を覚え始める。学校を解散し、講習会組織に改めることを考える
- 10月 哲学館大学革新事件起こる (12月)
- 一九〇五 (明治38年) ……47歳
- 4月 神経的疲労が再発、引退の意志を起こす。その後、快方に向かう
- 5・3 京北幼稚園の開園式を挙行
- 9月 哲学館大学、京北中学校の一層の拡張を計ったのち引退することを考える
- 12月 (初旬) 二度も庭前で卒倒しそうになる
- 12・13 哲学館大学記念会を上野精養軒で行い、帰宅後引退を決意する
- 12・28 前田慧雲、湯本武比古への学校譲渡の契約を完了 (29日)
- 一九〇六 (明治39年) ……48歳
- 1月 哲学館大学長、京北中学校長を辞し、名誉学長・名誉校長となる
- 4・2 哲学堂に引退。修身教会拡張に従事
- 修身教会運動のため、全国を巡講する (大正8年まで)
- 6・28 哲学館大学の「私立東洋大学」への

- 改称が認可される
- 7・4 財団法人私立東洋大学の設立が認可される
- 一九〇七 (明治40年) ……49歳
- 5・13 文部省より教員免許無試験検定校の取扱を再認可される
- 一九〇九 (明治42年) ……51歳
- 11月 哲学堂に哲理門・六賢台・三学亭が建築される
- 一九一一 (明治44年) ……53歳
- 4・1 第三回海外視察(オーストラリア、南アフリカ、欧州、南米)に出発
- 一九一二 (明治45・大正元年) ……54歳
- 1・22 海外視察より帰国
- 8月 修身教会を「国民道德普及会」と改称
- 一九一五 (大正4年) ……57歳
- 10・24 哲学堂図書館(絶対城)の落成式を
- 10月 挙行。現在の哲学堂公園の景況がほぼ出来上がる
- 一九一九 (大正8年) ……61歳
- 2・3 「教育上私立学校に対する卑見」を朝日新聞に発表
- 5・5 中国、満州(東北地方)の巡講に出発
- 6・6 6月5日大連で講演中脳溢血を起こし、6日午前2時40分逝去
- 6・22 東洋大学葬を挙行

井上円了主要著作

〔分野別年代順〕

●哲学

- 哲学一夕話 第一編……………一八八六(明治一九)年七月……………井上円了(四聖堂蔵版)
- 哲学一夕話 第二編……………一八八六(明治一九)年一月……………井上円了(四聖堂蔵版)
- 哲学一夕話 第三編……………一八八七(明治二〇)年四月……………哲学書院
- 哲学要領 前編……………一八八六(明治一九)年九月……………令知会
- 哲学要領 後編……………一八八七(明治二〇)年四月……………哲学書院
- 純正哲学(哲学総論、講義録)……………一八九一(明治二四)年二〜九月……………哲学館
- 哲学早わかり……………一八九九(明治三二)年二月……………開発社
- 哲学新案……………一九〇九(明治四二)年二月……………弘道館
- 奮闘哲学……………一九一七(大正六)年五月……………東亜堂書房
- 宗教
- 真理金針 初編……………一八八六(明治一九)年二月……………山本留吉
- 真理金針 続編……………一八八六(明治一九)年一月……………山本留吉
- 真理金針 続々編……………一八八七(明治二〇)年一月……………長沼清忠

- 仏教活論序論……………一八八七(明治二〇)年二月……………哲学書院
 仏教活論本論 第一編 破邪活論……………一八八七(明治二〇)年二月……………哲学書院
 仏教活論本論 第二編 顕正活論……………一八九〇(明治二三)年九月……………哲学書院
 實際的宗教学(講義録)……………一八九〇(明治二三)年一〜九月……………哲学館
 理論的宗教学(講義録)……………一八九一(明治二四)年一月……………哲学館
 ……一八九二(明治二五)年一〇月……………哲学館
 宗教哲学(講義録)……………一八九二(明治二五)年一月……………哲学館
 ……一八九三(明治二六)年一〇月……………哲学館
 教育宗教関係論……………一八九三(明治二六)年四月……………哲学書院
 外道哲学(仏教哲学系統論第一編)……………一八九七(明治三〇)年二月……………哲学館講義録出版部
 印度哲学綱要……………一八九八(明治三一)年七月……………金港堂書籍
 大乘哲学(講義録仏教科第十四輯)……………一九〇五(明治三八)年二月……………哲学館大学
 活仏教……………一九一二(大正元)年九月……………丙午出版社
 ●倫理
 倫理通論 第一編……………一八八七(明治二〇)年二月……………普及舎
 倫理通論 第二編……………一八八七(明治二〇)年四月……………普及舎
 日本倫理学案……………一八九三(明治二六)年一月……………哲学館
 忠孝活論……………一八九三(明治二六)年七月……………哲学書院

- 勅語玄義……………一九〇二（明治三五）年一〇月……………哲学館
 ●心理
 心理摘要……………一八八七（明治二〇）年九月……………哲学書院
 記憶術講義……………一八九四（明治二七）年二月……………哲学館
 失念術講義……………一八九五（明治二八）年八月……………哲学館
 心理療法……………一九〇四（明治三七）年一月……………南江堂書店
 ●妖怪学
 妖怪玄談 第一集 孤狗狸の事……………一八八七（明治二〇）年五月……………哲学書院
 妖怪学講義（講義録、合本六冊）……………一八九六（明治二九）年六月……………哲学館
 妖怪百談……………一八九八（明治三一）年二月……………四聖堂
 靈魂不滅論……………一八九九（明治三二）年四月……………南江堂書店
 通俗絵入 続妖怪百談……………一九〇〇（明治三三）年四月……………哲学書院
 哲学うらなひ（妖怪叢書第一編）……………一九〇一（明治三四）年二月……………哲学館
 改良新案の夢（妖怪叢書第二編）……………一九〇四（明治三七）年一月……………哲学館
 天狗論（妖怪叢書第三編）……………一九〇三（明治三六）年二月……………哲学館
 迷信解（妖怪叢書第四編）……………一九〇四（明治三七）年九月……………哲学館
 おばけの正体……………一九一四（大正三）年七月……………丙午出版社
 迷信と宗教……………一九一六（大正五）年三月……………至誠堂書店

- 真怪……………一九一九（大正八）年三月……………丙午出版社
- 随筆・その他
- 欧米各国政教日記 上編……………一八八九（明治二二）年八月……………哲学書院
- 欧米各国政教日記 下編……………一八八九（明治二二）年二月……………哲学書院
- 星界想遊記……………一八九〇（明治二三）年二月……………哲学書院
- 円了茶話……………一九〇二（明治三五）年一月……………哲学館
- 甫水論集……………一九〇二（明治三五）年四月……………博文館
- 西航日録……………一九〇四（明治三七）年一月……………鶏声堂
- 円了講話集……………一九〇四（明治三七）年三月……………鴻盟社
- 南船北馬集 第一編……………一九〇八（明治四一）年二月……………修身教会擴張事務所
- 南船北馬集 第二編……………一九〇九（明治四二）年一月……………修身教会擴張事務所
- 南船北馬集 第三編……………一九〇九（明治四二）年一月……………修身教会擴張事務所
- 南船北馬集 第四編……………一九一〇（明治四三）年一月……………修身教会擴張事務所
- 南船北馬集 第五編……………一九一〇（明治四三）年二月……………修身教会擴張事務所
- 南半球五万哩……………一九一二（明治四五）年三月……………丙午出版社
- 南船北馬集 第六編……………一九一二（明治四五）年四月……………修身教会擴張事務所
- 南船北馬集 第七編……………一九一三（大正二）年六月……………国民道德普及会
- 南船北馬集 第八編……………一九一四（大正三）年二月……………国民道德普及会

南船北馬集	第九編	一九二四(大正三)	年七月	国民道德普及会
南船北馬集	第一〇編	一九二五(大正四)	年二月	国民道德普及会
南船北馬集	第一編	一九二五(大正四)	年二月	国民道德普及会
哲窓茶話		一九二六(大正五)	年五月	磯部甲陽堂
南船北馬集	第二編	一九二六(大正五)	年六月	国民道德普及会
南船北馬集	第三編	一九二七(大正六)	年六月	国民道德普及会
南船北馬集	第一四編	一九二八(大正七)	年一月	国民道德普及会
南船北馬集	第一五編	一九二八(大正七)	年一月	国民道德普及会

なお、現代の読者のために、井上円了の主要な著書を読みやすくし、巻末に解説を付した『井上円了選集』が刊行されている。同選集に収録されている著書は、つぎのとおりである。

井上円了選集

- 第一卷——哲学一夕話(第一・二・三編)、哲学要領(前・後編)、純正哲学講義(哲学総論)、哲学一朝話、哲学新案
- 第二卷——哲学早わかり、哲界一瞥、哲窓茶話、奮闘哲学
- 第三卷——真理金針(初・続・続々編)、仏教活論序論
- 第四卷——仏教活論本論 第一編 破邪活論、仏教活論本論 第二編 顕正活論、活仏教
- 第五卷——仏教通観、仏教大意、大乘哲学

第六卷——日本仏教、真宗哲学序論、禪宗哲学序論、日宗哲学序論

第七卷——純正哲学講義、仏教哲学、印度哲学綱要、仏教理科、破唯物論

第八卷——宗教新論、日本政教論、比較宗教学、宗教学講義 宗教制度、宗教哲学

第九卷——心理摘要、通信教授、心理学、東洋心理学

第一〇卷——仏教心理学、心理療法、活用自在 新記憶術

第一卷——倫理通論、倫理摘要、日本倫理学案、忠孝活論、勅語玄義、教育総論、教育宗教

關係論

第一二卷——「館主巡回日記」(『哲学館講義録』等)、南船北馬集(第一・二・三編)

第一三卷——南船北馬集(第四・五・六・七・八編)

第一四卷——南船北馬集(第九・十・十一・十二編)

第一五卷——南船北馬集(第十三・十四・十五・十六編)

第一六卷——妖怪学講義(第一・二分冊)

第一七卷——妖怪学講義(第三・四分冊)

第一八卷——妖怪学講義(第五・六分冊)

第一九卷——妖怪玄談、妖怪百談、続妖怪百談、靈魂不滅論、哲学うらない、改良新案の夢、

天狗論、迷信解

第二〇卷——おぼけの正体、迷信と宗教、真怪

第二一卷——妖怪学、妖怪学講義録、妖怪学雑誌、妖怪学關係論文等

第二二卷——外道哲学

第二三卷——欧米各国政教日記（上・下編）、西航日録、南半球五万哩

第二四卷——星界想遊記、円了随筆、円了茶話、円了漫録

第二五卷——甫水論集、円了講話集、初期論文

『井上円了選集』については、現在、東洋大学附属図書館の「学術情報リポジトリ」に収録されているので、インターネットで簡単にアクセスできるようになっている。

また、井上円了の思想・行動・業績については、東洋大学井上円了研究会の研究成果をまとめた、つぎのような本がある。

『井上円了の学理思想』井上円了研究会第一部会、一九八九年。

『井上円了と西洋思想』井上円了研究会第二部会、一九八七年。

『井上円了の思想と行動』井上円了研究会第三部会、一九八七年。

その他の文献（著書・論文・関係資料）に関する情報は、『井上円了関係文献年表』（同第三部会編、一九八七年）にまとめられている。

東洋大学の歴史については、『ショートヒストリー東洋大学』（二〇〇〇年）、『東洋大学百年史』（通史編、部局史編、資料編、年表・索引編、一九八八〜一九九五年）、『図録東洋大学一〇〇年』（一九八七年）が刊行されている。

なお、井上円了の研究誌として、『井上円了センター年報』、『国際井上円了研究』が継続刊行されている。

刊行の経過

この本は、一九八七（昭和六二）年の創立一〇〇周年に記念出版された『井上円了の教育理念』（イトルは哲学科の飯島宗亨氏、監修は社会学科の高木宏夫氏、執筆は三浦節夫）を、大幅に増補・改訂したものである。『井上円了の教育理念』は、東洋大学の原点を呼び起こすものとして好評を得て、その後三〇年間にわたり、新入生などに配布されてきた。

一九九〇（平成二）年に、塩川正十郎理事長によって、法人立の井上円了記念学術センターが設立され、創立者・井上円了や東洋大学史の研究が本格的に行われるようになった。同センターから『東洋大学百年史』、『井上円了選集』、『井上円了関係文献年表』が出版されるようになって、学内外からの研究発表が起こり、それまで不明であった事柄が明らかになってきた。これらの成果を吸収して、『井上円了の教育理念』の改訂をしなければならなかったが、そのタイミングをはかっているうちに、時間だけが経過していった。

二〇一四（平成二六）年に、センターは「井上円了研究センター」という教学組織として改組された。初代の柴田隆行センター長から、井上円了の「教育理念」を含んで、円了の人生と思想で

完結するように改訂の提案があったので、それに取り組んできた。改訂の方針としては、いわゆる「偉人伝」ではなく、「人間・円了」をありのままに書くということにした。

書いてみると、改訂というよりも新版に近くなったので、この企画と下書きの一部を、矢口悦子学長に検討していただいたところ、「進めてください」との賛意をいただいた。その言葉を励みに、研究者の佐藤厚氏、北田建二氏の全面的な協力を得て、この本は完成した。矢口学長と佐藤・北田の両氏に改めて感謝申し上げます。

二〇二一（令和三）年四月一日、これまでの井上円了研究センターにおける事業を研究部門として位置づけ、井上円了記念博物館を附置するとともに事務室を設置して、新たに「井上円了哲学センター」として活動を開始することになった。本書はその開設記念として出版された。

最後に、この本のタイトルは、学生のレポートの中から採用したものである。記して謝意を表します。

井上円了哲学センター
研究員 三浦節夫

あとがき

昨年、二〇二〇年は「新型コロナウイルス感染症パンデミックの年」として人々の記憶に刻まれることと思います。二〇二一年を迎えた現在もなお、それは続いており、世界中の人々が未曾有の事態に影響を受けています。医療や福祉に関わる人々は自ら命の危険にさらされながらも、強い使命感の下で対応を続け、人々の生活を根幹から支える労働に従事する人々も黙々とその働きを続けています。そうした人々の努力によって守られながら、私たちもまた感染対策を進め、学びを継続するためにあらゆることに挑戦してきました。

世界中の人々がこの事態への「チャレンジャー」としてこの困難を受け止め、知恵と経験を交流しながら、適切な情報を選びとり、判断し、新しい方法を駆使して命と暮らしを守りたいと奮闘する姿は、本書で語られてきた円了先生の考え方と幾重にも交差します。以下では、三点ほど挙げてみたいと思います。

第一に、「他者のために奮闘する」という人間の在り方です。その姿はまさに医療や福祉関係の人々であり、その周辺で機器や材料を生産し続けている人々であり、医療を維持し福祉を機能

させ、生活を成り立たせることに貢献しているすべての人々の姿に重なります。人間としてできる限りの努力をする姿を見て、自らもそのように生きたい、と感じた人も多くいると思います。さらには、自粛生活をしながら授業を受けるという学生としての努力も、自己及び他者を感染から守るための奮闘と言えましょう。こうした生き方は、『学校法人東洋大学の中期計画(2020 GRAND DESIGN 1010-1014)』に示された目標である「地球社会の明るい未来を拓く―他者のために自己を磨く―」にも通じるものです。

第二に、「正しく恐れる」という言葉が人口に膾炙かいしゃしましたが、この言葉の意味するところは、円了先生が『妖怪学講義』や亡くなる三か月前に刊行された『真怪』において述べられたものの考え方と極めてよく似ているということです。人々が恐れている怪しい事象のほとんどは科学的に説明がつくものであり、それらに惑わされる必要はない、しかし、それでも簡単に解明できないこともあり、それこそが「真怪」であるというお話です。

マスコミやネット上に拡散されている情報の中には、一面的なデータや根拠のない話の引用、感情的なコメントが多数含まれています。その中から、「正しい情報」を選びとり、冷静に対処するには、何が正しいかを見抜く力がなければなりませんから、科学的な洞察という努力はもちろんのこと、さらにその先にそれでも簡単には解けない謎を「真怪」として追究する姿勢を持つことが必要だと示唆してくださっているように思います。「真怪」まで迫ること、つまり哲学す

ることで、人間としての生き方の本質を追求することが、「正しく恐れる」ためには不可欠であると思います。円了先生は、本質を見極め、より深く真理の探究をする場として大学を考えておられた、その在り方が「諸学の基礎は哲学にあり」という本学の教育理念として語られてきているのです。

第三に、世界の知恵を結集することで自らの位置が見えてくるという発想です。円了先生は幼少期からの膨大な読書と研鑽により、東洋と西洋という学問の在り方の違いを体得し比較分析を続け、生涯に三度の世界旅行においてそれを実際に検証されました。さらには、得られた知見を民衆教育に還元するために、人生の後半は社会教育に捧げたのです。

宗教、地理、歴史、そして文化の違いを超えて、共通する真理に迫ろうとする姿勢、それが今、パンデミックに対処する際に求められています。新型コロナウイルスの正体の解明は、世界共通のテーマです。その解明によってなされる治療や対策も基本的には共通すると思います。しかし、この状況をどのように受け止めて、経済活動や人々の文化的な生活を位置付けるか、教育においてどのように生かしていくか、には違いが生まれます。そこで問われるのは、人間としてどのような生き方や文化の享受を望むか、何をもって幸福とするか、という各々の価値観であり、そのことは制度や政治、社会の在り方にジワリジワリと染み込んでいきます。それゆえに、人間としての価値について深く考えること、自分という個を形成し、自己を既定している文化的な規範や

受けてきた教育、喜びの源泉ということに向き合うことが求められるのです。

以上のように、円了先生の思想や言葉と行動には、現在私たちが置かれている困難な状況を乗り越えていくための智慧ちえがたくさん読み取れます。読者の皆さんも自分なりに探し出してみてください。

最後に、円了先生の描く教育の壮大さを再度確認しておきましょう。

この世界は実に広大無辺の教育場にして、万物万端を備具せる大学校なり。星辰も教師なり、山川も教師なり、ないし禽獸虫魚、木竹草苔みな教師ならざるなし。その範圍無限というべし。(井上円了「教育総論」『哲学館講義録』一八九二年・一八九三年掲載、『井上円了選集』第一巻所収)

明治二〇年代、近代的な学校教育制度が整えられ、それに家庭教育を合わせて教育を捉える方法が見え始めていたころ、円了先生は学校生活という限られた時間の先にある大人の学びに深い関心を寄せ、五二九一回という講演を全国各地で実施され、聴衆は一四〇万人を超えたと本書でも紹介されています。円了先生は、家庭教育や学校教育の、そして社会教育のさらに先に「自然」を考えておられ、広大無辺な世界としての「自然」と向き合う自己教育の思想を表明しておられたと読み取れます。

私たちが学び知り得たと思っていることは、世界の広さに比べてみれば、わずかな部分でしか

ありません。世界には未知の存在や現象があふれており、そこに謙虚に耳を傾け、深い探究心をもつて学びを続けていこうではないかと述べられているのです。

さあ、知の探究を続け、世界の幸福と明るい未来に貢献できるように自己を磨いてチャレンジを続けましょう。

東洋大学

学長 矢口悦子

チャレンジャー井上円了

自分の運命は自分で拓け

二〇二二（令和三）年九月二六日 第二版発行

編集

東洋大学井上円了哲学センター

著者

三浦節夫

編集協力

佐藤厚 北田建二

発行者

学校法人東洋大学

東京都文京区白山五―二八―二〇 〒一―二―一八六〇六

印刷所

株式会社フクイン

東洋大学